

# 豊 後 府 内 10

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (6)

2008

大分県教育庁埋蔵文化財センター

# 豊 後 府 内 10

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (6)

2008

大分県教育庁埋蔵文化財センター



中世大友府内町跡調査区遠景（下中央）



出土遺物写真

# 序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受けて実施した大分駅付近連続立体交差事業に伴う中世大友府内町跡第40次調査の発掘調査報告書です。

大分市には旧石器時代の丹生遺跡や縄文時代の横尾貝塚、弥生時代の下郡遺跡を初めとして、古代の豊後「国府」、中世の大友氏府内町跡があるなど古い歴史と文化をもつ地域です。

今回調査した遺跡は中世大友府内町跡のうち、大友氏館跡東側を調査した報告書です。調査では16世紀の遺構・遺物を多数検出し、これらの事実からこの地で活発な生活行動が展開されたことを明らかにすることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護に向けて、また地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、発掘調査から報告書刊行に至るまで多くの方々の御理解と御協力をいただきました関係各位に、衷心から感謝申し上げます。

平成20年3月25日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 福 田 快 次



## 例 言

1. 本書は大分市元町に所在する中世大友城下町跡第40次調査区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分駅付近連続立体交差事業の実施に伴い、県土木部大分駅周辺総合整備事務所の委託を受けて大分県教育委員会が実施した。
3. 現地調査は平成16（2004）年4月20日から5月25日にかけて実施し、高橋信武・生野令子・古庄博之が担当した。
4. 現地での写真撮影・遺構実測等は調査員が担当した。
5. 遺物洗浄・遺物注記・遺物接合・遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については、大分県教育庁埋蔵文化財センターで調査員及び整理作業員が行った。遺物洗浄・注記・接合・復原作業は安部典子・後藤一美が担当し、遺物実測は高橋信武のほか、赤嶺博美・小野千恵美・田嶋智子・西嶋スミエが担当した。
6. 包含層出土の遺物に対する注記は上層から、B（黒色土の上位）、A層（黒色土）、C層（黒色土直下）、D・E（黒色土下位の黒褐色土）、F（1・区の地山直上2）とした。
7. 出土遺物ならびに図面・写真等は、埋蔵文化財センター（大分市大字中判田字ビワノ門1977）において保管している。
8. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。また、国土座標は2002年4月1日改正以前の座標値を使用している。
9. 本書の執筆・編集は高橋信武が行った。

# 目 次

第1章 調査の経緯と周辺の環境 .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 遺跡の立地と環境 .....	1
第2章 調査 .....	1
1. 調査の概要 .....	1
2. 層序 .....	1
3. 遺構と遺物 .....	1
①最上層の遺構と遺物 .....	8
②上層の遺構と遺物 .....	11
③中層の遺構と遺物 .....	24
④下層の遺構と遺物 .....	30
⑤最下層の遺構と遺物 .....	32
第3章 まとめ .....	65

写真図版

# 図 版 目 次

第1図 中世大友城下町と調査区の位置 .....	3
第2図 町割り（左）と調査区（右） .....	4
第3図 第40次調査区の位置 .....	5
第4図 調査区北壁層序図 .....	6
第5図 調査区東・西・北層序図 .....	7
第6図 最上層遺構・攪乱配置図 .....	8
第7図 最上層の攪乱 .....	9
第8図 SD1実測図 .....	10
第9図 SD1出土遺物実測図 .....	10
第10図 上層遺構配置図 .....	11
第11図 SK5～7実測図 .....	12
第12図 SK5～7出土遺物実測図 .....	13
第13図 SP3・SK4・8・12実測図 .....	14
第14図 3区遺構実測図 .....	15
第15図 SK4・12出土遺物実測図 .....	16
第16図 SD19実測図 .....	17
第17図 SD19出土遺物実測図 .....	17
第18図 SX26実測図 .....	18

第19図	SX26出土遺物実測図	19
第20図	SK24実測図	20
第21図	SK2出土遺物実測図	21
第22図	SK31実測図	22
第23図	SK31出土遺物実測図	23
第24図	中層遺構配置図	24
第25図	SK 8 実測図	25
第26図	SK 8 出土遺物実測図	26
第27図	SK11出土遺物実測図	27
第28図	SK11実測図	27
第29図	SK23・25実測図	28
第30図	SK25出土遺物実測図	28
第31図	SK29・34実測図	29
第32図	SK29・34出土遺物実測図	29
第33図	下層遺構配置図	30
第34図	SK33実測図	31
第35図	SK33出土遺物実測図	31
第36図	最下層遺構配置図①	32
第37図	SK42出土遺物実測図	33
第38図	SX46・SD44・SK45・47実測図	34
第39図	SK47出土遺物実測図	35
第40図	SK50実測図	36
第41図	SK48遺構及び出土遺物実測図	37
第42図	SK48出土銭貨実測図	38
第43図	最下層遺構配置図②	39
第44図	SK46出土遺物実測図	39
第45図	1・2区の標高4.4m前後の遺物出土状況	40
第46図	平面図にある遺物実測図	41
第47図	包含層出土遺物実測図	42
第48図	包含層出土遺物実測図	43
第49図	包含層出土遺物実測図	44
第50図	包含層出土遺物実測図	45
第51図	包含層出土遺物実測図	46
第52図	包含層出土遺物実測図	47
第53図	包含層出土遺物実測図	48
第54図	包含層出土遺物実測図	49
第55図	包含層出土遺物実測図	50
第56図	包含層出土遺物実測図	51
第57図	包含層出土遺物実測図	52
第58図	包含層出土遺物実測図	53
第59図	包含層出土遺物実測図	54
第60図	包含層出土遺物実測図	55

第61図	包含層出土遺物実測図	56
第62図	包含層出土遺物実測図	57
第63図	錢貨実測図	58
第64図	土層図中の遺物実測図	58
第65図	第13次調査区との関連	66

## 表 目 次

第1～8表	出土遺物観察表	59～64
第1表	遺構一覧表	67

## 写真図版目次

### 巻頭写真図版

写真図版 1	69
写真図版 2	70
写真図版 3	71
写真図版 4	72
写真図版 5	73
写真図版 6	74
写真図版 7	75
写真図版 8	76

# 第1章 調査の経緯と周辺環境

## 1. 調査に至る経過

大分駅高架

大分県では、大分駅周辺の整備を進めており、大分駅高架化事業に伴い線路の高架化及び位置の小規模な移動等が行われる。JR日豊本線・豊肥本線は現在の場所から折り返したように南側に高架として作り替えられるため、敷地内の遺跡が発掘調査の対象となっている。この一帯は中世大友氏の城下町があった場所であり、今日までに国道10号の西側では大友府内町跡の第5次調査（平成11～13年度）、第8次調査（平成12年度）、第10次調査（平成13・14年度）が行われ、東側では第7次調査（平成12・13年度）、第16次調査（平成13年度）が行われて、すべて発掘調査報告書が刊行済みであり、中世段階はもとよりそれ以前の古代遺跡の存在も明らかにされている。今回報告する第40次調査区は国道10号とJRとが交差する場所にあたり、大分駅周辺総合整備事務所の工事箇所であるため、その委託を受けて大分県教育委員会が下記の体制で発掘調査を実施したものである。

## 2. 調査の体制

所在地	大分市元町	
調査期間	平成16（2004）年4月20日～5月25日	
調査面積	170㎡	
事業主体	大分駅周辺総合整備事務所	
調査指導者	河原純之（千葉大学文学部教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授） 小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授） 坂井秀弥（文化庁記念物課埋蔵文化財担当調査官）	
調査主体	大分県教育委員会	
調査組織	埋蔵文化財センター所長	伊藤正行
	次長兼総務課長	益永孝則
	調査第一課長	高橋 徹
調査担当	主幹	高橋信武
	嘱託	生野令子
	嘱託	古庄博之

## 2. 遺跡の立地と環境

縄文時代

別府湾に注ぐ大分川下流域は、屈曲した古河川がいくつも平野の下に埋没している。右岸の下郡では土地区画整理事業や県道米良バイパス建設工事に伴う発掘調査により、縄文時代後期（約3,500年前）の遺物が広域に散漫に出土している。今までの所、後世の遺物に伴い攪乱状態で発見される事が多いが、下郡桑苗遺跡では貯蔵穴1基も検出されており、大分平野下流域の一部では縄文後期には生活できる状態になっていたことが分かる。

弥生時代

弥生時代になると急激に遺跡が増加する。低地部では、初めは大分川右岸の自然堤防上や明野丘陵の裾部、大分川左岸では市街地西側の田室地区の砂丘上、市街南部の上野丘陵裾の砂丘上等平野周辺部にみられるが、中期・後期になると全域に分布するようになる。

古墳時代

古墳時代の遺跡も同様である。古墳は東側の明野丘陵の崖面に横穴墓群が造られる。

古代

7世紀後半になると、左岸地域には壬申の乱で活躍する人物や評段階の官衙遺構が現れる。8世紀以降、上野丘陵に豊後国府が設置されたと考えられている。一方、右岸では下郡という名が示す



中世

ように国府の下に位置づけられる大分郡衙が位置したと考えられている。大友城下町地域においても、JR日豊本線の南、国道10号の東である第7次調査区で検出した建物跡は、国府から海部郡衙（大分市城原）に向かう渡河点に関わる遺構の可能性が指摘されている。他の調査区でも同じく、古代の遺構・遺物が一定量出土しているが、明確な性格は判明していない。9世紀代までは同様の状況で推移するが、10世紀頃から13世紀にかけて、この地域から遺構・遺物が減少する。大友城下町地域では、14世紀になると広範囲に遺跡が出現する。

## 第2章 調査

### 1. 調査の概要

第40次調査区は大友氏館跡の南東側に位置する。

調査区はJR日豊本線・豊肥本線のすぐ南側に隣接しており鉄道の安全の為、工事区域全体を調査することは出来なかった。調査区の南側は金池放水路というコンクリートで作られた大型溝が東西方向に走っていた。調査区の端は溝に向かって斜面となっていて、調査が進むにつれて、下層に向かうにつれて調査可能な部分が南側に拡大していった。

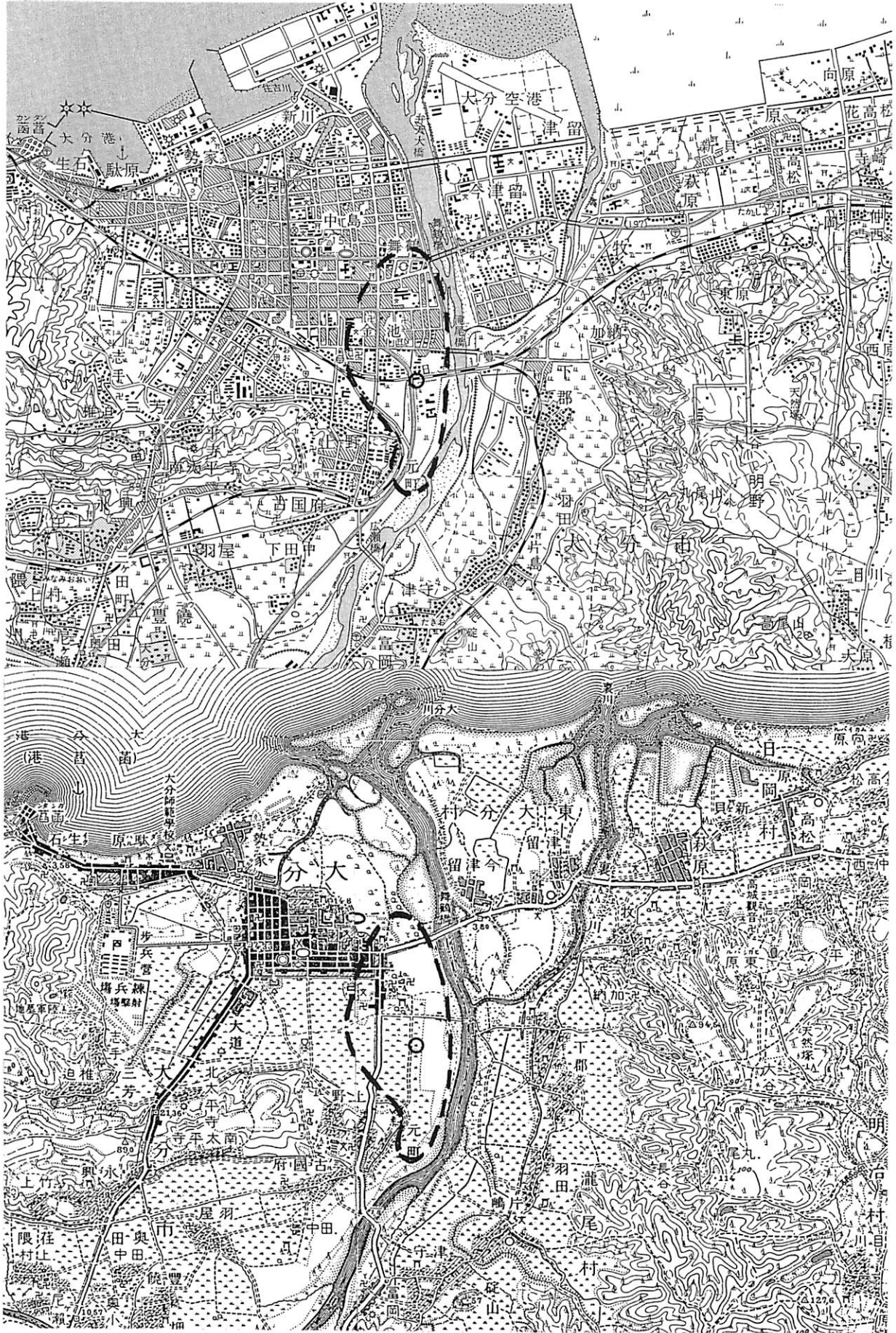
傾斜地

また、大友第40次調査区は調査前の地形は平坦であったが、掘り下げが進むにつれて中央部分から東では東部に向かって地形が傾斜する状況だった。しばらくの間、全域を水平に掘り下げて調査したため、西部は古い面で、東部はそれより新しい遺物包含層を調査しているといった状態が続いた。したがって遺構番号の付け方は調査終了時点で見直せば西部の古い遺構に若い数字がつき、東部の新しい遺構に老いた番号が付くという状況にもなった。特に東部では、西から東に向かって廃棄された土層が細かく堆積していたため、調査時点で順序正しく遺物を採り上げることが出来なかった。残念ながら報告書作成段階でもその影響を消すことは出来ないままであった。

調査の経過について、概略を記しておく。2004年4月20日、表土剥ぎと現場プレハブの設置、機材・発掘道具の移動を行い、26日から攪乱層の除去、壁面の削りだしを実施。27日、攪乱土坑・溝の掘り下げ。鉄道の伴う配線を埋設した溝が東西に走っているのを掘りあげた。この時点では調査区北側層序を上層から、1層（攪乱層）・2層（旧表土）・3層（水田層）・4層（灰褐色土。この層まで重機で表土剥ぎを行った）・5層（暗灰褐色土）・6層（暗灰茶褐色土）・7層（暗褐色土）・8層（整地層）である。配線埋設溝は5層に掘り込んでいた。28日、東部でS1を完掘。4層を埋土としていた。S2を西端の5層上面で検出、完掘。但し埋土は4層ではなく褐色の強いもの。中央部と東端の5層を下げる。南縁の攪乱との境界線を全体的に出す。5月10日、西部は5層（水田床土）を下げる。11日、中央部は褐色硬土の下に黒色土となる。12日、SK11の北東部に焼土が広がる。14日SD19を検出、掘り下げる。17日、SK23から緑色のガラス出土。18日、SK11の外側に向かって包含層の調査。遺物は黒色土と下層の褐色土との境界付近から主に出土。19日、SK24を終了し、地山である褐色土・黒色土を下げる。24日、S46をS45が切ることを確認。

### 2. 層序

調査区東部には土師器を纏めて廃棄した状態の堆積層が重複していた。その付近の遺構との上下関係について、触れておきたい。中央部のSK11は30層に該当する高さから掘り込まれている。SK24はSK11よりも下層の33層付近から掘り込まれている。3区東端の土器を多量含む層（e層）は標高的にはSK29やS43の少し上である。西側のS46とした遺物包含層はほとんどS39やS42、i層と区別し難い。SK44はわずかにこれよりも下から掘り込まれている。上記全部よりも上層の10層は



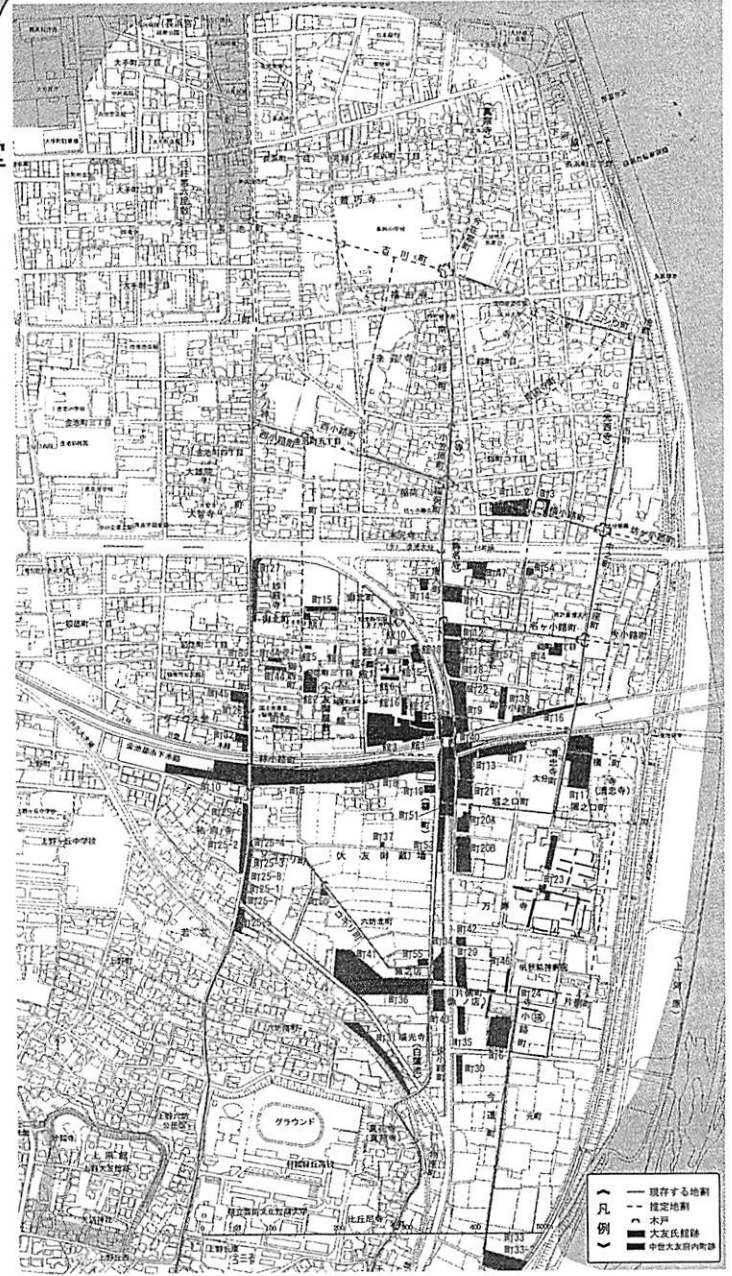
第1図 中世大友城下町と調査区的位置 (1/5万図 上1981年・下1901年)

## 府内古図と字図から見る府内町の構造



- 古図に見える社寺**
- あ. 大友館
  - い. 万寿寺
  - う. 祐向寺
  - え. ダイウス堂
  - お. 大智寺
  - か. 大雄院
  - き. 妙厳寺
  - く. サイノ神
  - け. 本光寺
  - こ. 稲荷
  - さ. 探隠寺
  - し. 善巧寺
  - す. 福田寺
  - せ. 瑞光寺
  - そ. 真花寺
  - た. 比丘尼寺
  - ち. 極楽寺
  - つ. 白竹悪六屋敷
  - ぬ. 金剛宝戒寺(古図外)
  - て. 蔵場(府内古図A・B類に記載なし)
  - と. 光西寺(府内古図A類に記載なし)
  - な. 称名寺(府内古図A類に記載なし)
  - に. 清忠寺(府内古図A・B類に記載なし)

- 府内古図(A類)に見える町名**
- | 〔府内〕                              | 〔松末〕          |
|-----------------------------------|---------------|
| 1. 松末町                            | 26. 下市町       |
| 2. 松末町                            | 27. 稲荷町       |
| 3. 名ヶ小路町                          | 28. 中ノ町       |
| 4. 土庫町(→檜物町)                      | 29. 辻之町       |
| 5. 市町                             | 30. ニシウ町      |
| 6. 清忠寺町                           | 31. 小笠原町      |
| 7. 御北町(→於北町)                      | 32. 南小路町      |
| 8. 御西町                            | 33. 長国寺町      |
| 9. 御南町(A類に記載なし)<br>(「やまきかうぢの事か?」) | 34. 横小路町      |
| 10. 魚之店(瑞光寺町→魚町)                  | 35. 穴打町       |
| 11. 西小路町                          | 36. 長池町       |
| 12. 今在家町                          | 37. 古川町       |
| 13. 御所小路町                         | (新府では千手堂町に入る) |
| 14. 御内町                           | 38. 坊之小路町     |
| 15. 堀之口町                          |               |
| 16. 今小路町                          |               |
| 17. 横町                            |               |
| 18. 松末小路町                         |               |
| 19. 上町                            |               |
| 20. 中町                            |               |
| 21. 下町                            |               |
| 22. 御西下町                          |               |
| 23. 片側町                           |               |
| 24. ノコギリ町                         |               |
| 25. 寺小路町                          |               |
- 〔千手堂〕**
- 39. 今道町
  - 40. 後小路町
  - 41. 小物座町
  - 42. 千手堂町(→天神町)
  - 43. 三宝院町
- 伊勢参宮橋にでる町名  
— 新府内城下町に移転した町



第2図 町割り(左)と調査区(右)(大分市歴史資料館2005「都へのあこがれ」より)

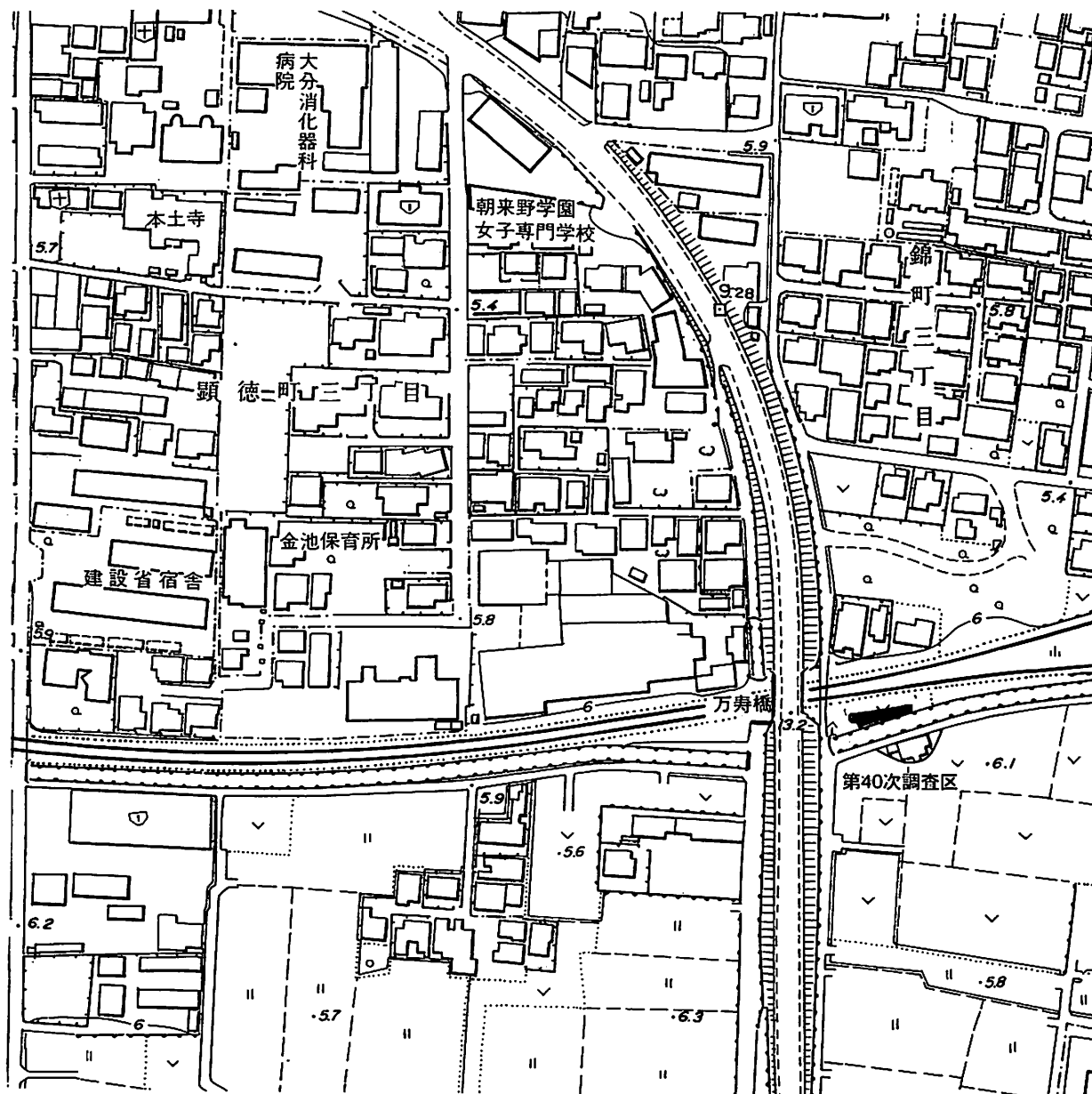
包含層

断面図で窪地状を示すが、この部分はSK31としたもの同一である。2区付近の包含層出土の遺物に対する注記は上部層の水平堆積部分を除いて上から、B（黒色土の上位）、A層（黒色土）、C層（黒色土直下）、D・E（黒色土下位の黒褐色土）、F（1・2区の地山直上）とした。これは第28図の層序を基にした分層である。

### 3. 遺構と遺物

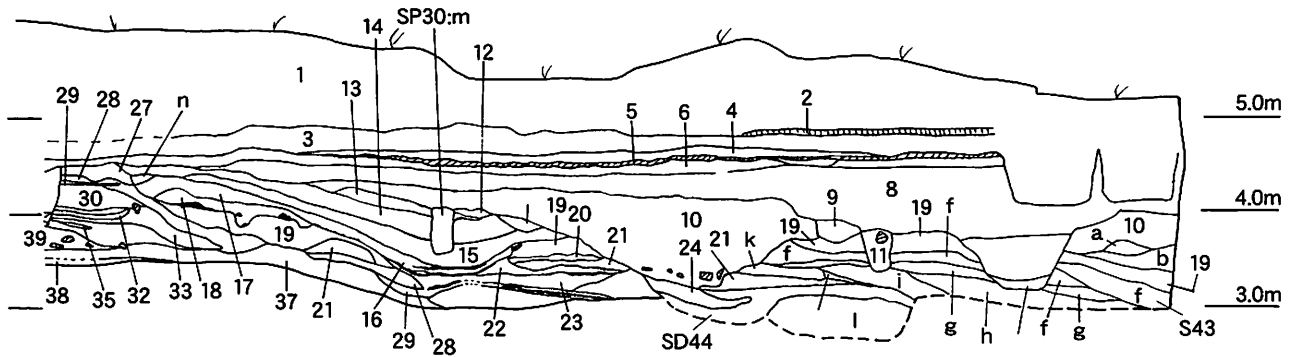
本調査区では複数の遺構面を検出した。何より特徴的な点は、中世段階本来の地形が東に向かって傾斜し、西側から低地を埋め立てるように多数の薄い土層が重複していたことである。

層序は最上部に厚さ1m弱の鉄道建設に伴う客土（第4図1・2層）があり、旧表土（3層）と続く。下に硬化した茶褐色酸化土層（5層）があり、水田の床土と判断される。この面までは水平堆積しているが、この下の8層は砂質土が東に向かって厚くなるように堆積しており、水田としては

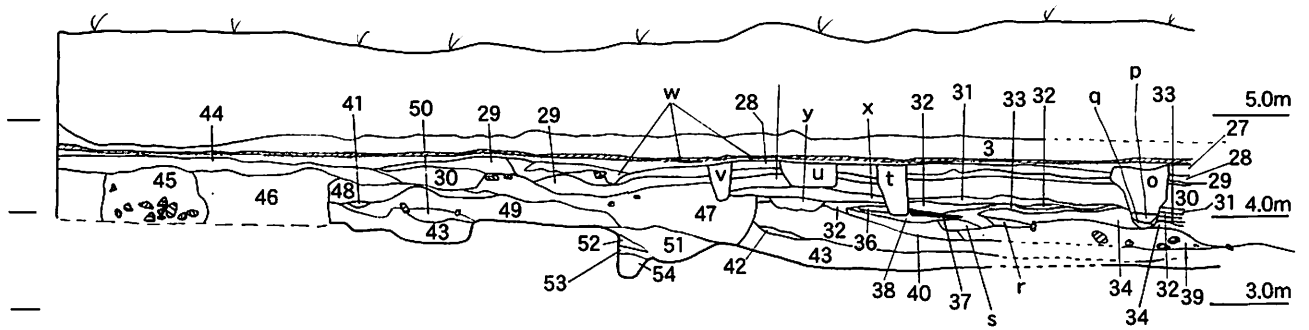


第3図 第40次調査区の位置 (1/2,500)

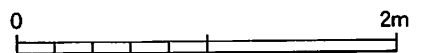




- |                                      |                          |                     |
|--------------------------------------|--------------------------|---------------------|
| 1: 客土。                               | 25: s44                  | 49: 明茶褐色土。細粒で軟質。    |
| 2: 3cm大の小石を多量含む砂層。                   | 26: 茶褐色砂質土。炭化物・焼土塊を含む。   | 50: 茶褐色。炭化物の塊を多く含む。 |
| 3: 旧表土。暗褐色砂質土層。                      | 27: 明茶褐色土。               | 51: 灰茶褐色土。硬い。S49    |
| 4: 水田層。                              | 28: 明茶褐色土。               | 52: 茶褐色土。S49        |
| 5: 水田床土の酸化して硬化した部分。明褐色土。             | 29: 茶褐色土。炭化物少量が混じる。      | 53: 暗茶褐色土。S49       |
| 6: 水田土層。明褐色。                         | 30: 暗黒褐色土。砂利を多く含む。       | 54: 茶褐色土。S49        |
| 7: 6と同じ。                             | 31: 灰茶褐色土。炭化物・土器片が混じる。   |                     |
| 8: 明褐色砂質土。SD1                        | 32: 明茶褐色土。               |                     |
| 9: S26                               | 33: 灰茶褐色土。炭化物・土器片を含む。    |                     |
| 10: 暗茶褐色土・炭化物・焼土塊を含む。10'は10層よりも少し暗い。 | 34: 茶褐色土。                |                     |
| 11: 暗茶褐色土。                           | 35: 砂層。                  |                     |
| 12: 灰白色砂層。                           | 36: 明茶褐色土。炭化物を含む。        |                     |
| 13: 砂層。                              | 37: 炭化物層。                |                     |
| 14: 茶褐色土。炭化物・土器片をまばらに含む。             | 38: 明茶褐色土。               |                     |
| 15: 明茶褐色土。炭化物・黄褐色土塊を含む。              | 39: 茶褐色土。                |                     |
| 16: 土器片主体の層。                         | 40: 暗黄褐色土。少量の炭化物を含む。砂質。  |                     |
| 17: 明茶褐色土。炭化物・黄褐色土塊を含む。              | 41: 暗茶褐色土。小礫混じり。         |                     |
| 18: 17層とほぼ同じ。炭化物は多い。                 | 42: 茶褐色土。                |                     |
| 19: 茶褐色土。砂混り。炭化物塊を少量含む。              | 43: 明茶褐色土。S48            |                     |
| 20: 黒褐色土と下層の砂が混じる。                   | 44: 明茶褐色土。炭化物・焼土をまばらに含む。 |                     |
| 21: 茶褐色砂質土。                          | 45: 灰茶褐色土。軟質。SE36        |                     |
| 22: 灰褐色砂質土。炭化物を含む。                   | 46: 明茶褐色土。少量炭化物を含む。SE36  |                     |
| 23: 明茶褐色土。上部に炭化物の薄い層がある。             | 47: 茶褐色土。細粒で硬質。炭化物を含む。   |                     |
| 24: 粘性ある茶褐色砂層。                       | 48: 明褐色土。砂混じり。           |                     |



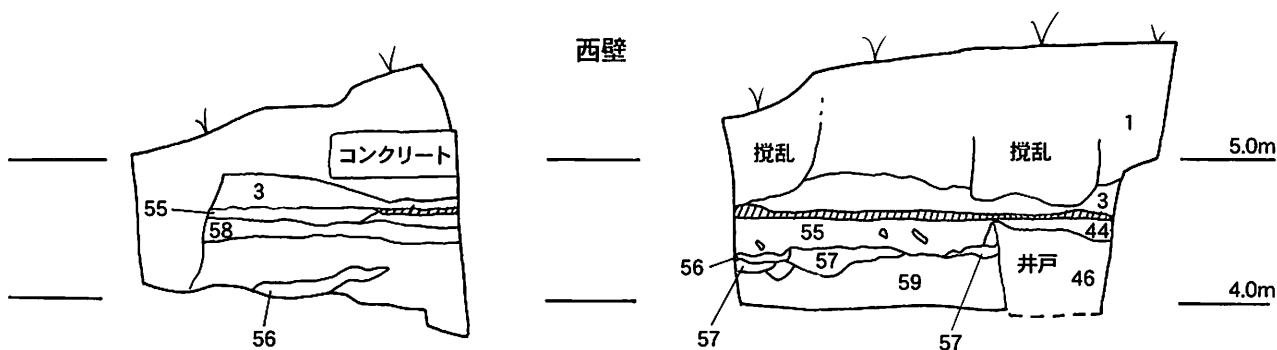
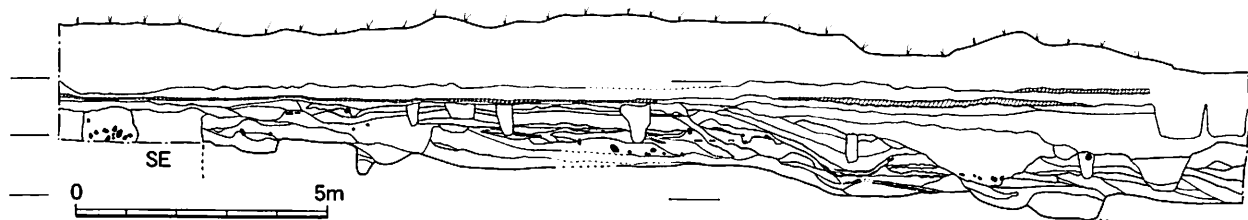
- |                       |                           |
|-----------------------|---------------------------|
| a: 茶褐色土がまばらに混じる暗褐色土。  | m: 黒色土をまばらに含む暗褐色土。        |
| b: 暗褐色土。              | n: 茶褐色土。軟質。S38            |
| c: 暗褐色土。SD19          | o: 茶褐色土。下位層は軟質で、炭化物を含む。   |
| d: 茶褐色土。              | p: 上層よりも軟い。               |
| e: 暗褐色土。土器片を多量含む。     | q: 暗褐色土。                  |
| f: 茶褐色土。さらさらしている。     | r: 灰茶褐色土。粘性あり。            |
| g: 茶褐色土。粘質。           | s: 茶褐色土。                  |
| h: 暗褐色土。粘質。           | t: 30層と類似。やや軟い。           |
| i: hより黒く、土器片を多量含む。S39 | u: 同上。                    |
| j: 灰褐色土。炭化物の薄層あり。     | v: 28層と類似。                |
| k: 明茶褐色土。             | w: 砂質土。                   |
| l: 茶褐色土。              | x: 赤褐色土・茶褐色土の混じり。土器多量詰まる。 |
|                       | y: 土器を含む暗茶褐色土。            |



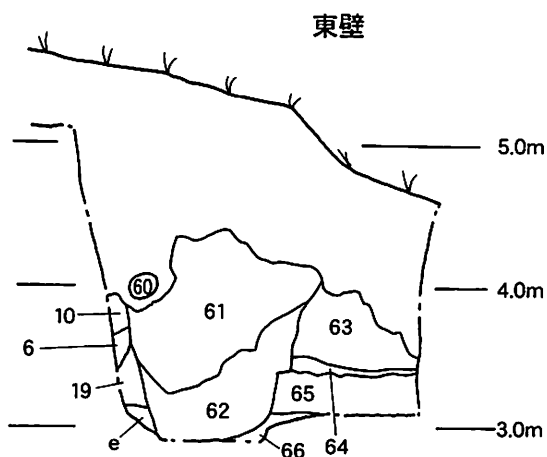
第4図 調査区北壁実測図



利用されていないとみられる。6層からは近世の煙管が出土。東部の8層中には幅広の溝状遺構(SD1)があるが、近世のものである。下面で検出した溝状遺構(SD19)から16世紀末の遺物が出土した。これから下は斜めに堆積する状態で、調査終了時点での旧表土からの深さは西部で1m、東部で2mであった。小面積の調査区であったが、地形の傾斜のために、同時存在の遺構を調査時点で捉えつつ調査を進めることが出来なかった。斜面に投げ捨てた状態の遺物群相互の前後関係の把握も困難だった。



- 55: 色土。焼土を多量含む。
- 56: 黒褐色土。
- 57: 明褐色土。軟質。
- 58: 灰褐色土。
- 59: 茶褐色土。



- 60: 空間。
- 61: 炭化物を少量含む黒茶褐色土。
- 62: 黄褐色土斑を含む暗褐色土。
- 63: 明褐色土。
- 64: 暗褐色土。玉砂利をまばらに含む。
- 65: 粘性のある明茶褐色土。
- 66: 砂質土を含む暗褐色土。

第5図 調査区西壁(上)・東壁実測図

鉄道関係

### ①最上層の遺構と遺物

#### 概要（第6図）

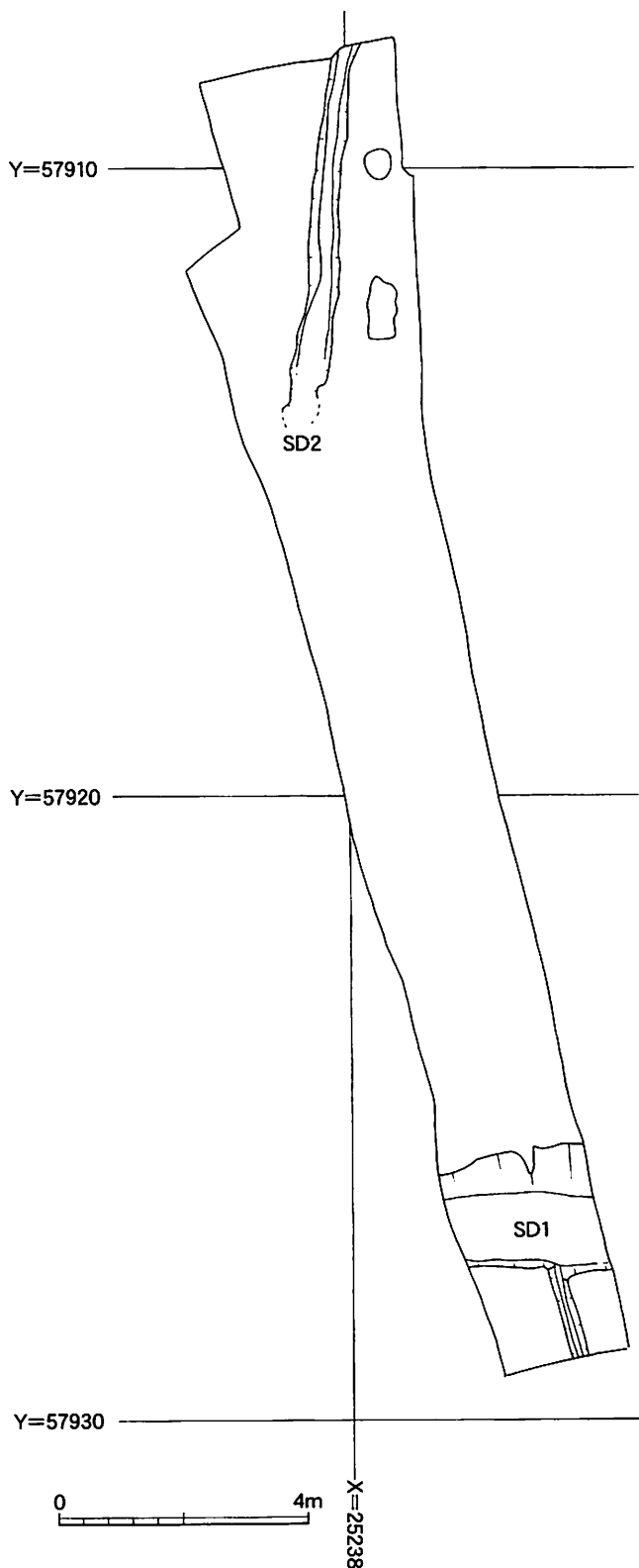
客土・床土を除去した段階で攪乱の溝・土坑を検出した。西端部の1区から2区の溝状のもの、及び東端部にあり東西方向に走る溝状のものは鉄道関係の配線用掘り込みである。2区の長方形土坑は電柱用のものである。水田地帯が鉄道用地になってからの攪乱類である。

#### 溝状遺構

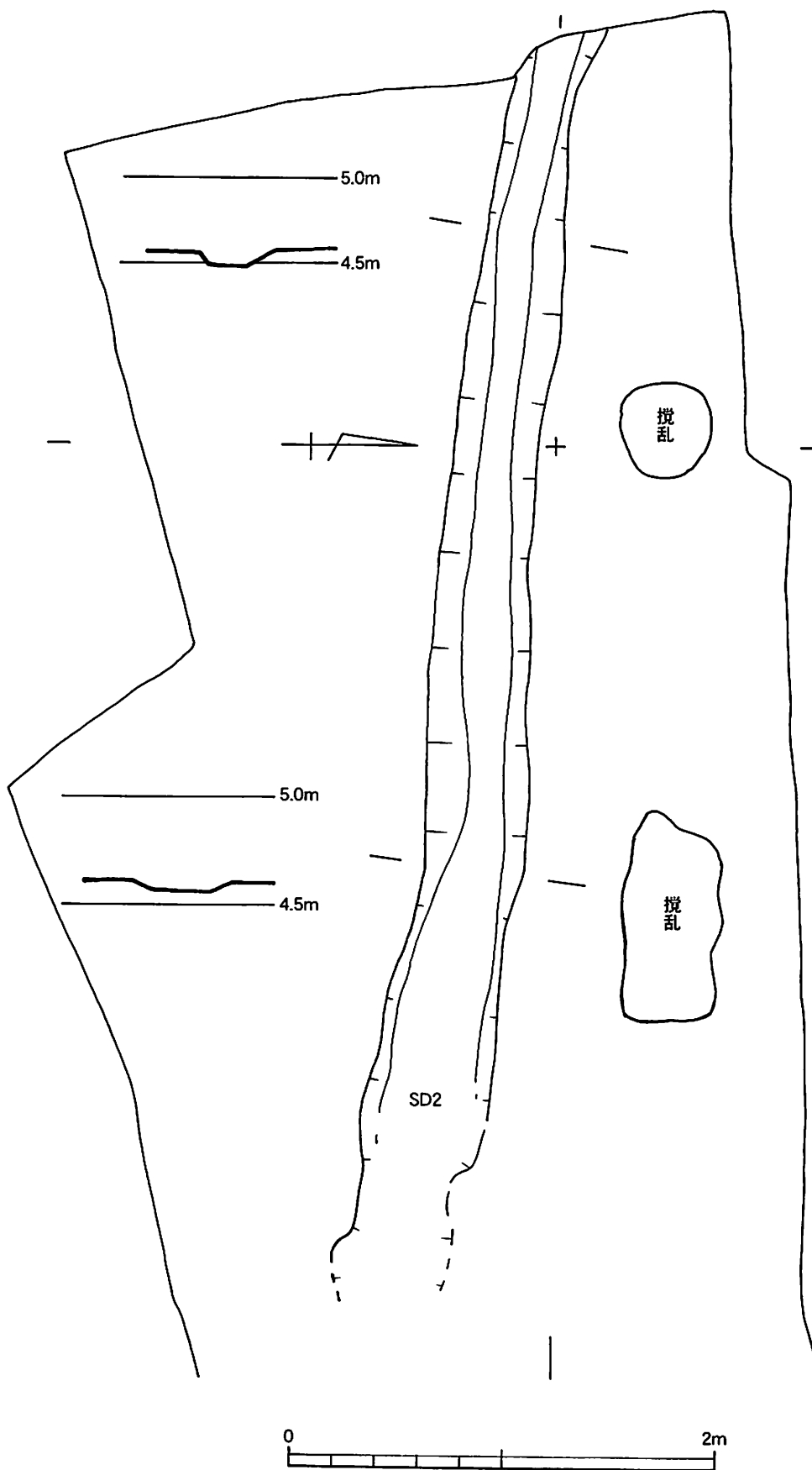
SD1（第8図） 東端部で検出した溝状遺構SD1は上面幅約2m、深さ約0.5mの規模で、埋土である4層は上層の8層（明褐色砂質土）とほとんど同じであり、近世以降の遺構と推定する。5層（水田床土で酸化硬化層）に掘り込む形で検出した。

SD1出土遺物（第9図1・2） 1は型押成型の皿で、中国南部製。2は備前焼鉢で外底面にヘラ描きの紋様がみられる。

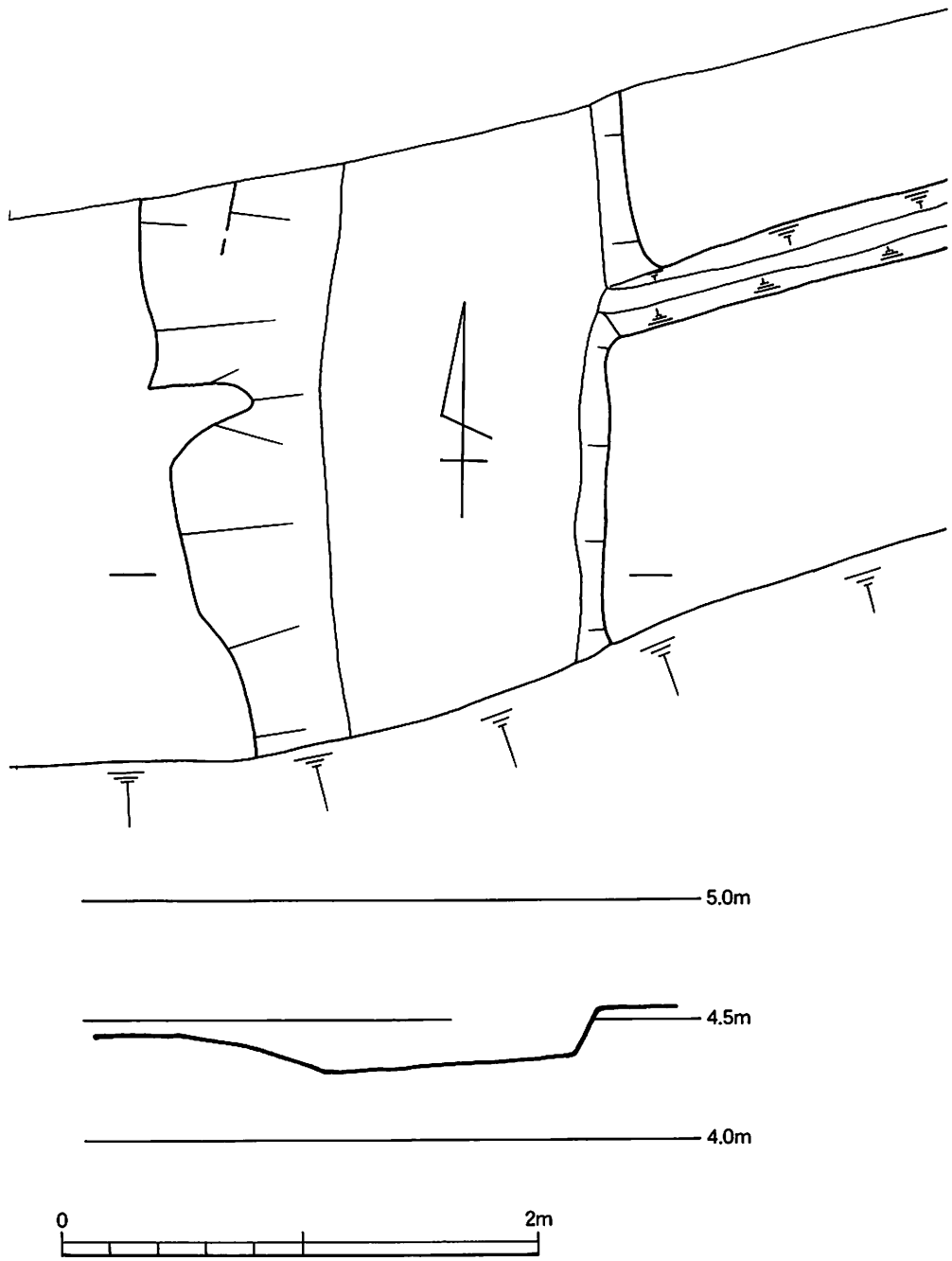
SD2（第7図） SD1と同じく5層（水田床土で酸化硬化層）に掘り込む状態で検出した浅い溝状遺構である。上面の幅は東部で58cm、西部で30cm程度で、底は西に向かって下がる。SD2は東部では次第に消滅する。



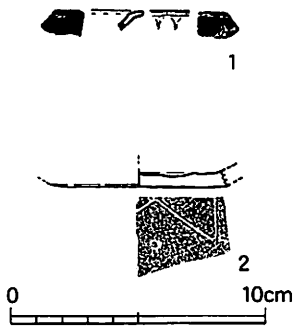
第6図 最上層遺構全体図



第7図 最上層の攪乱配置図 (1・2区)



第8図 SD1実測図



第9図 SD1出土遺物実測図

中世末  
～  
近世初

## ②上層の遺構と遺物

### 概要 (第10図)

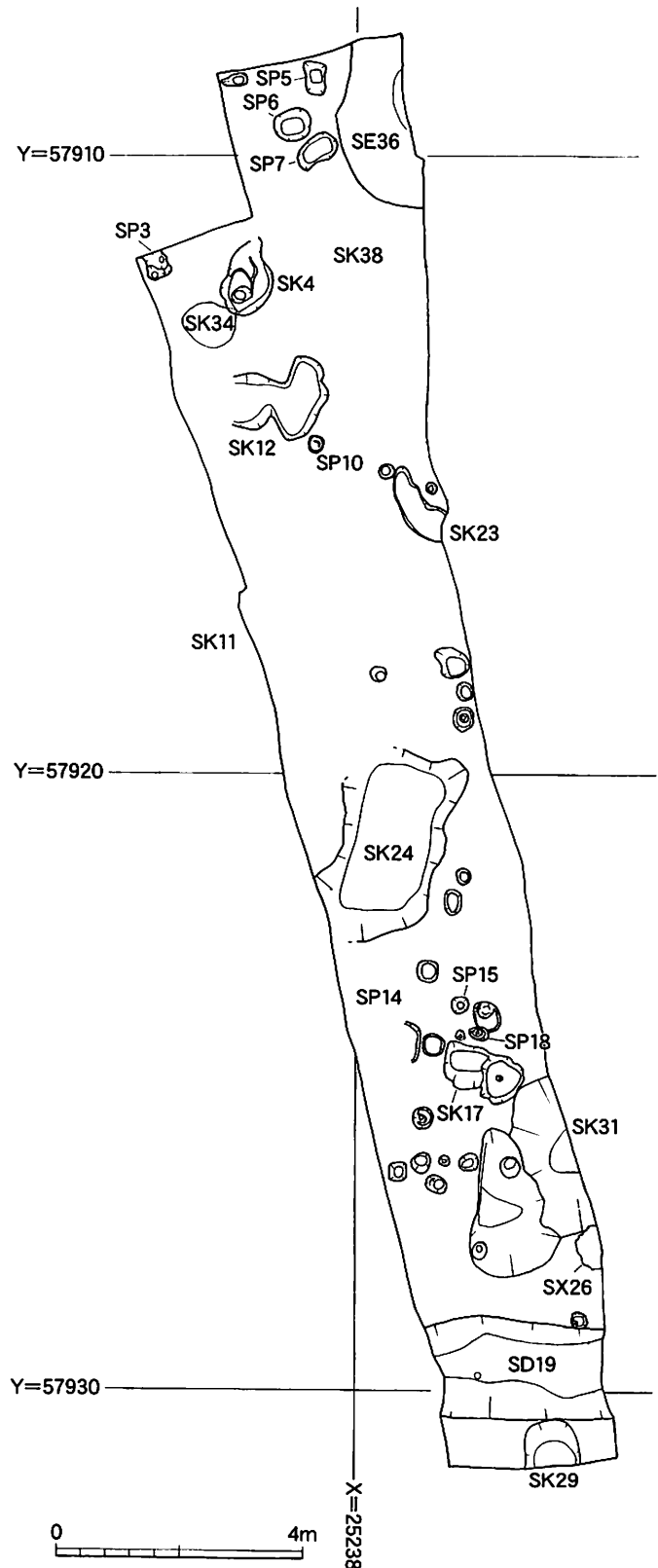
遺構は調査区全体に分布する。遺構検出面の標高は西部で4.5m以上、東部で約3.8mであり、東側が80cmほど低くなっている。遺構の種類は小型土坑が西部に多く、中央部に大型の長方形土坑、東部に南北方向の溝状遺構、中央部から東部に普通の柱穴大の小穴がまとまる傾向にあった。柱穴は調査区が狭小なためもあって、掘立柱建物跡として復原想定するには至らなかった。西部の土坑群確認面のすぐ上には円礫が若干散乱していて、これを取り除いた段階で土坑群を検出した。円礫は遺構廃絶に伴い堆積し、その後土坑は掘り込むような状態ではなかったようである。

16世紀末葉から17世紀中頃の遺構である。

#### 土坑

SK 5 (第11図) 1区の西端で検出した長方形の土坑である。長さ0.53m、中央の幅0.33m、深さ0.38m。出土遺物から16世紀後葉～末葉の遺構と判断する。

SK 5 出土遺物 (第12図 1～5) 1は京都系土師器3期。口縁部の二箇所に煤が付着し、灯明皿として使われている。2は16世紀末の中国龍泉窯系青磁碗B-IV類で、沈線による蓮弁紋が描かれる。3は瓦質鉢。4は鉄釘。



第10図 上層遺構配置図

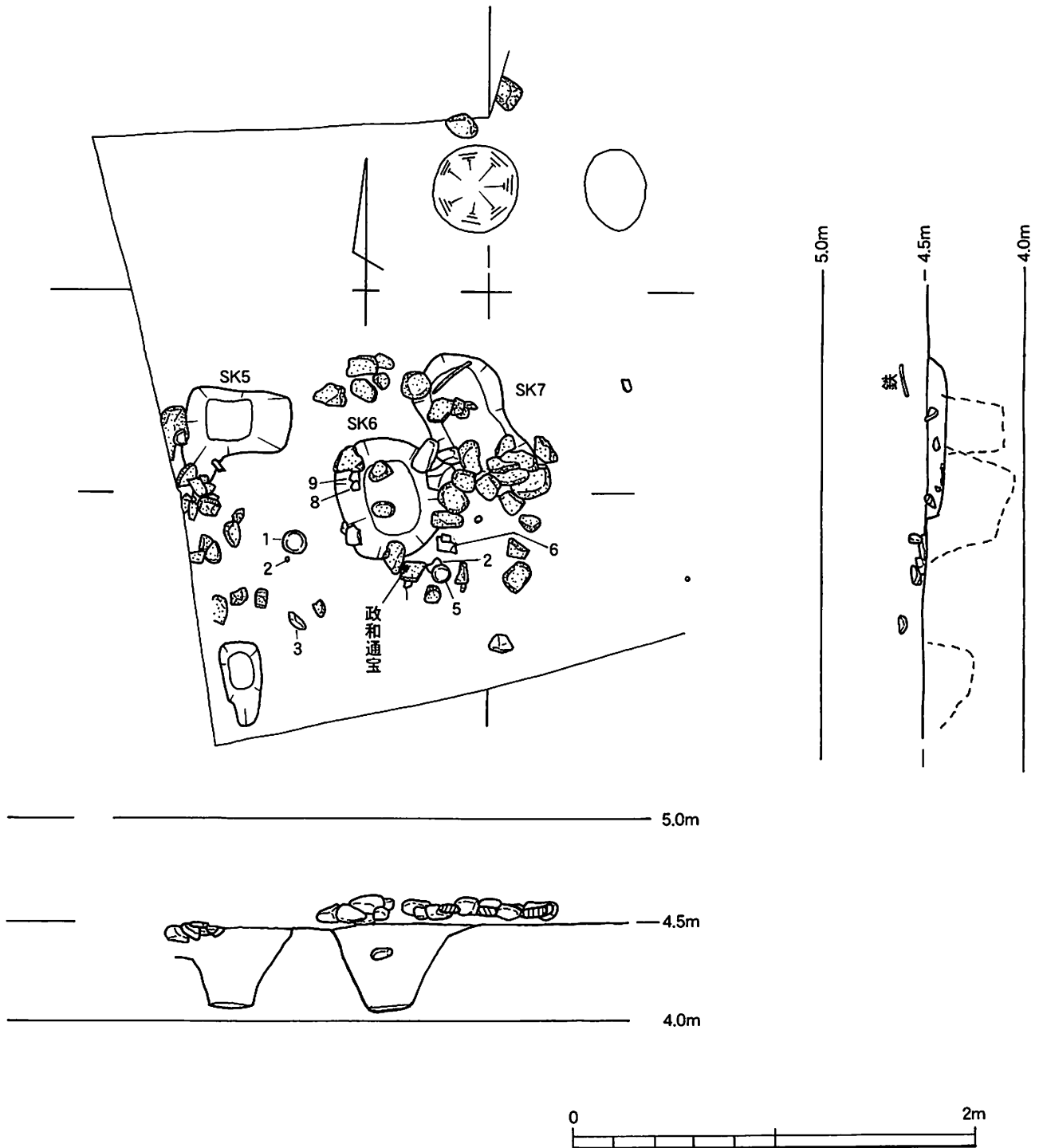


SK 6(第11図) SK5の東側に位置し、検出面も同一である。長さ0.6m、幅0.73m、深さ0.43 mである。検出状況から16世紀後葉～末葉の遺構と判断する。

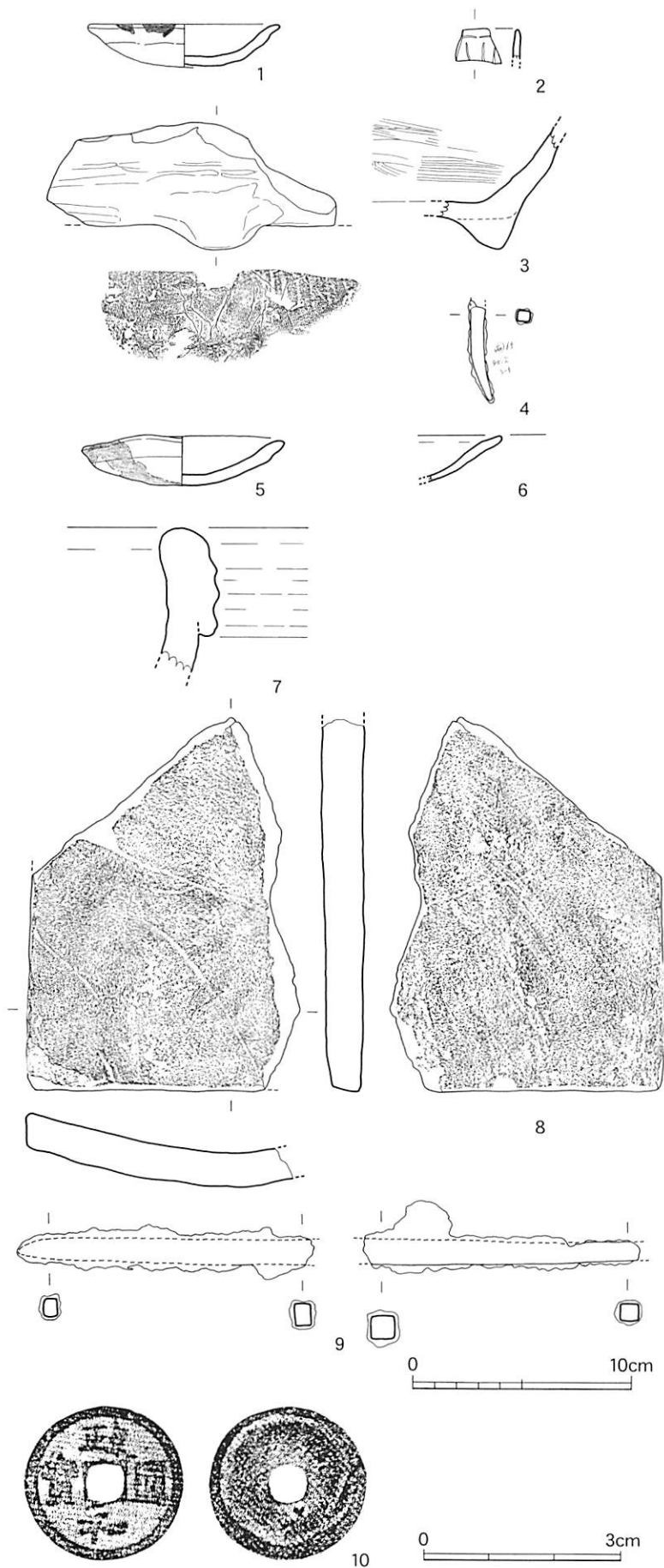
SK 6 出土遺物 (第12図 6～8・11) 5は灯明皿として使われた3期の京都系土師器。6も京都系土師器。7は備前焼き大甕の近世1期。10は中国北宋の銭貨で政和通宝。

SK 7 (第11図) SK 6の東に接して位置する。長さ0.78m、幅0.43m、深さ0.1m。検出状況から16世紀後葉～末葉の遺構と判断した。

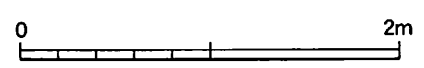
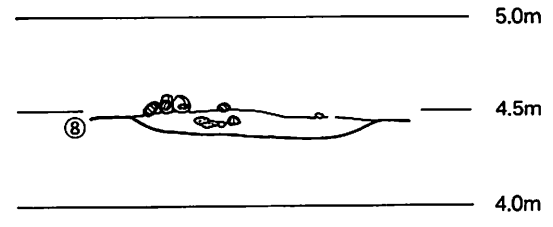
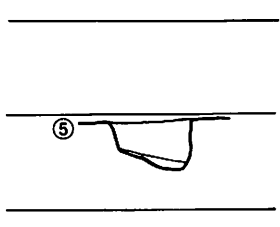
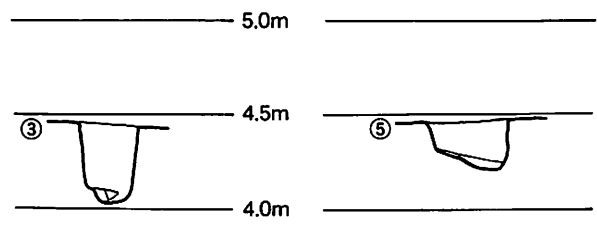
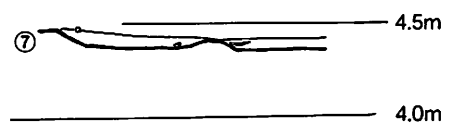
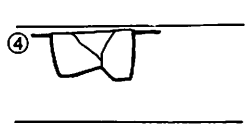
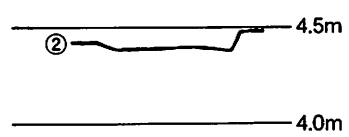
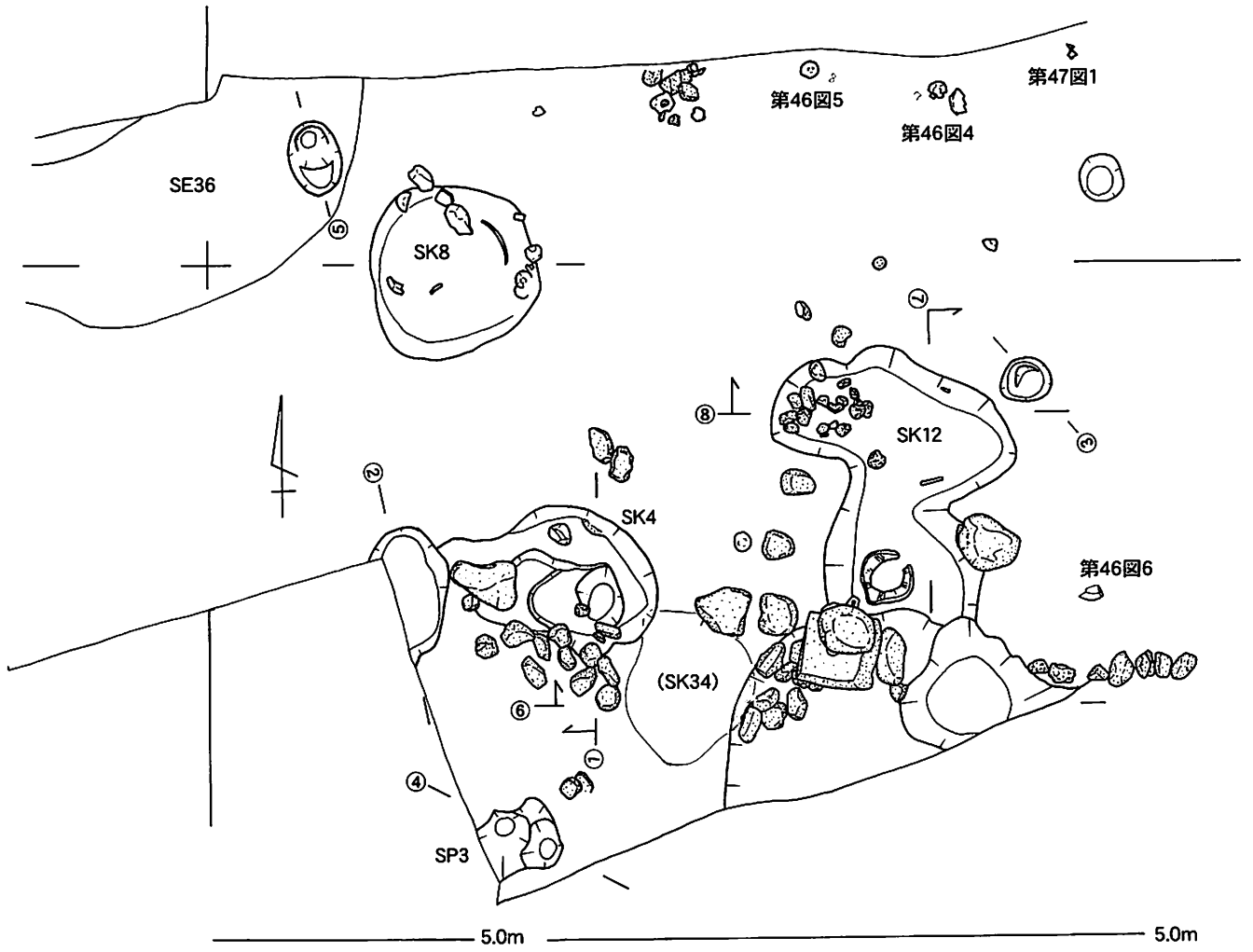
SK 7 出土遺物 (第12図 8・9) 8は平瓦。9は折れているが長さ18cm以上の鉄釘。  
第11図中の遺物 (第45図 1・2・3)



第11図 SD5～7実測図



第12図 SD5~7出土遺物実測図



第13図 SK3・SK4・SK8・SK12実測図

SK 4 (第13図) 2区西部に位置する。中心に向かって四段に下がる長さ1.3m、幅0.75m、深さ0.55mの楕円形土坑。出土遺物から16世紀後葉～末葉の遺構と判断する。

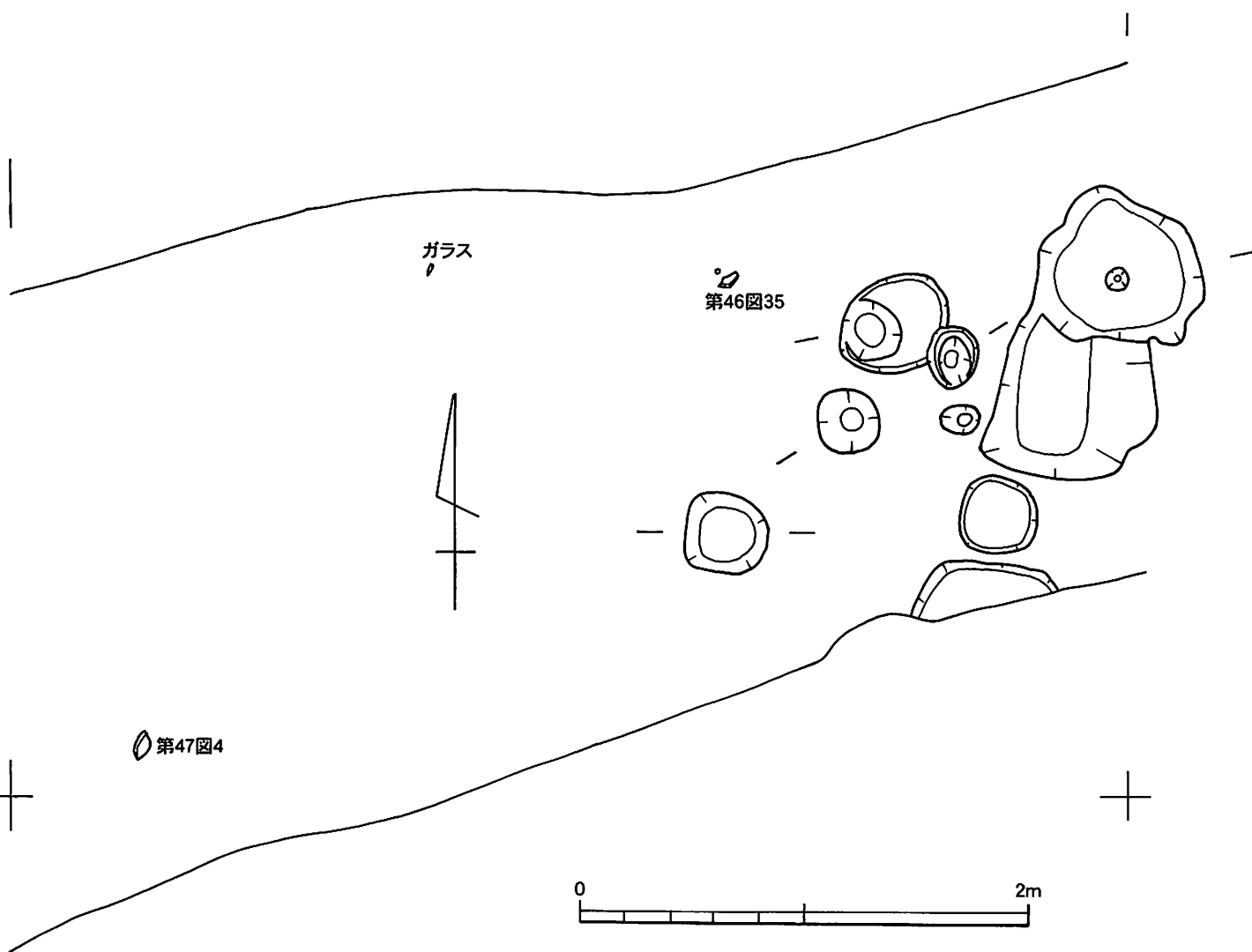
SK 4 出土遺物 (第15図 7～9) 7は備前焼播鉢で交叉播目をもつらしく近世1b期のもの。8は鉄釘。9は土壁破片である。

SK12 (第13図) 1区のSK 4の東に位置する。初め焼土の分布として掘り下げたところ、土坑状になった。遺構は北部の楕円形部分と南部を一つの土坑としたが、二基の重複であるとしても前後関係は分からなかった。礫の出土状態からみて、SK12は南側の浅い大型土坑に切られている。北部の規模は長さ1.4m、幅0.7m、深さ0.13mである。SK12の時期は、出土遺物から16世紀後葉～末葉の遺構と判断する。

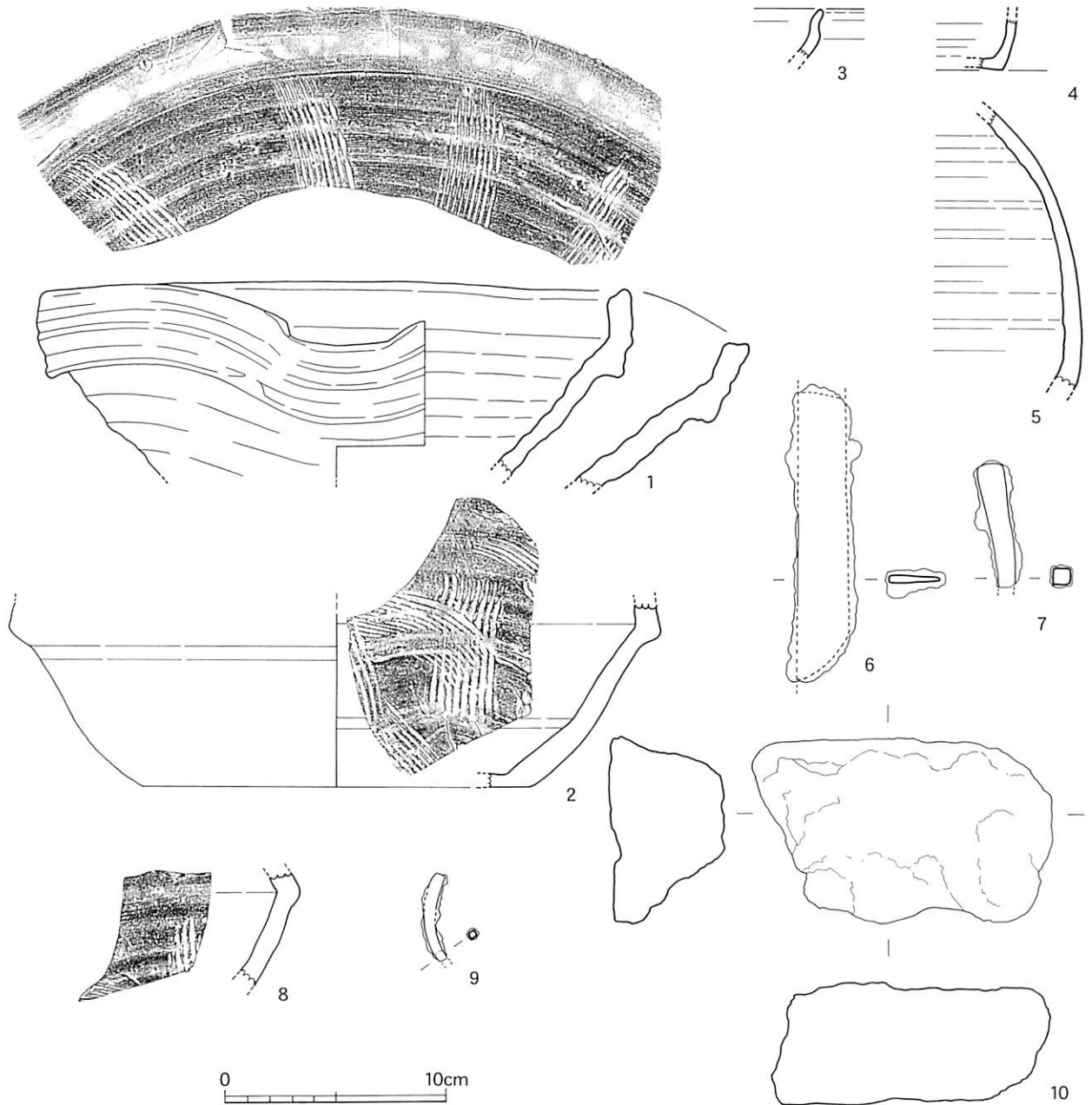
SK12出土遺物 (第15図 1～6・第59図 1～5) 第15図 1は中世6期の備前焼播鉢で、南部に下半分と外周の部を欠き据えられたような状態で出土した。2も備前焼播鉢で交叉播目の近世1b期(1570年代以降)。3は天目碗。4は備前焼の瓶。5は鉄製品で刃物。6は鉄釘。第59図 1は中国製白磁皿。2は中国製白磁の小杯。4は弥生土器の壺。5は鉄製品。

第13図中の遺物 (第46図・第47図) 第13図の遺物は出土標高4.45m～4.65mの間にある。

第14図中の遺物 第47図 4は近世1b期の備前焼播鉢。第46図35は京都系土師器2～3期。



第14図 3区遺構配置図

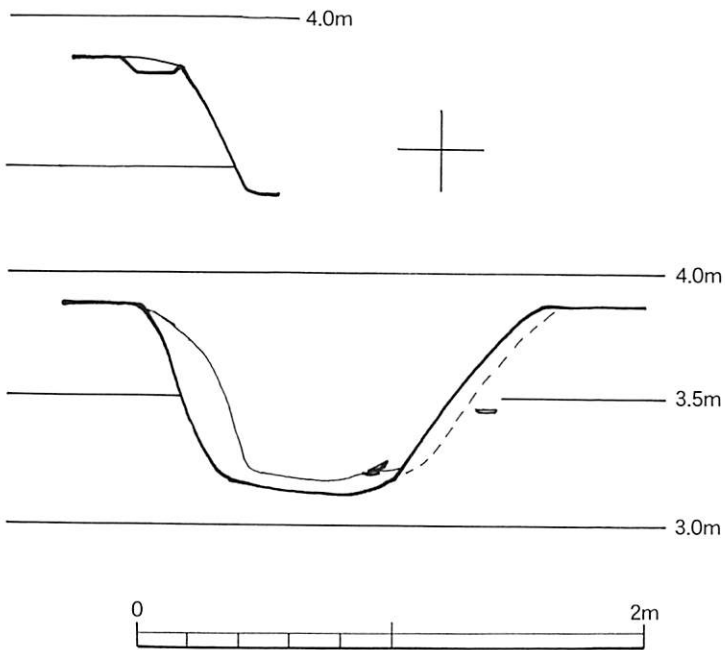
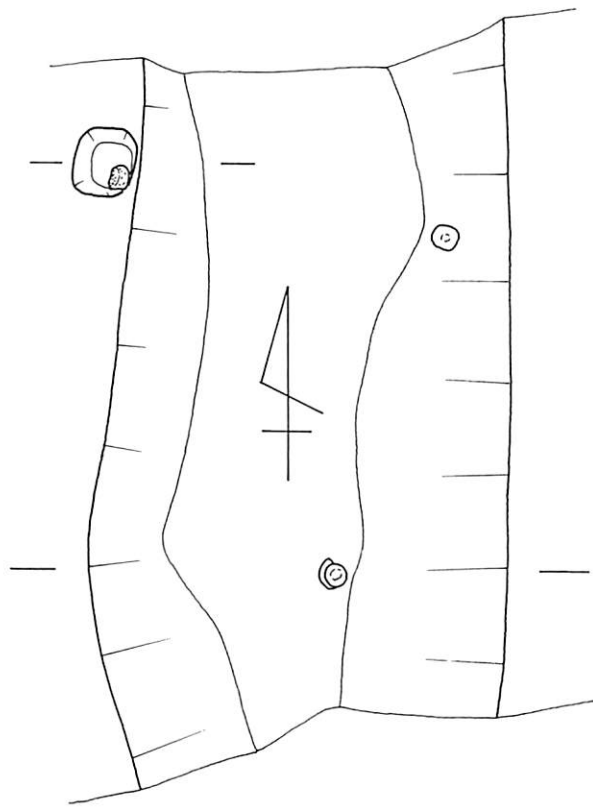


第15図 SK4・SK12出土遺物実測図

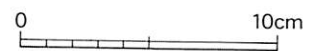
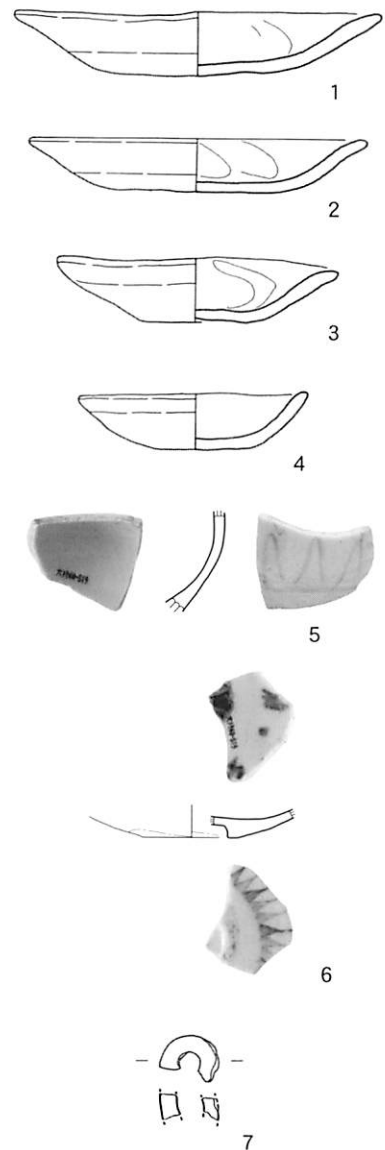
SD19 (第16図) 2区と3区の境界を南北に走る溝状遺構である。幅1.2m、深さ0.5mを計り、床面は南に向かって下がる。SD19の時期は、出土した肥前系磁器から17世紀中葉前後の遺構と判断する。

SD19出土遺物 (第17図 1～6) 1～4は京都系土師器である。5は1630～1650年代の肥前系染付け壺。6は碁笥底の中国青花皿C群。

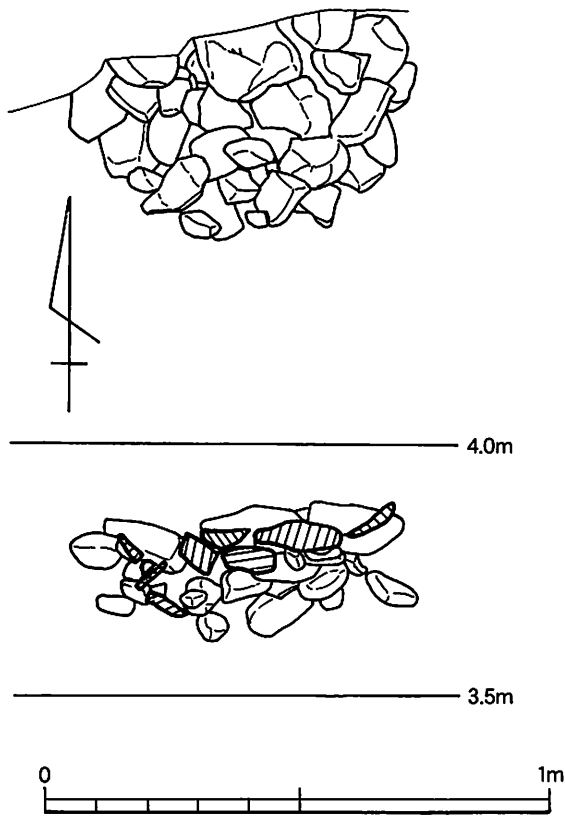




第16图 SD19実測図



第17图 SD19出土遺物実測図



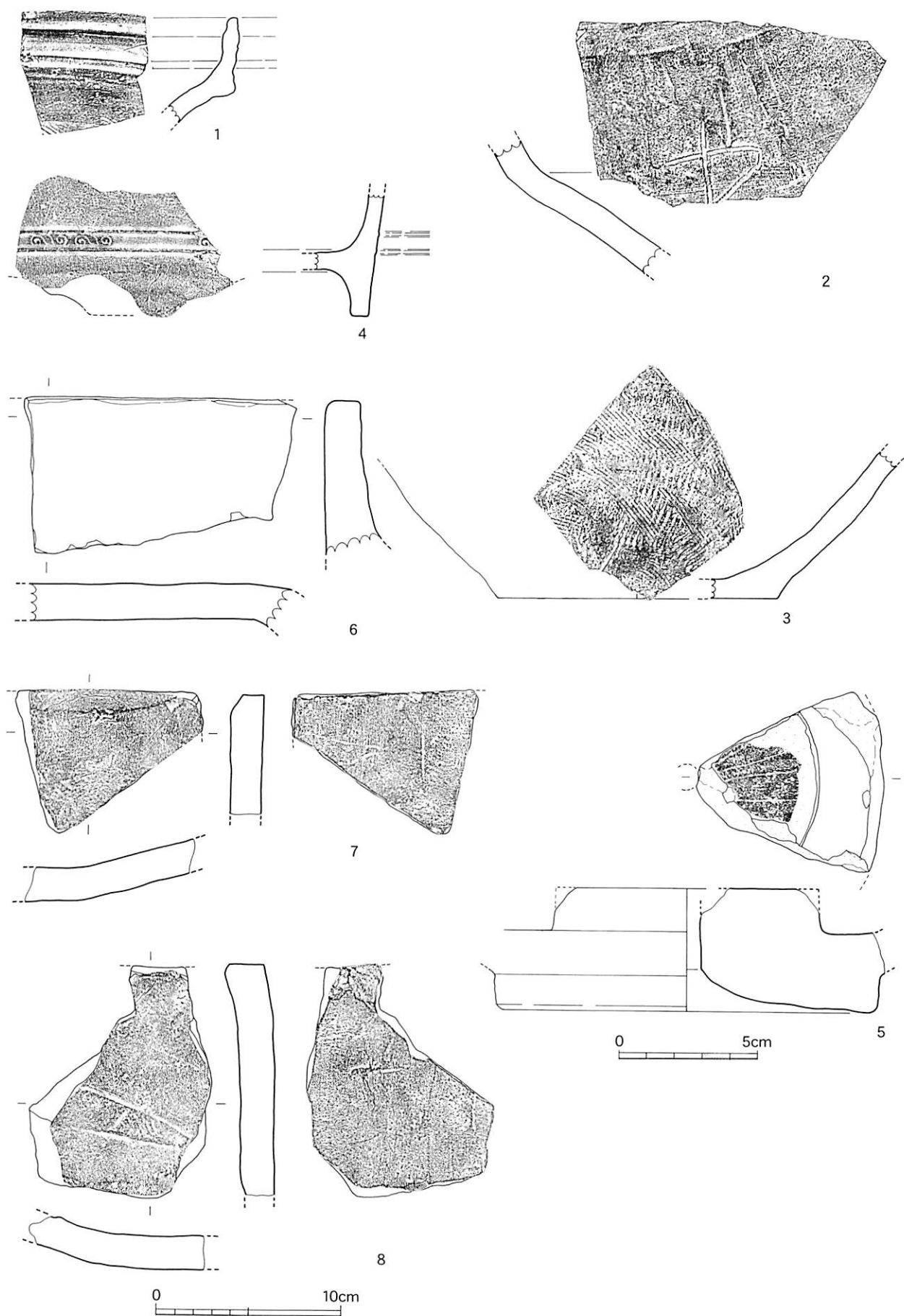
第18図 SX26実測図

SX26 (第18図) 3区の北壁に半分入り込んだ礫や瓦等の幅0.7mの集積である。深さ0.3mの窪みに堆積した状態を示すので、確認できなかったが本来は土坑である。SX826の時期は、出土遺物から16世紀後葉～末葉の遺構と判断する。

SD26出土遺物 (第19図1～8) 1・3は近世1b期の備前焼播鉢。2は備前焼大甕。4は双頭蕨手流雲紋の刻印のある瓦質火鉢。5は凝灰岩。6は屋根の中心、棟に使う伏間瓦。7・8は平瓦。

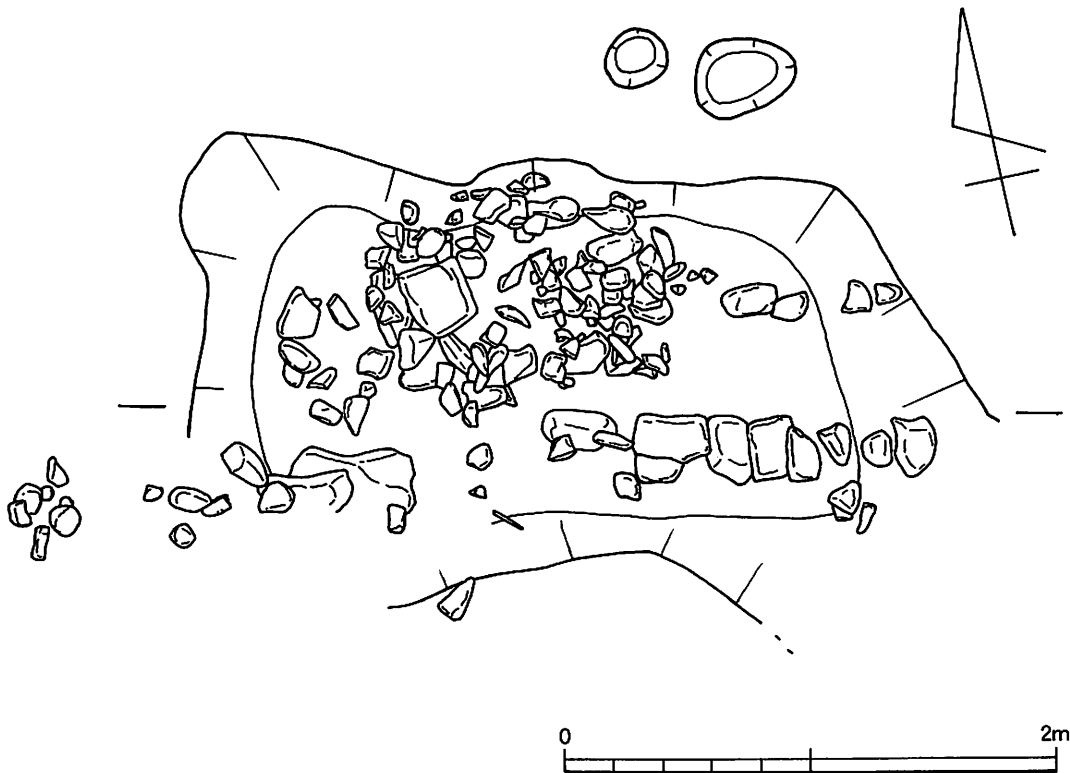
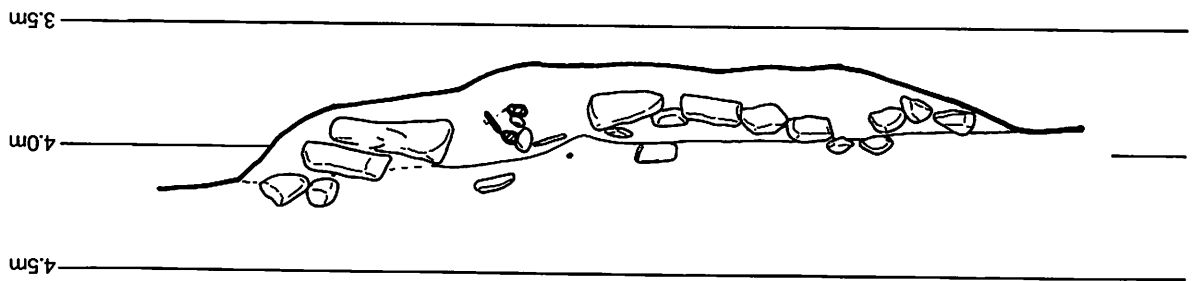
SK23 (第26図) 2区中央北部で検出した楕円形土坑で、一端は北壁に入る。長さ1.45m、幅0.55m、深さ0.2mで、床面からガラスが出土した。その他の遺物はないが、検出標高から16世紀後葉と判断する。

SK23出土遺物 (第16図7) この遺構の遺物はこの一点だけである。緑色のガラスで断面の厚さ7mm弱、細首瓶の頸部のような形状である。緑色で表面も風化していない。

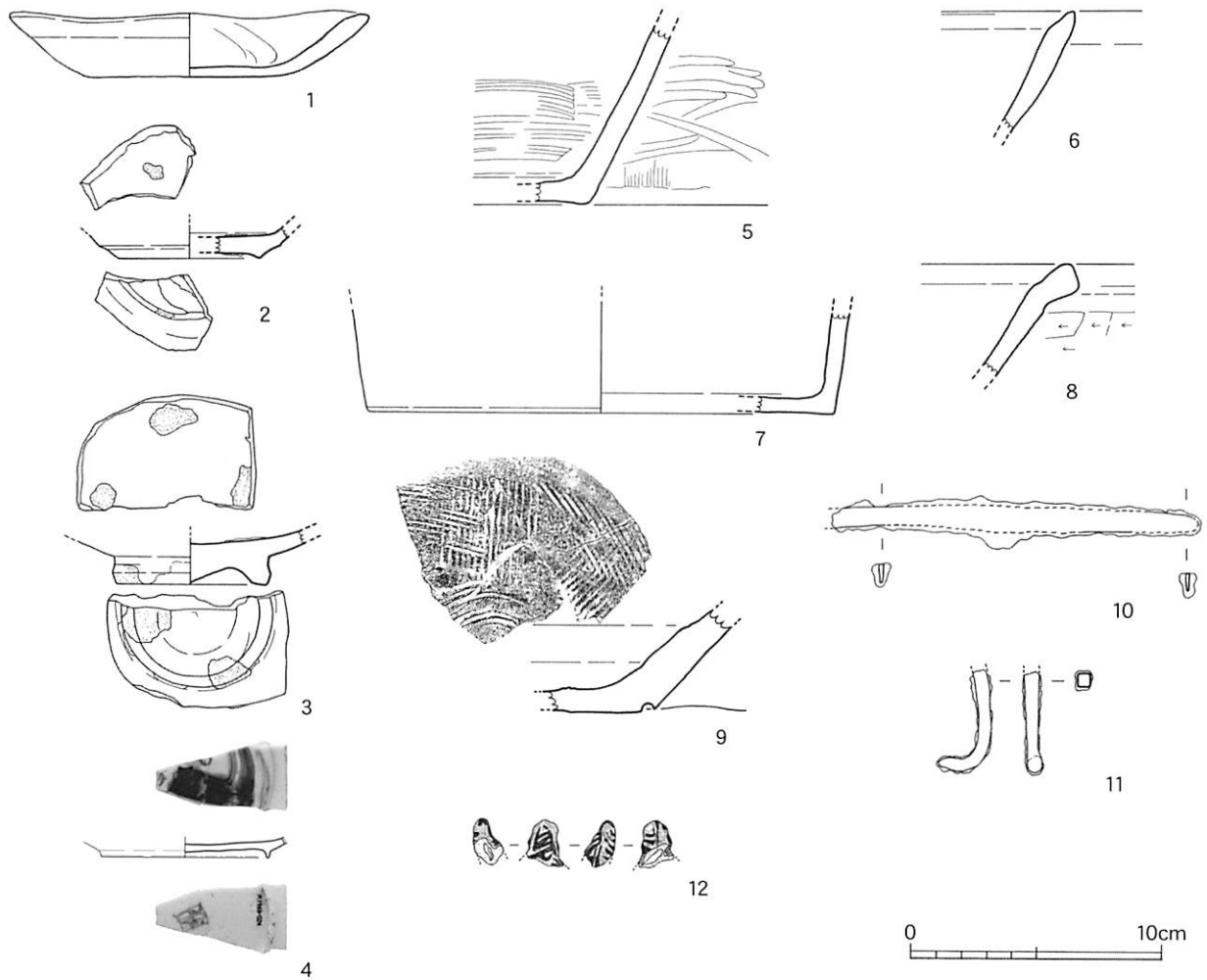


第19图 SX26出土遗物实测图

SK24 (第19図) 2区の西部に位置する隅丸長方形の土坑で断面は皿状である。長さ3.2m、幅1.8m、深さ0.5m。内部の南東部に8個内外の礫を並べた部分がある。内側の面を一直線に揃えている。内側には多数の礫が廃棄されていた。便所ではないかと想定された大友府内町第7次調査区SK141に類似する。SK24の時期は、最新の備前焼播鉢から16世紀末葉の遺構と判断する。



第20図 SK24実測図



第21図 SK24出土遺物実測図

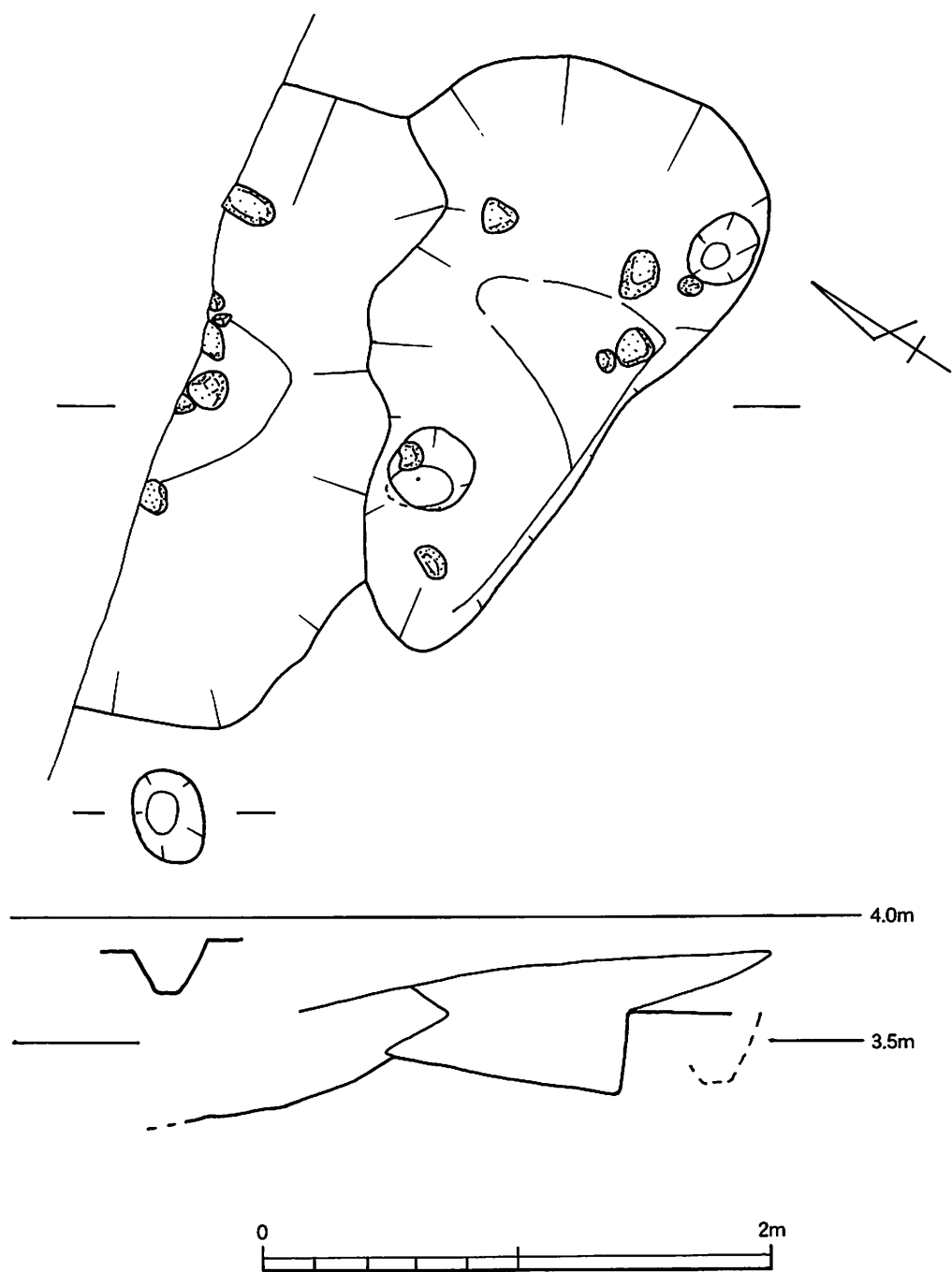
SK24出土遺物（第21図1～11） 1は完形の2期の京都系土師器である。2は瀬戸美濃陶器皿で見込みと高台接地面に各一箇所砂目積み痕がある。3は朝鮮製白磁皿で、見込みに三箇所、高台接地面に二箇所の砂目積み痕がある。4は中国龍泉窯系青花碗である。5は瓦質の鉢。6は瓦質鉢。7は瓦質火鉢。8は外面をヘラ削りする手の瓦質鍋。9は近世1期の備前焼播鉢。10は鉄製品で錆びているが刃物らしい。11は鉄製釘。12はラクダ形の華南三彩水滴。

SK29（第31図） 調査区東端に位置する土坑である。第5図の西向き面の層序図で示すように、標高4m付近から掘り込まれており、その意味では西側のSD19と同時期である。

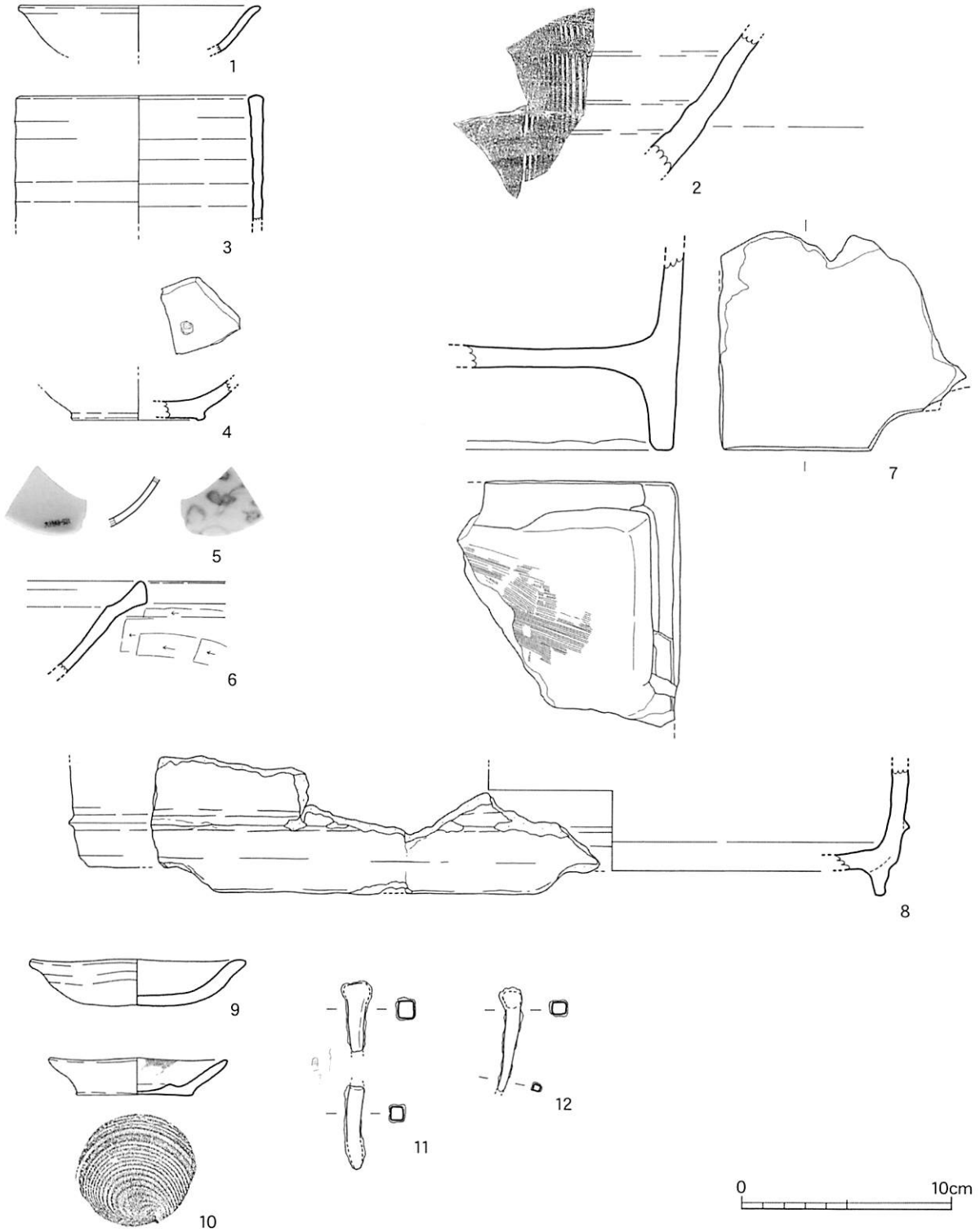
SK29出土遺物（第32図1～4） 1は3期の京都系土師器である。2は中国景德鎮窯系青花碗C群の蓮子碗。3は中国同安窯系青磁碗。4は鉄製釘。

SK31（第22図） 3区の北東部で検出した播り鉢状の土坑である。二つの土坑が重複した形である。第4図の北壁土層図では10層に該当する。16世紀末葉の遺構と判断する。

SK31出土遺物（第23図1～12） 1は白磁皿。2は備前焼播鉢。3は備前焼水鉢。4は白磁。見込みに目跡がある。外底面は露胎。ベトナム製か。5は青花。6～8瓦質土器。6は鍋の口縁部で外面をヘラ削りしている。7は角火鉢。8は火鉢。9は京都系土師器皿3～4期。10は在地系土師器の灯明皿。



第22図 SK31実測図



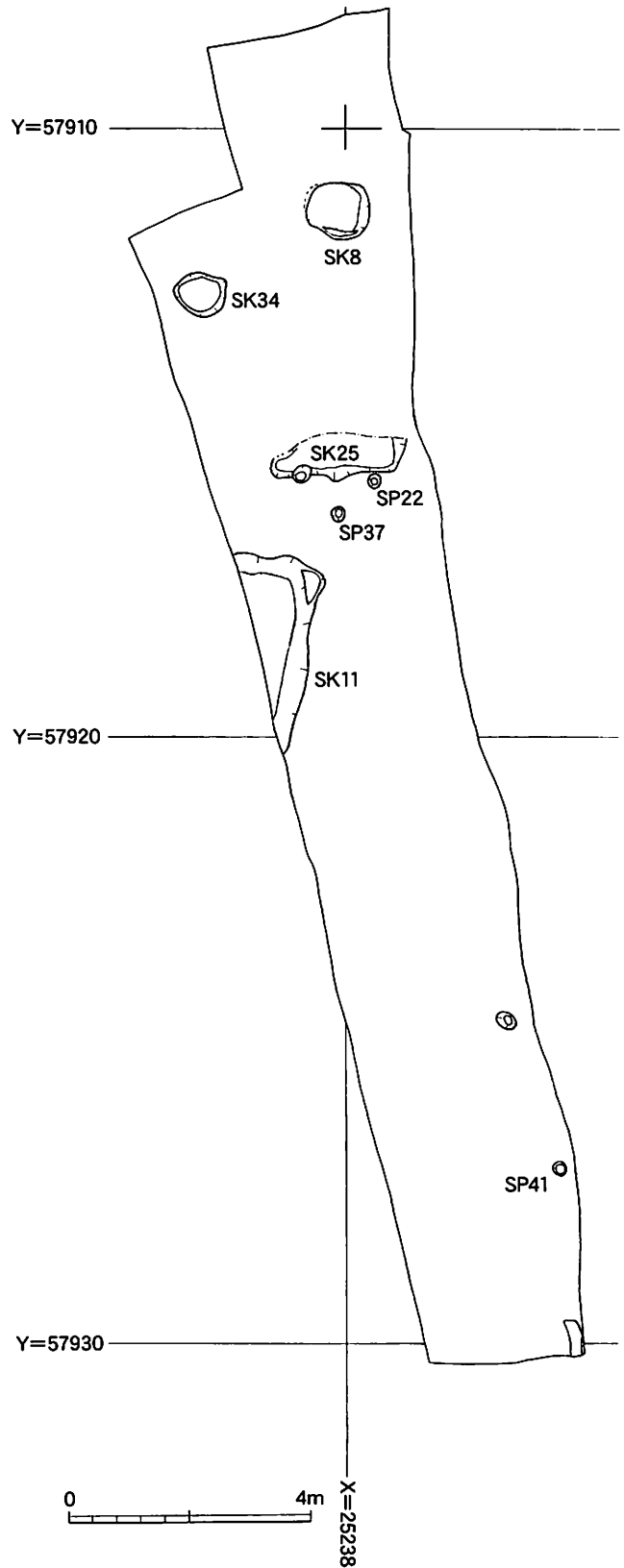
第23图 出土遗物实测图

### ③中層の遺構と遺物

概要（第24図） 16世紀中葉から後葉。

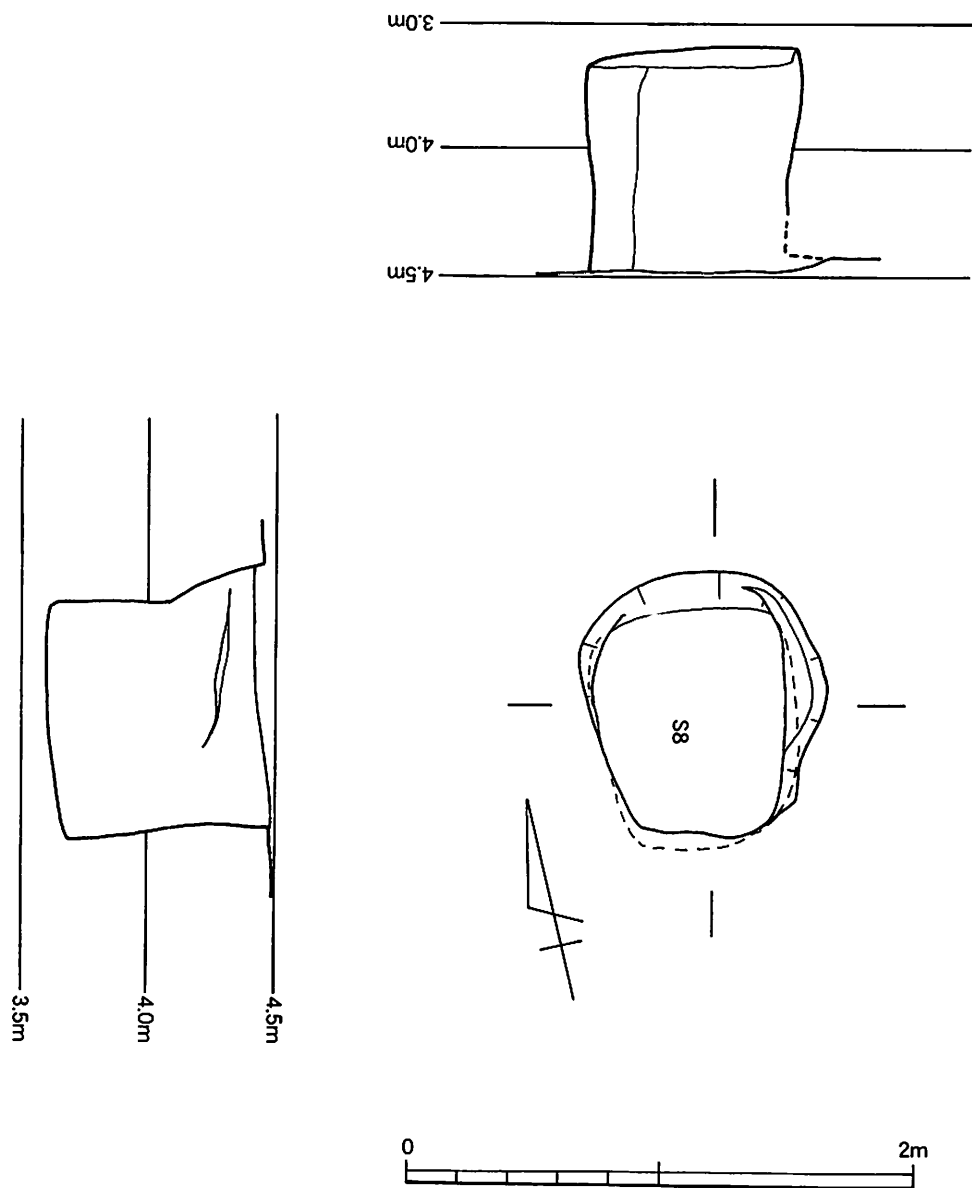
中層として扱う遺構は上層遺構よりも明らかに下層で確認できたもの。出土遺物としては、土師器皿類の構成から在地系土師器が消えて京都系土師器単独となる段階である。調査区の北西部で検出した井戸SE36は線路脇であるため、安全性を優先し掘り下げなかった。遺構配置図では上層としたが、層序図を検討した結果、SK8と同じ高さから掘り込んでおり、中層段階としておく。

SE36



第24図 中層遺構配置図



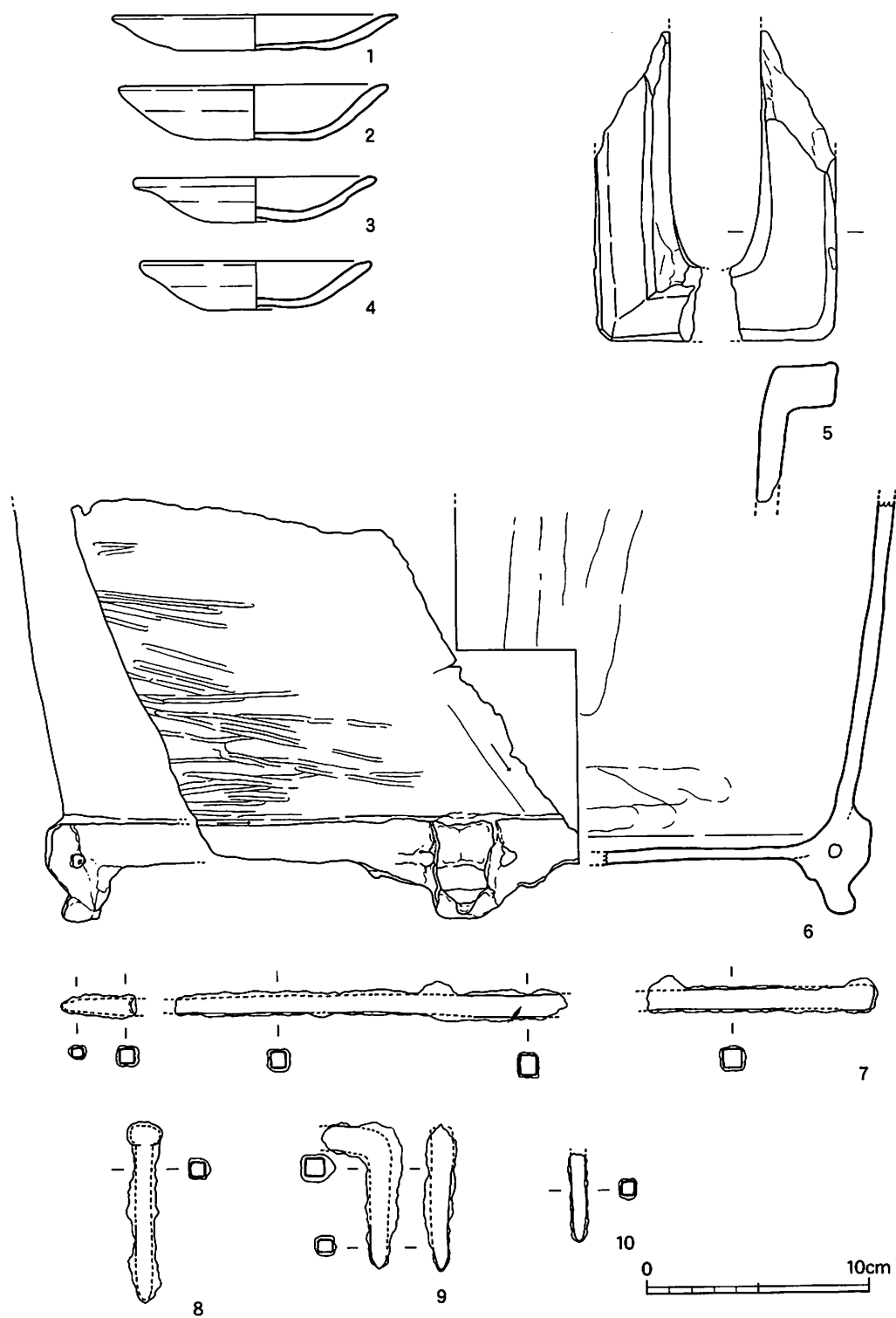


第25図 SK8実測図

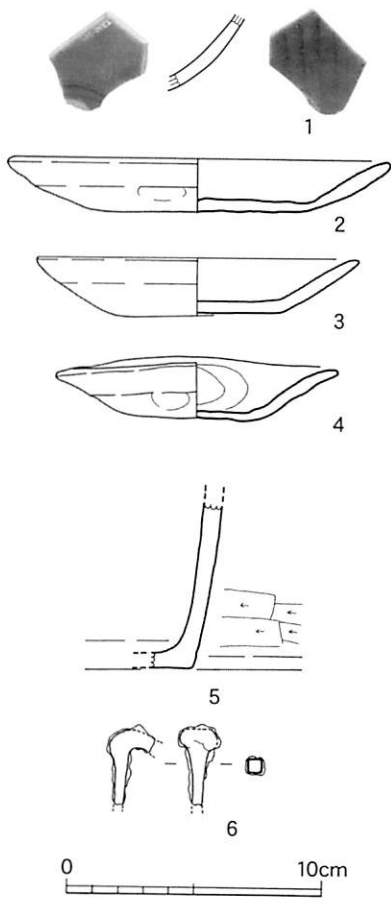
SK 8 (第25図) 2区西部の標高4.5m弱で検出した長さ1.1m、幅0.78m、深さ0.9m土坑である。外形の東部が不自然なのは、遺物の出土を追って壁の外まで広げたからである。東部から東側の下層に(SK8の上部に相当する高さ)1期の京都系土師器完形品が分布していたのを誤って取り込んだ可能性がある。脚付き火鉢はSK8 から出土した。

SK 8 出土遺物 (第26図 1~10) 1~4は京都系土師器で、1は1期、他は2期。5は瓦質角火鉢。6は瓦質火鉢で、脚部には外面に紐を廻らせるよう穴があいている。7は三つに割れてるが鉄製の大型釘。8~10も鉄製釘。

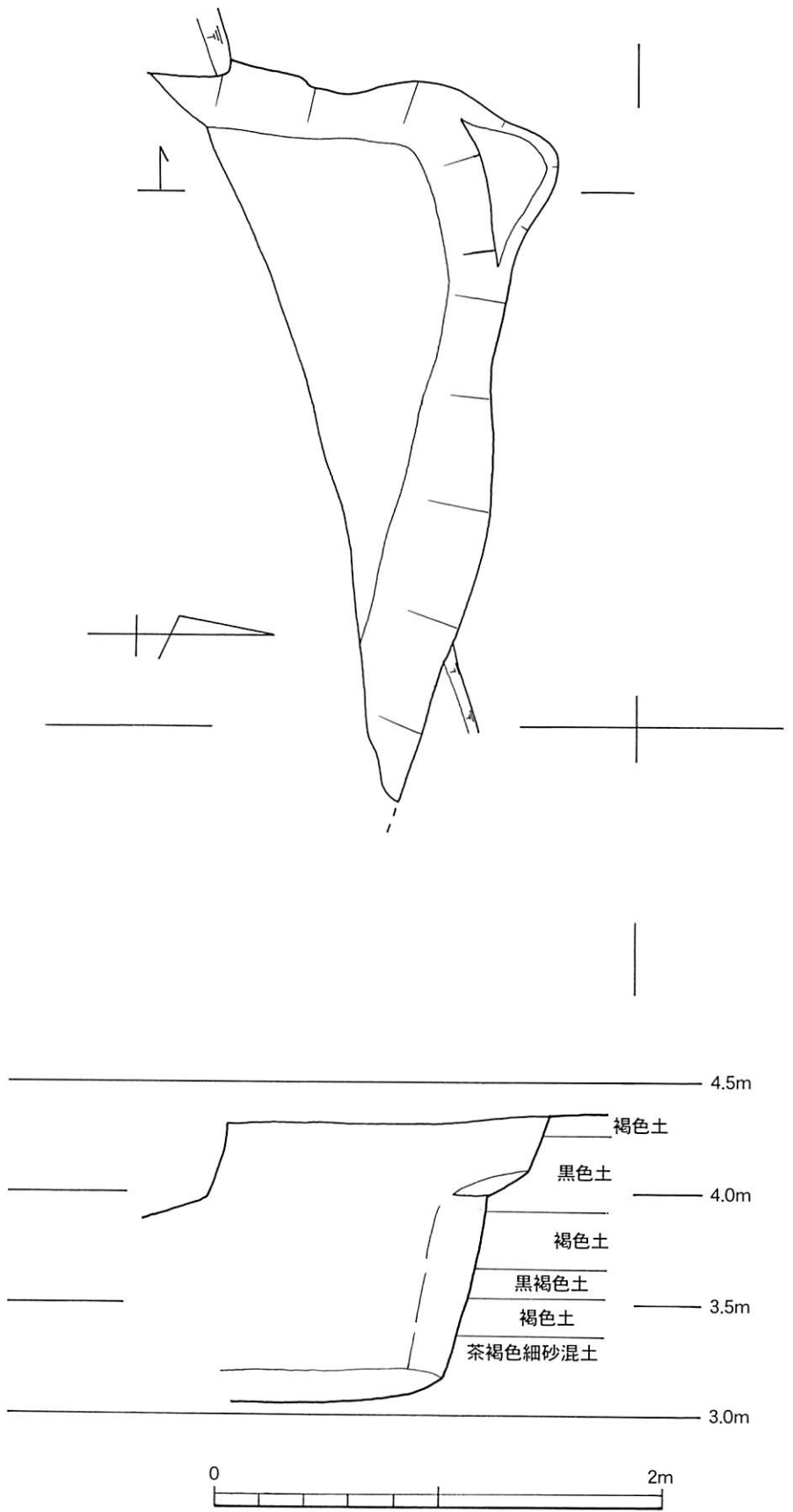
SK25出土遺物 (第30図 1~6) 1~4は京都系土師器皿である。1は口径16.2cm、器高2.5cm、2は口径12.4cm、器高2.3cm、3は口径10.9cm、器高2.2cm、4は口径10.2cm、器高2.4cmである。これらは口縁部の横なでが強く表れており2期の京都系土師器である。5は鉄製釘。6は瓦質鉢。口径24.6cm。



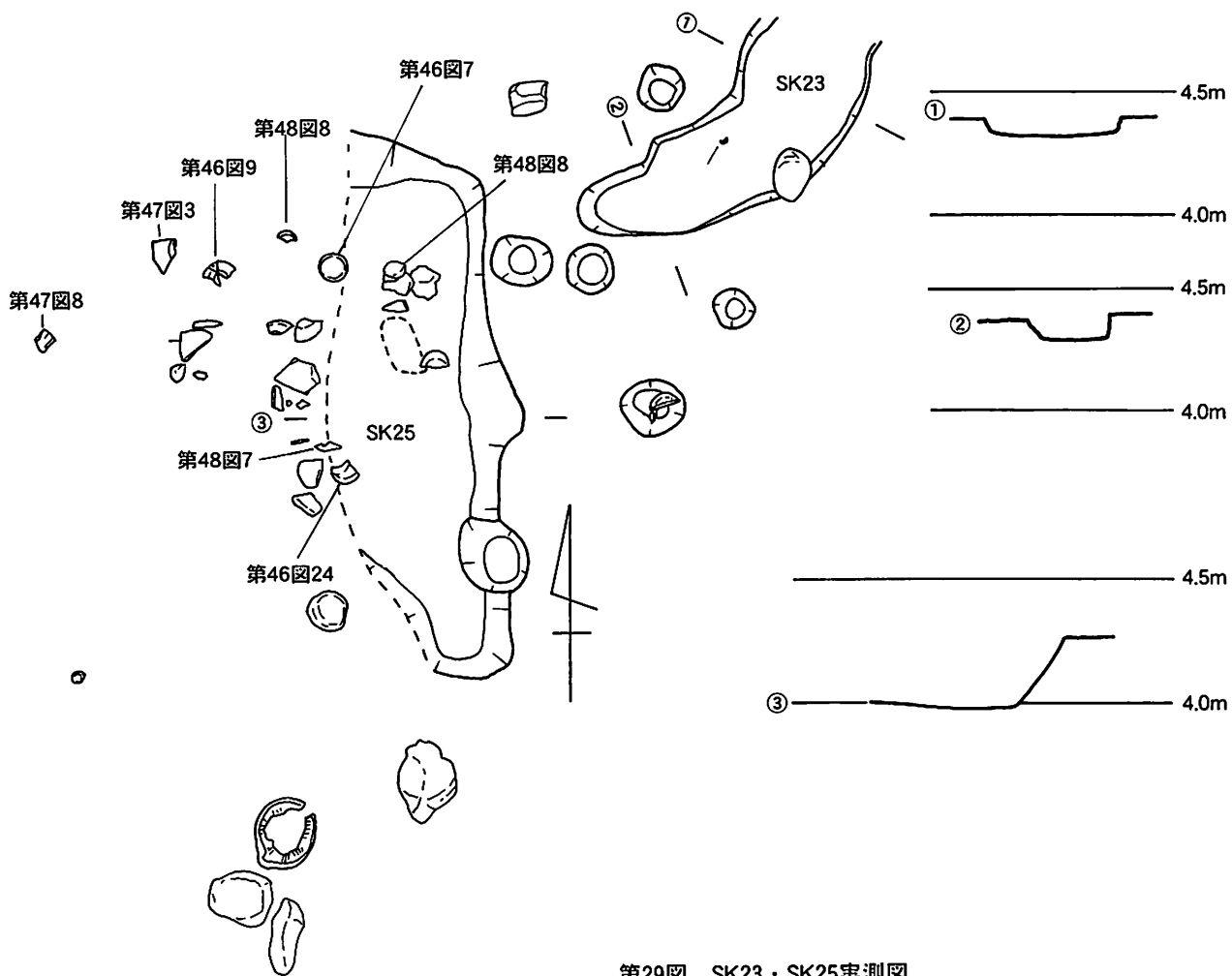
第26图 SK8出土遺物実測図



第27図 SK11出土遺物

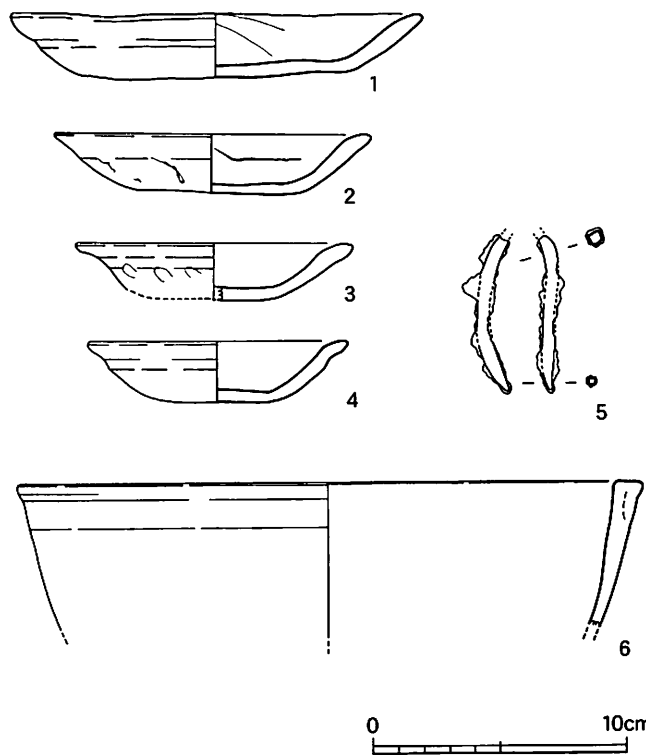


第28図 SK11実測図

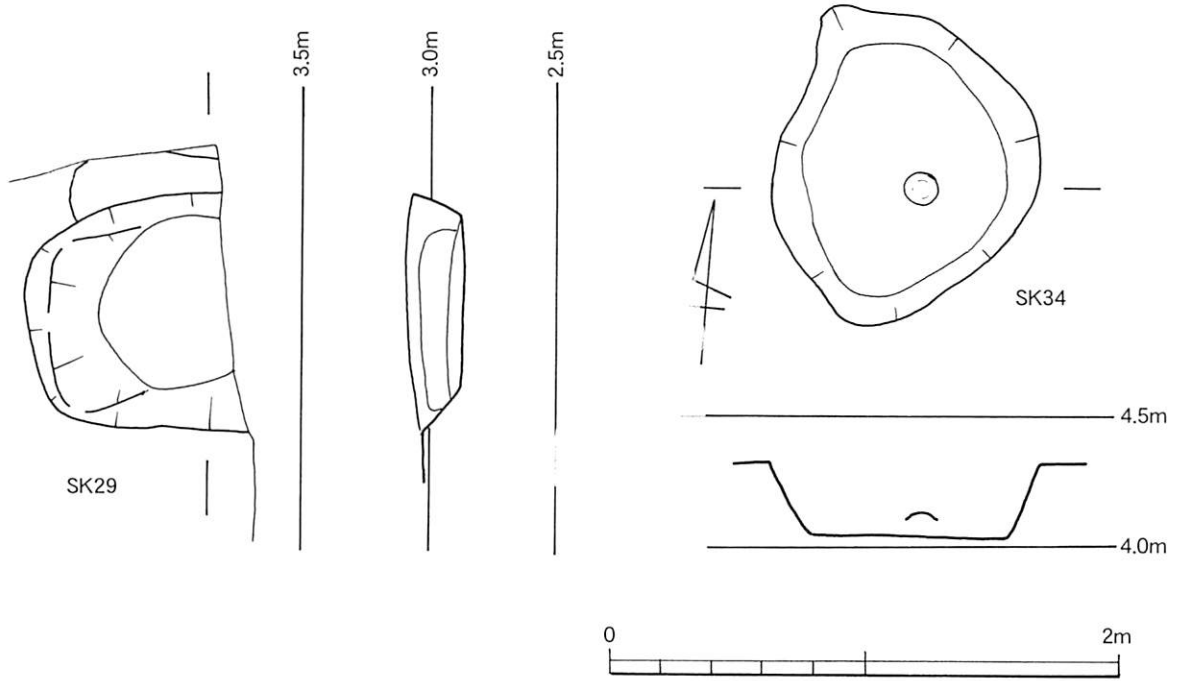


第29図 SK23・SK25実測図

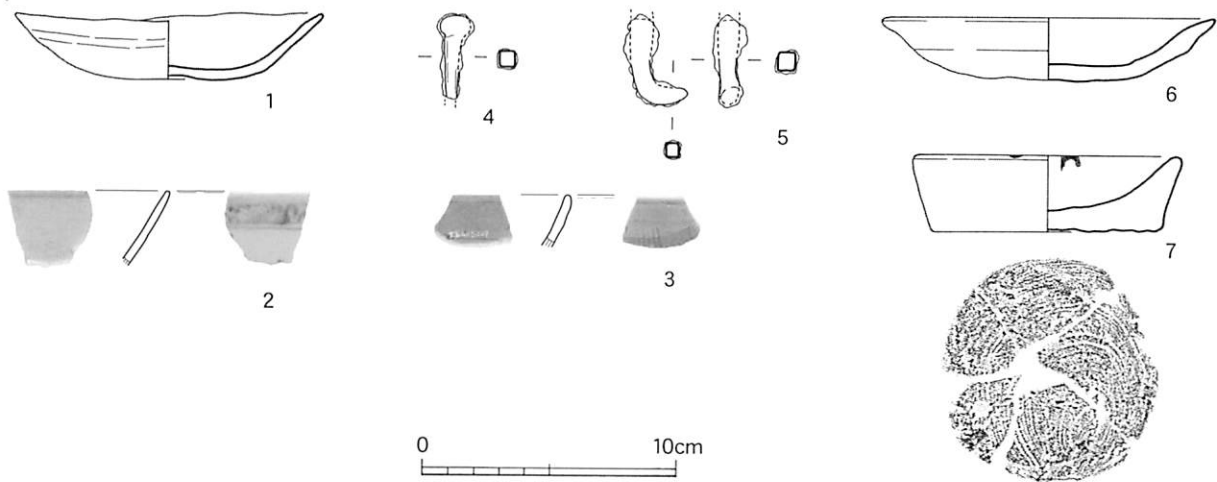
SK25 (第29図)  
 2区中央部に位置し、西部は大型土坑SK48に切られる。現状の規模は長さ2.2m、幅0.8m、深さ0.3mである。SK25の時期は、土師器から16世紀中葉から後葉の遺構と判断する。



第30図 SK25出土遺物実測図



第31図 SK29・SK34実測図



第32図 SK29・SK30出土遺物実測図

SK34 (第13・31図) 2区の西南部にあり、SK4の南東側に位置する。第13図の断面に示すようにSK4・SK12よりも下層で検出した。

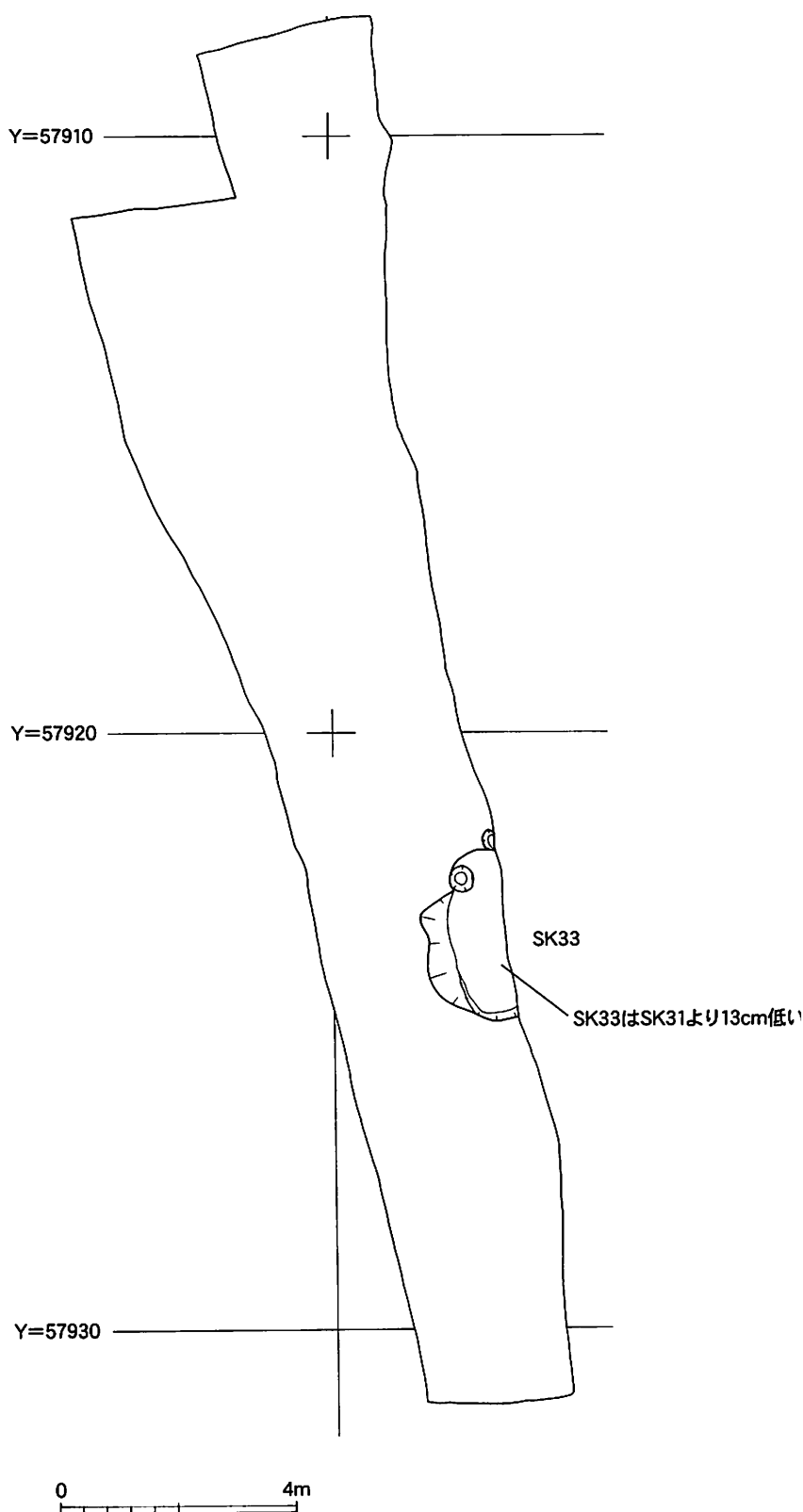
SK34出土遺物 (第32図6・7) 6は2期に比定できる京都系土師器皿である。7は在  
地系土師器皿である。口縁部が短く、器壁が厚い特徴をもち、大友城下町跡では類例に乏しい。  
SE36(第10図) 上記のように掘り込み面の高さからこの段階の遺構と考えられる。現状で幅  
2.4m以上あり、中央部に井戸側の部分が円い変色域として存在した。井戸側材料の抜取り痕  
が認められないので、桶重ねの井戸であったと思われる。

#### ④下層の遺構と遺物

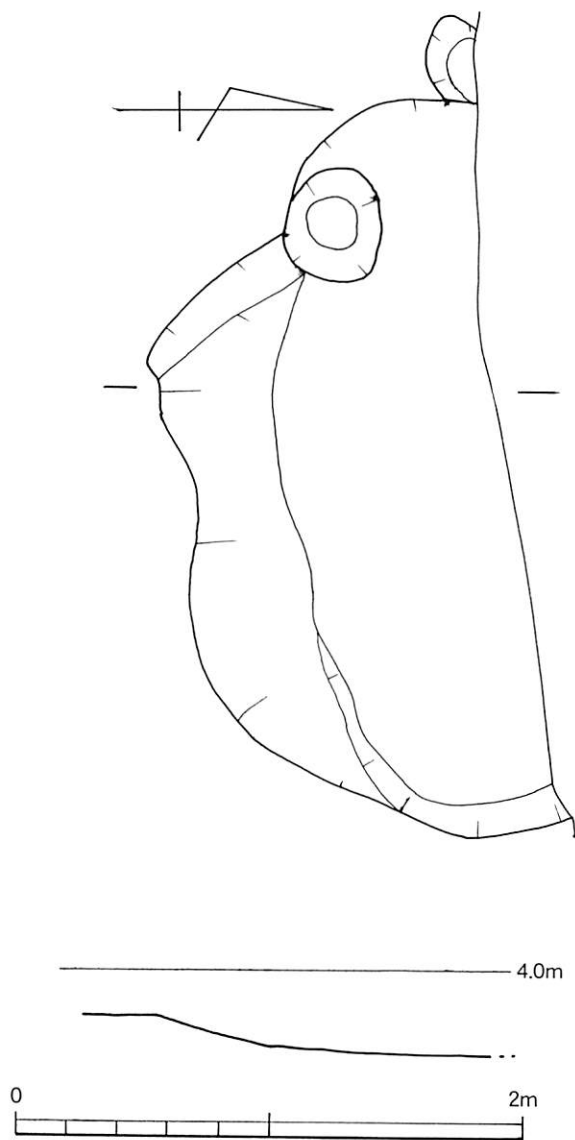
**概要（第33図）** 下層の遺構とするのは二基の土坑SK11とSK33だけである。SK33はSK31の下位で検出し、明らかに時期差が認められるので、分離したが、この時期の他の遺構についてはSK11以外明確にできない。SK33は19層の上にあることと、最下層の遺構としたSK41・42等が19層の下にあることから、これらを分離したが、遺物には明らかな時期差を認めない。

**SK11（第28図）** 2区と3区の境界に位置し、方形土坑らしいものの一部を調査した。南部は金池水路のため削られ消滅していた。検出標高は4.4m。現状で長さ3.2m、幅1.85m、深さ1.3m。16世紀前葉～中葉の遺構と判断する。

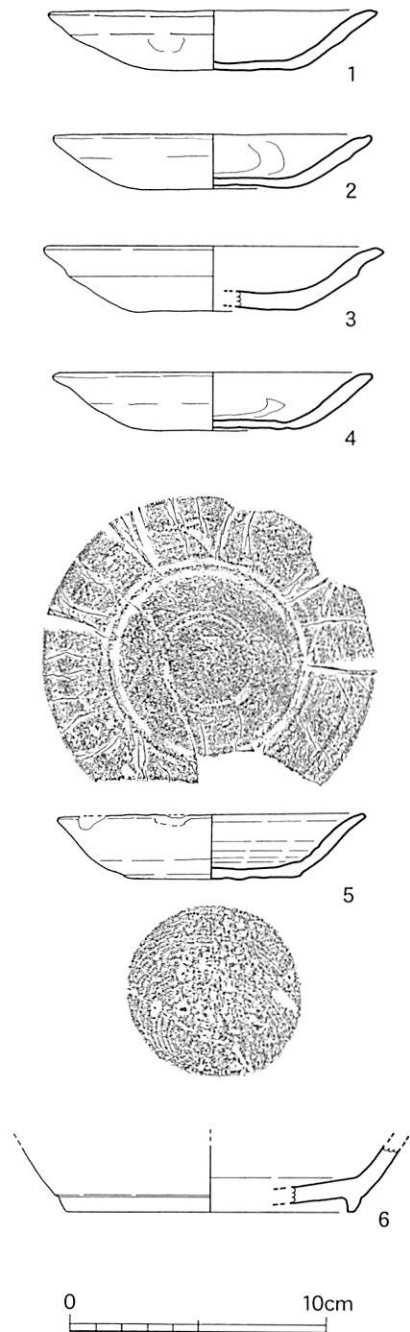
**SK11出土遺物（第27図1～6）** 1は中国景德鎮景青花碗。2～4は1期の京都系土師器皿。5は内面上部をヘラ削りした瓦質火鉢。6は鉄製釘。



第33図 下層遺構配置図



第34図 SK33実測図



第35図 SK33出土遺物実測図

SK33 (第34図) 3区北部に位置する浅い傾斜の落込みである。北側壁の層序では、15層・16層等の落込み部分に該当する。規模は東西3m、南北は現状で1.4m、深さ0.2mで確認したが、層序図によればもっと広がりをもつようである。出土遺物の年代からSK33の所属時期は16世紀前葉から中葉と考えられる。

SK33出土遺物 (第35図1～6) 1～4は京都系土師器1期の皿である。1は原型の2/5が残り、復元口径12.8cm、器高2.35cm、2は1/2が残り、復元口径12.4cm、器高2.45cm、3は1/2が残り、復元口径13.2cm、器高2.5cm、4は2/3が残り、復元口径12.4cm、器高2.3cmである。

5は内面にロクロ目を残し、底部を糸切り離した在地系土師器の皿である。3/4が残り、口径12.0cm、底径6.6cm、器高2.5cmである。6は古代の須恵器で、高台付き碗。底径11.2cm。

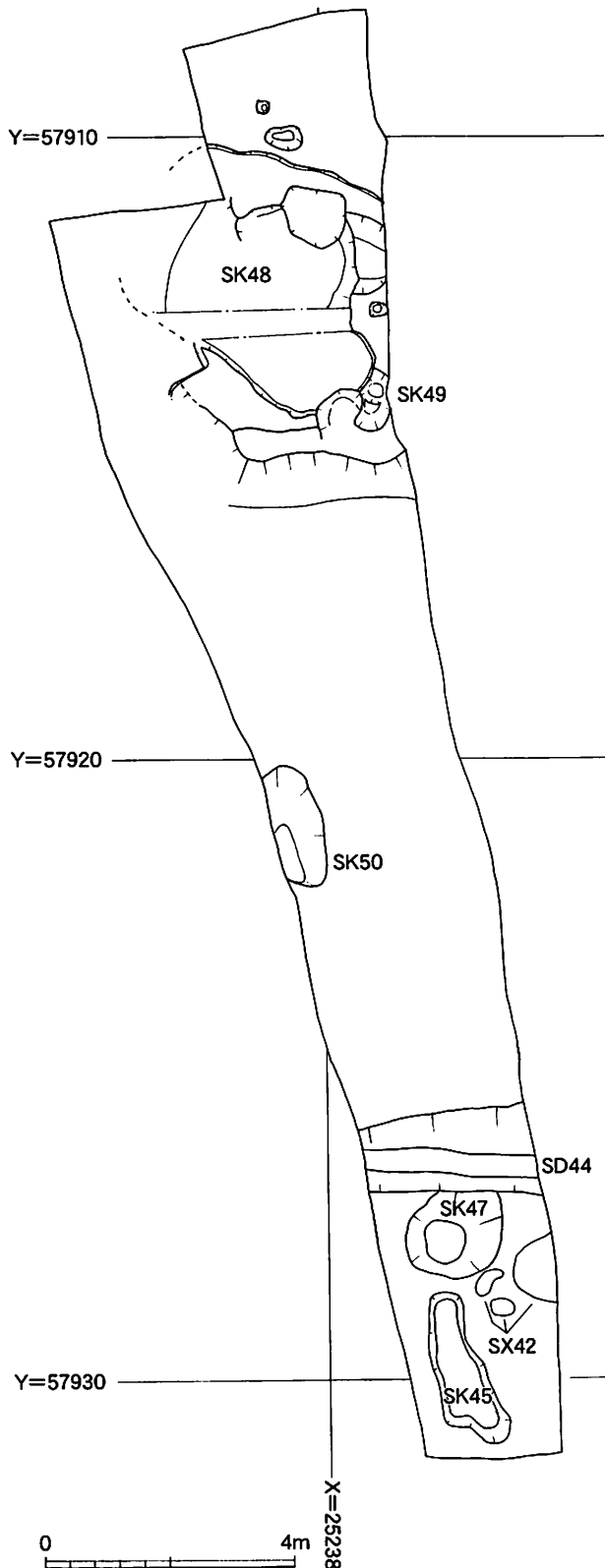
⑤最下層の遺構と遺物

概要（第36図） 調査区南側の水路に面した面を観察し、地山と認めた最下部から検出した遺構群である。2区西部で大型の土坑SK48、それに重複するSK49、3区西部にありSK24の下で検出したSK50、東部で検出した溝状遺構SD44・土坑SK47・SK45、遺物包含層SX42がある。京都系土師器1期と在地系土師器の共存から、16世紀前葉から中葉に比定する。

SX42（第19図） 調査区東部に位置し、層序図ではi層に該当する遺物包含層である。第36図では三ヶ所に分かれた状態で図示しているが、連続的に分布していた。多量の土師器がまとめて捨てられた状態であった。

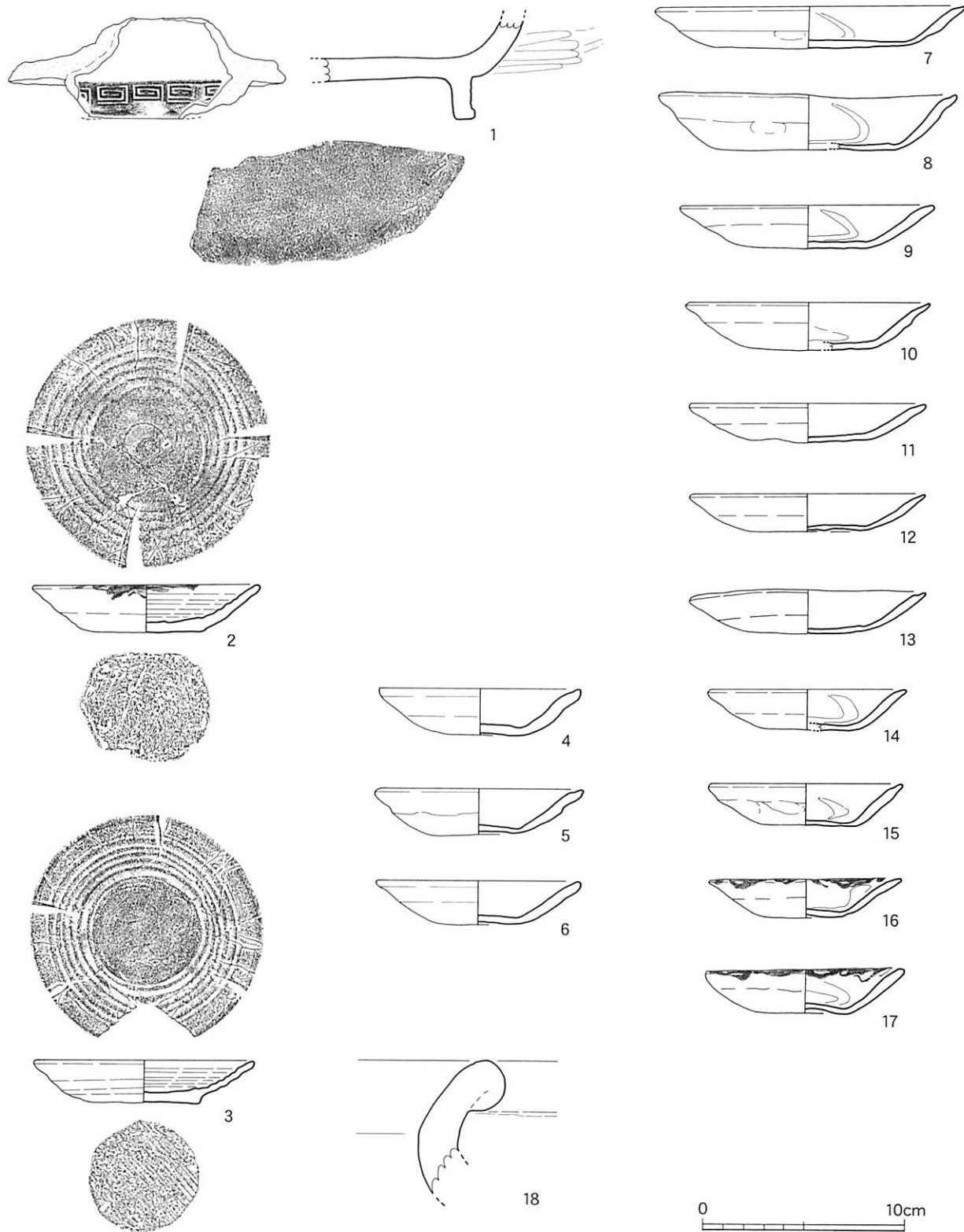
SX42出土遺物（第36図1～18） 1は脚部に雷紋の刻印がある瓦質火鉢。2・3は在地系土師器皿の完形品で3の外底面には板状圧痕が付く。4～17は京都系土師器皿で、図示したのは完形品（4～6・16）、2/3以上残存品（7・10・11・15・17）等である。16・17は口縁部の広い範囲に煤が付く灯明皿である。18は備前焼甕。

SK45（第38図） SK47の東に位置する、長さ1.8m幅0.5m強、深さ0.2mの土坑である。遺物は出土していないが、検出面が同じであり、SK47の時期である。

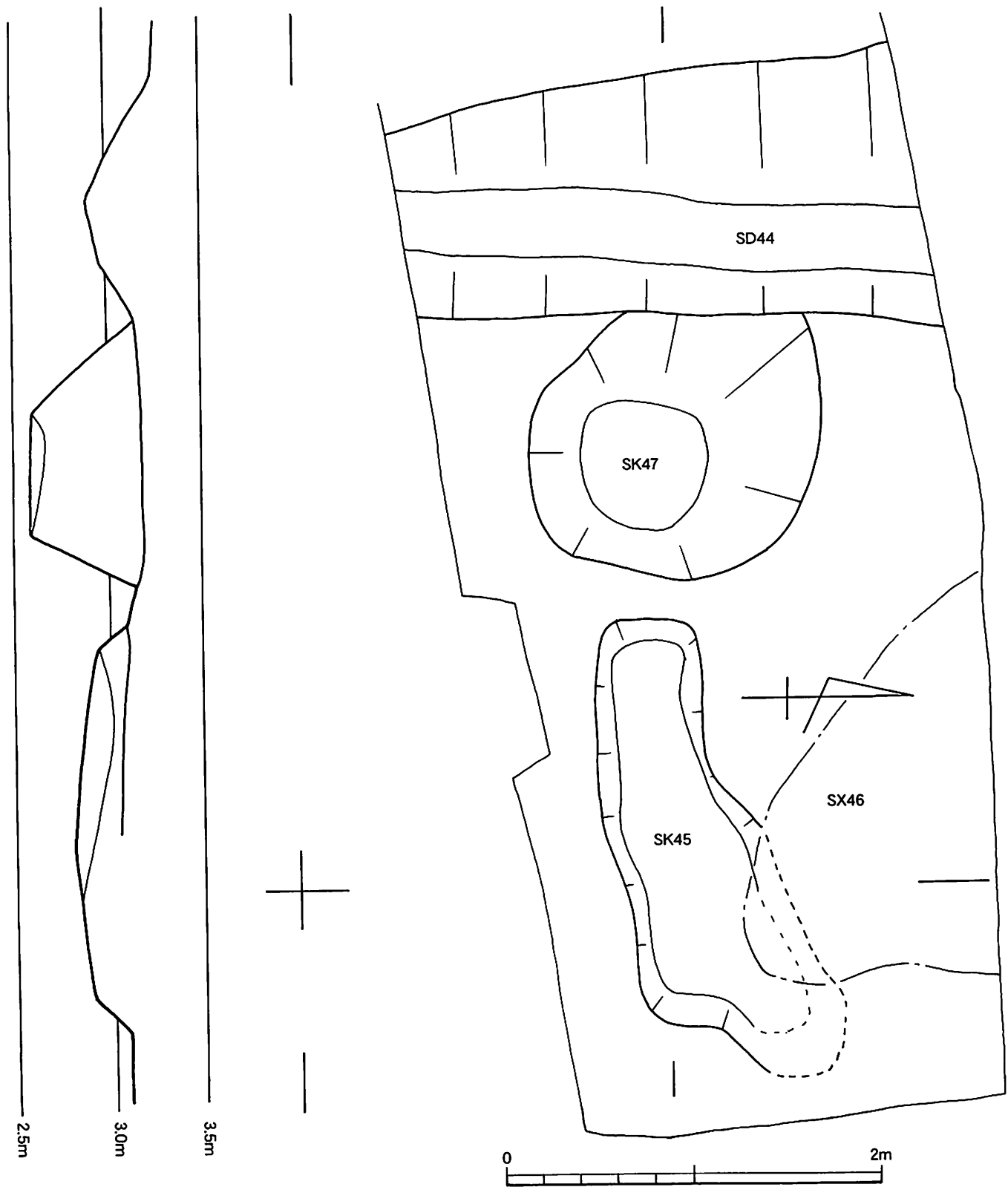


第36図 最下層遺構配置図

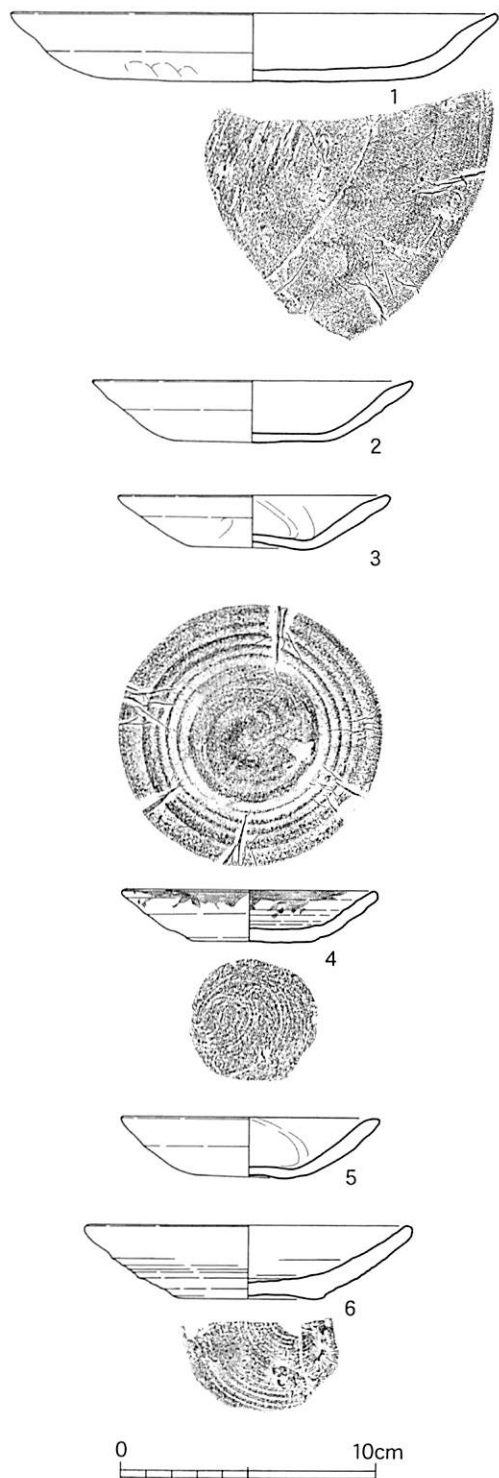




第37图 SK42出土遺物実測図



第38図 SK44・SK45・SK47実測図



SK47 (第38図) SX42と重複関係にないが、ほぼ同時に存在した遺構である。規模は1.57m×1.4m、深さは0.6mである。

SK47出土遺物 (第36図1) 5は京都系土師器1期の皿。6は在地系土師器で、内面にはロクロ目は残らない。

SX46 (第42図) SX46は東端部の斜面に廃棄された土師器類の包含層である。SK45が後から切り込んでいる。第36図のSX42とほとんど高低差はないが、SX46が上にある。

SX46出土遺物 (第43図1) 1は器壁の厚さが5mm以下で内面には接合痕があり、底部が薄く京都系土師器1期の特徴をもっている。SX46ではこの他にも、多数の破片が存在する。

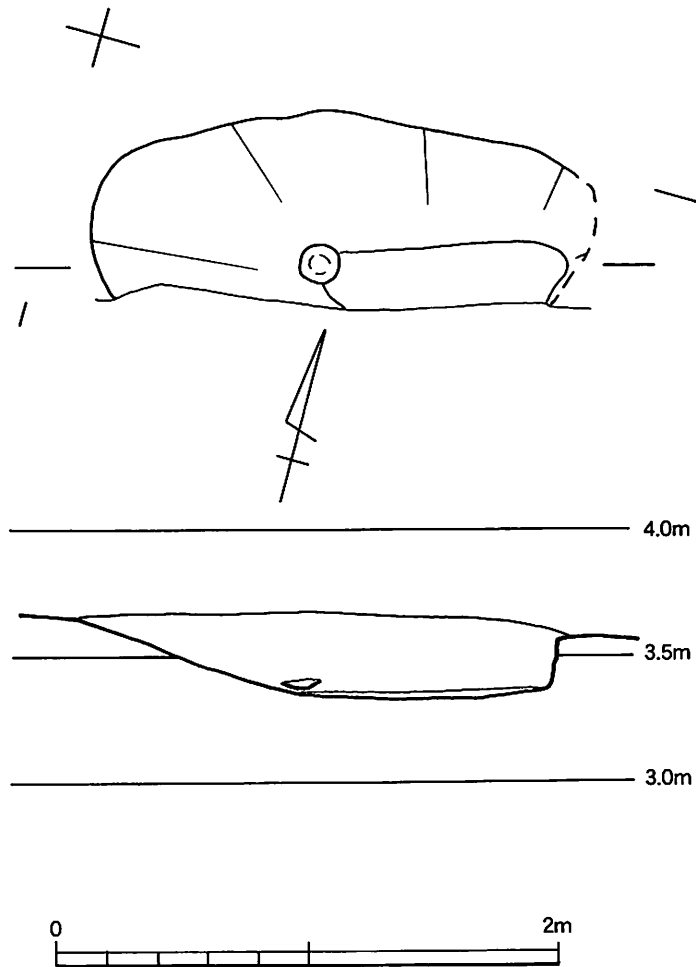
第39図 SK47出土遺物実測図

SK48 (第36・41図) 2区西部の中世地山面で検出した不正形の土坑である。中央にベルトを残したまま図化しているが、東側の段差は自然地形の斜面部が始まる位置である。南部は壁がめぐらなかつた。埋土上部に礫が十数点と瓦質土器・銭貨が出土した。

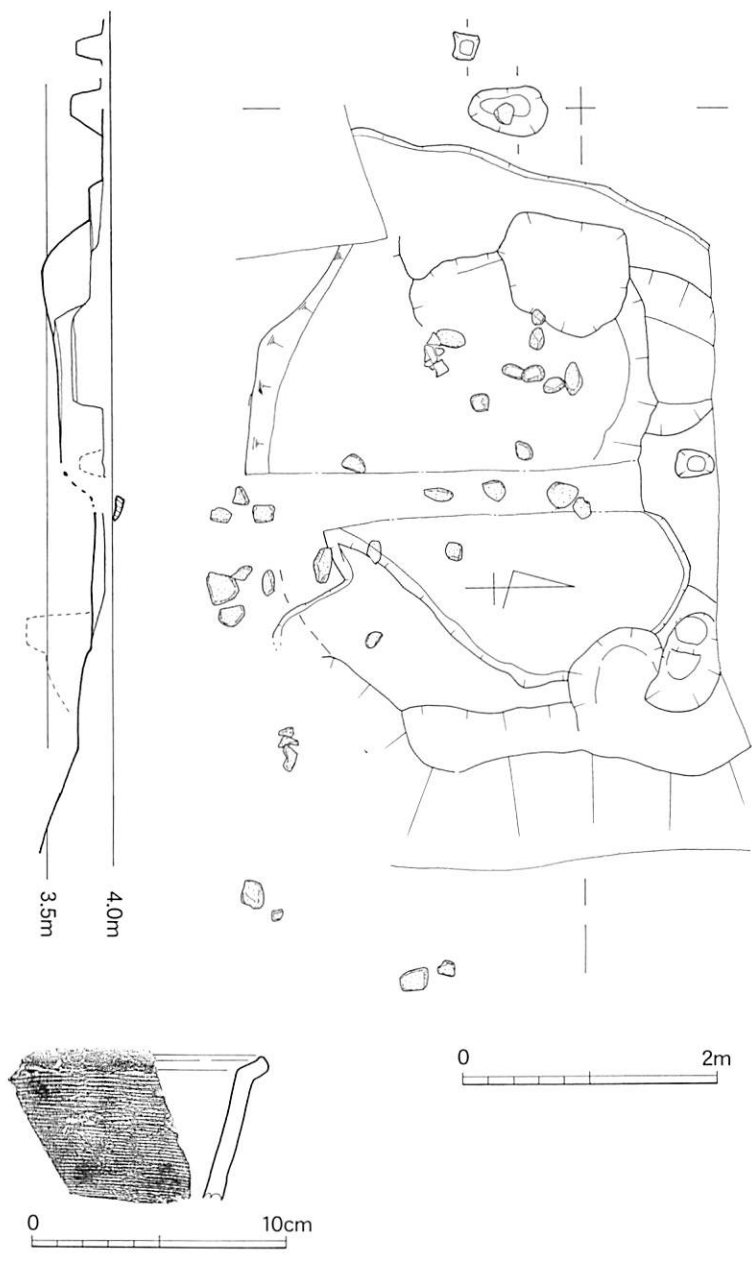
SK48出土遺物 (第41・42図) 瓦質土器は口縁部が短く外反し、内面に稜線をもつもので、器面調整は内面胴部を横方向の刷毛目、その他の部分はなでている。銭貨は「口元口口」と読める銅銭である。

SK50 (第40図) SK24調査後、下位で検出した土坑である。所属時期は16世紀前葉～中葉である。

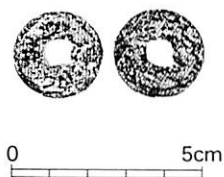
SK50出土遺物 (第40図1) 床面から出土した京都系土師器1期の皿である。



第40図 SK50



第41図 SK48遺構及び出土遺物実測図



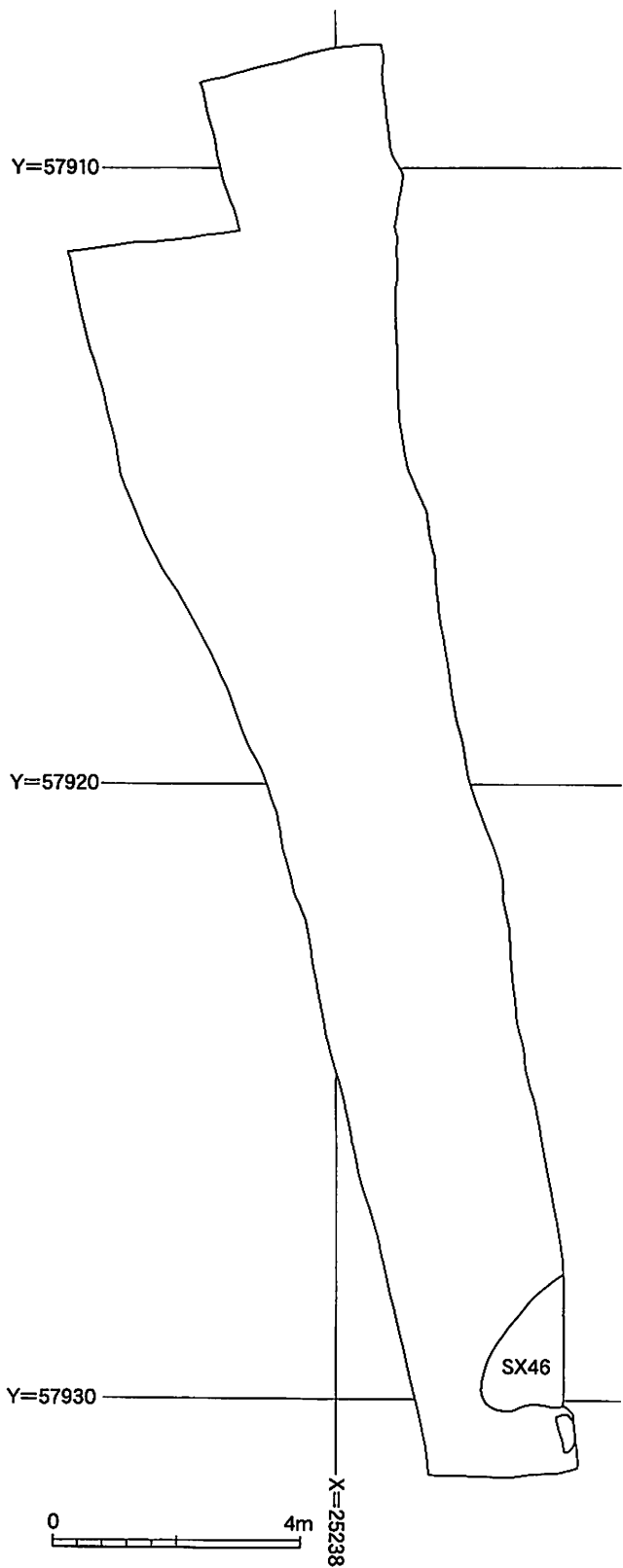
第42図 SK48出土銭投影

#### 包含層の遺物

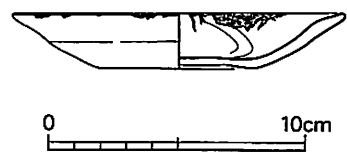
遺構以外の遺物は、平面的に位置を記録して採り上げたものと包含層それぞれで一括したものとがある。本調査区では近世以降の水田の酸化し硬化した床土を5層とする。第62図に5層上下の遺物を掲載している。第50図～58図・60図の遺物はSK11壁面の土層を基準に採り上げたため、第4図の調査区北面土層との対応関係について説明しておきたい。SK11検出面である薄い褐色土（土器片にはB層と注記）が北壁の30層上部に対応する。下層の黒色土は30層中部と下部である。黒色土下位に褐色土（C層と注記）があり、その下の黒褐色土（D・E層と注記）が北壁の43層に対応する。

#### 第46図（1～36）

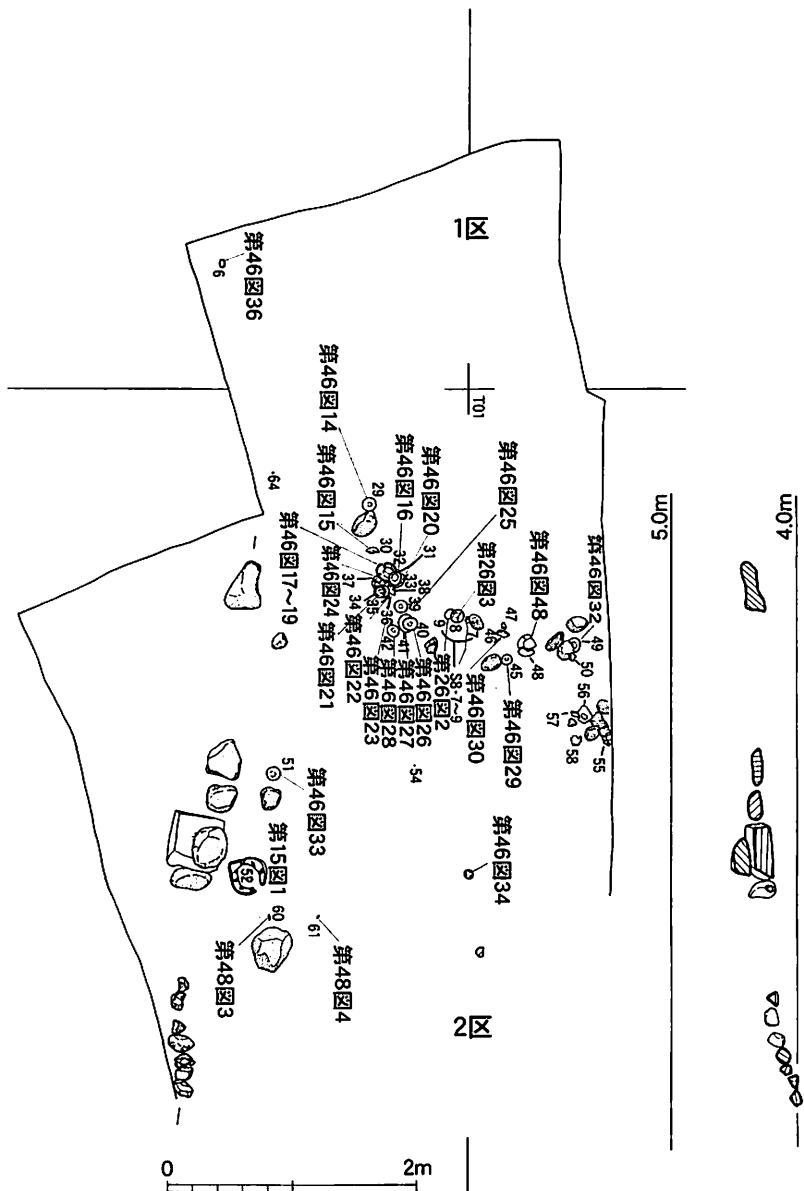
第47図（1～9） 1は中国南部製の褐釉陶器四耳壺。2は瓦質甕の口縁部。3・4は備前焼插鉢。6は浅い瓦質火鉢。7は瓦質の風炉。8は丸瓦。9は平瓦。



第43図 遺構配置図

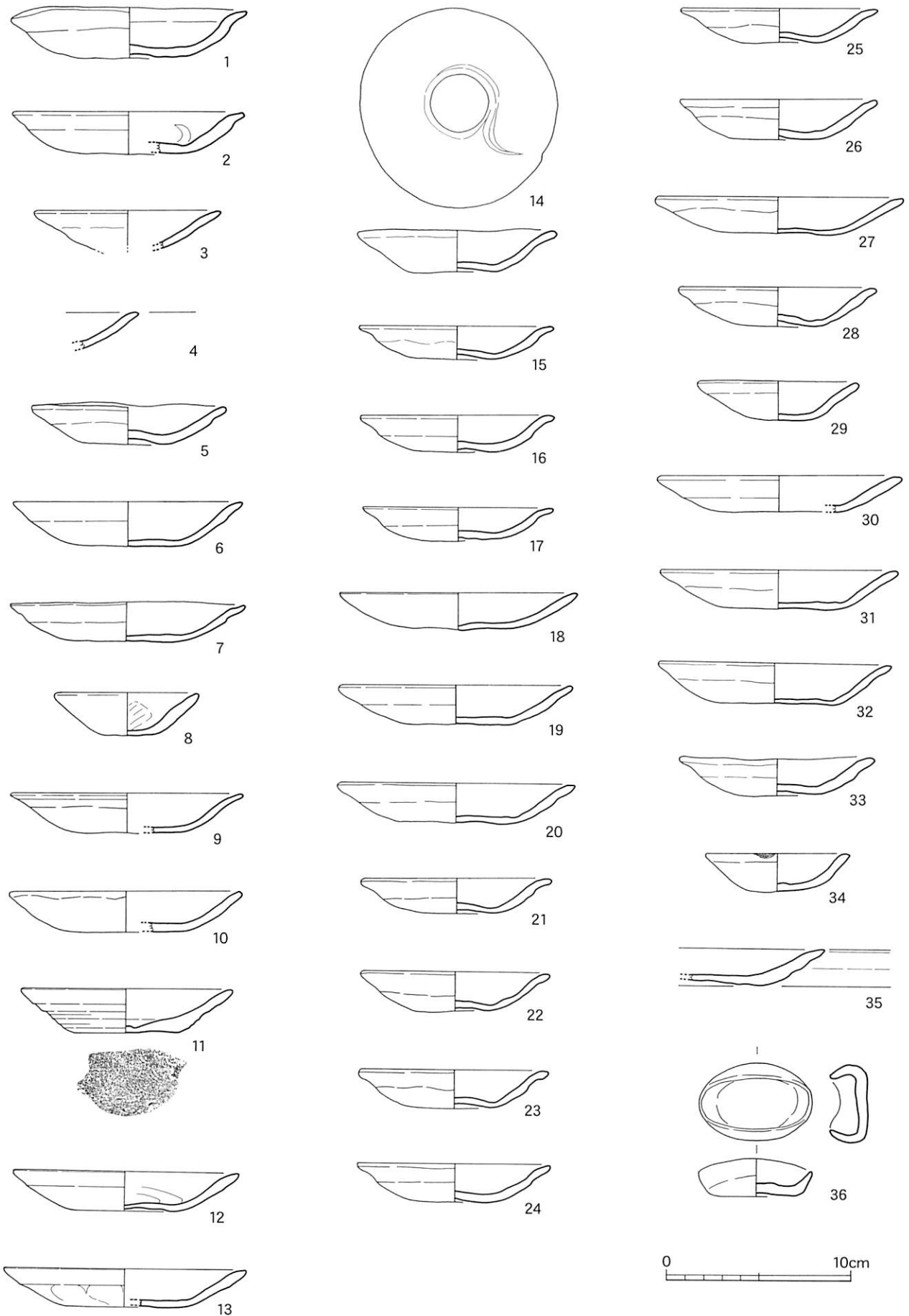


第44図 SK46遺構実測図

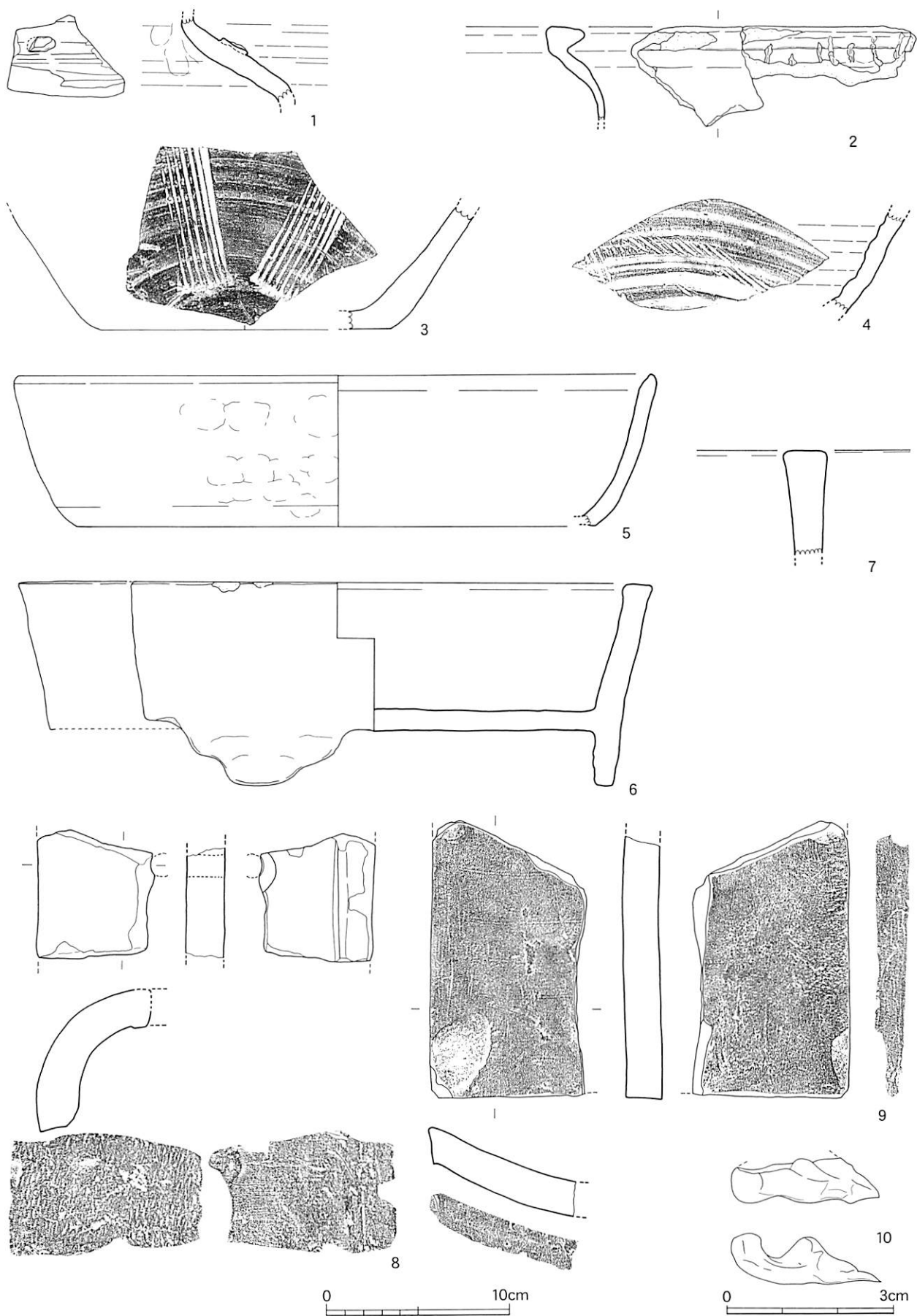


第45図 1・2区の標高4.4m前後遺物出土状況

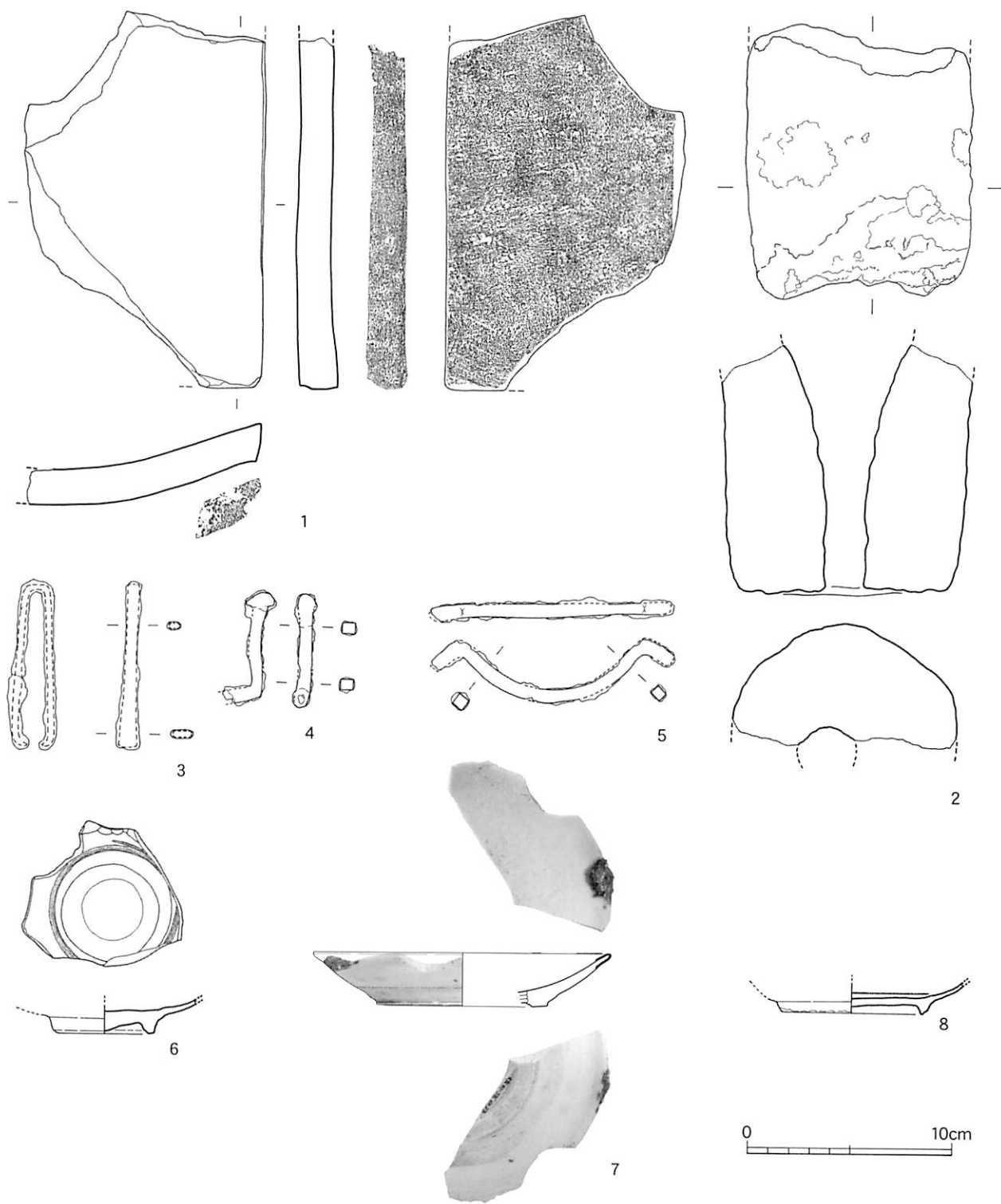




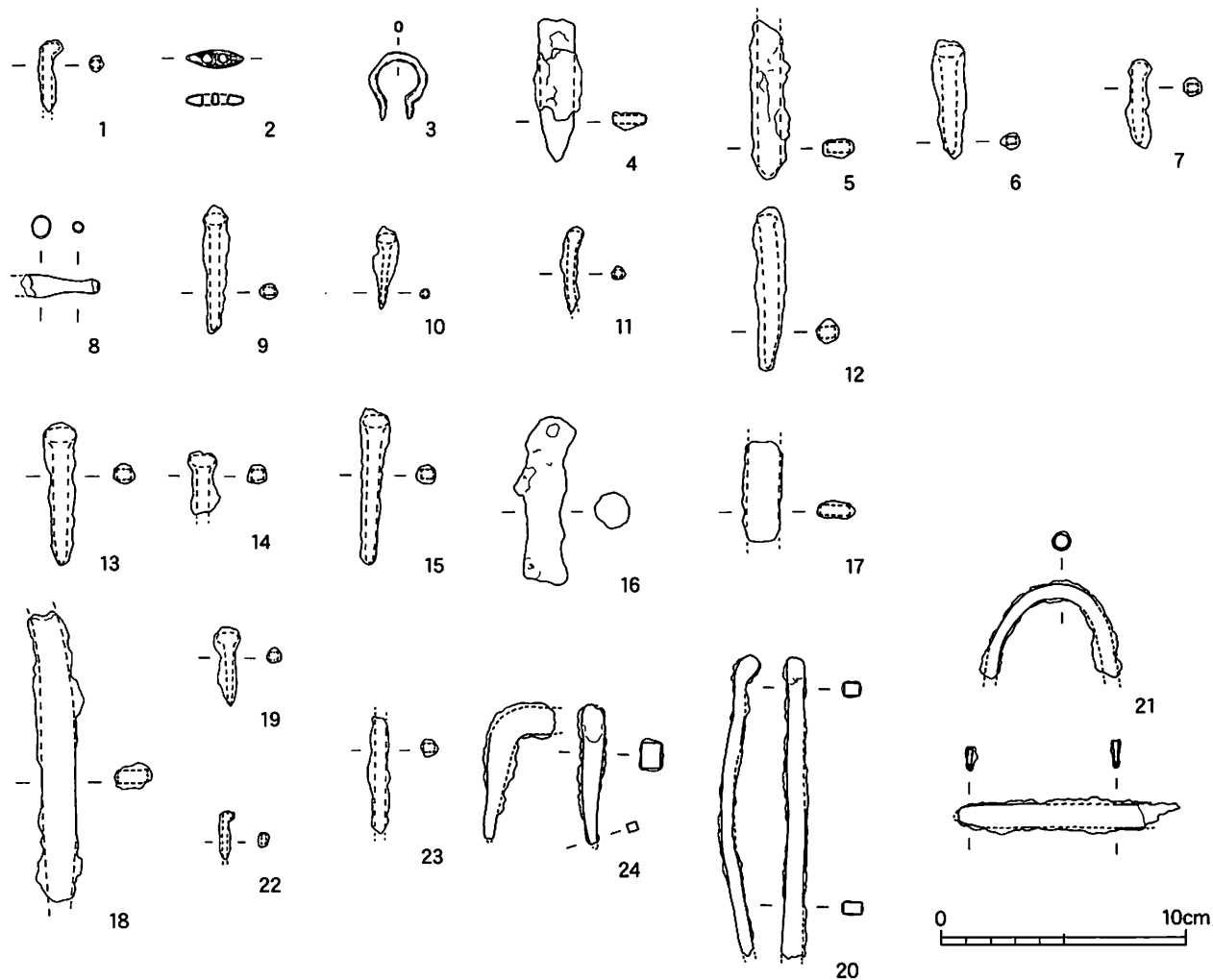
第46図 平面図にある遺物実測図



第47图 包含層出土遺物実測図



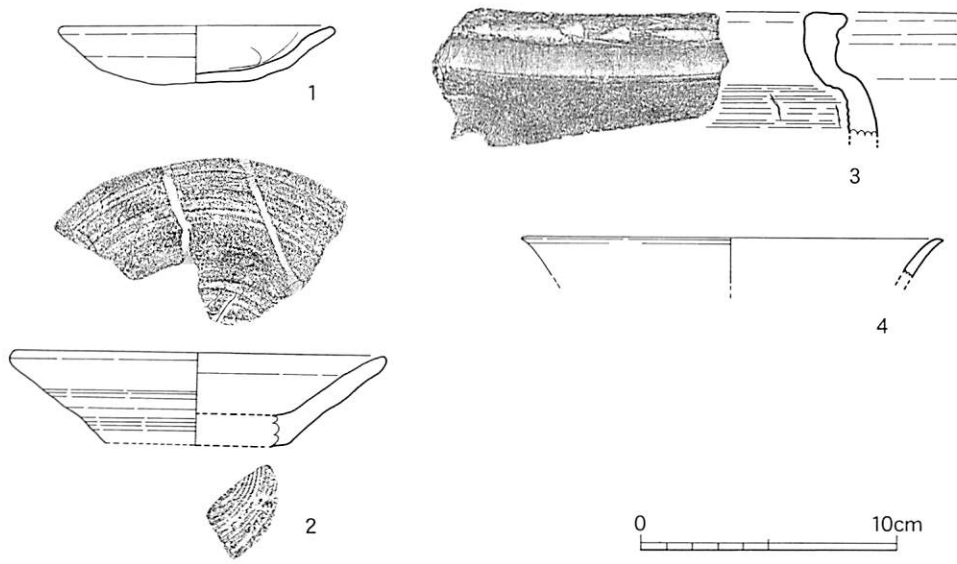
第48図 包含層出土遺物実測図



第49図 包含層出土遺物実測図

第48図（1～8） 1は平瓦。2は凝灰岩製の羽口で送風口部分に溶けた金属が溶着している。3は鉄製毛抜きの完形品。4は鉄製釘。5は鉄製品で、筆筒等の引出しの取っ手。6は中国製青花皿で、見込みには幅13mmほどの蛇の目釉剥ぎがあり、重ね焼き痕が付く。畳付きは釉剥ぎ。7は中国製白磁皿。8は中国景徳鎮窯系青花皿。見込みと高台付け根に青い線が廻る。

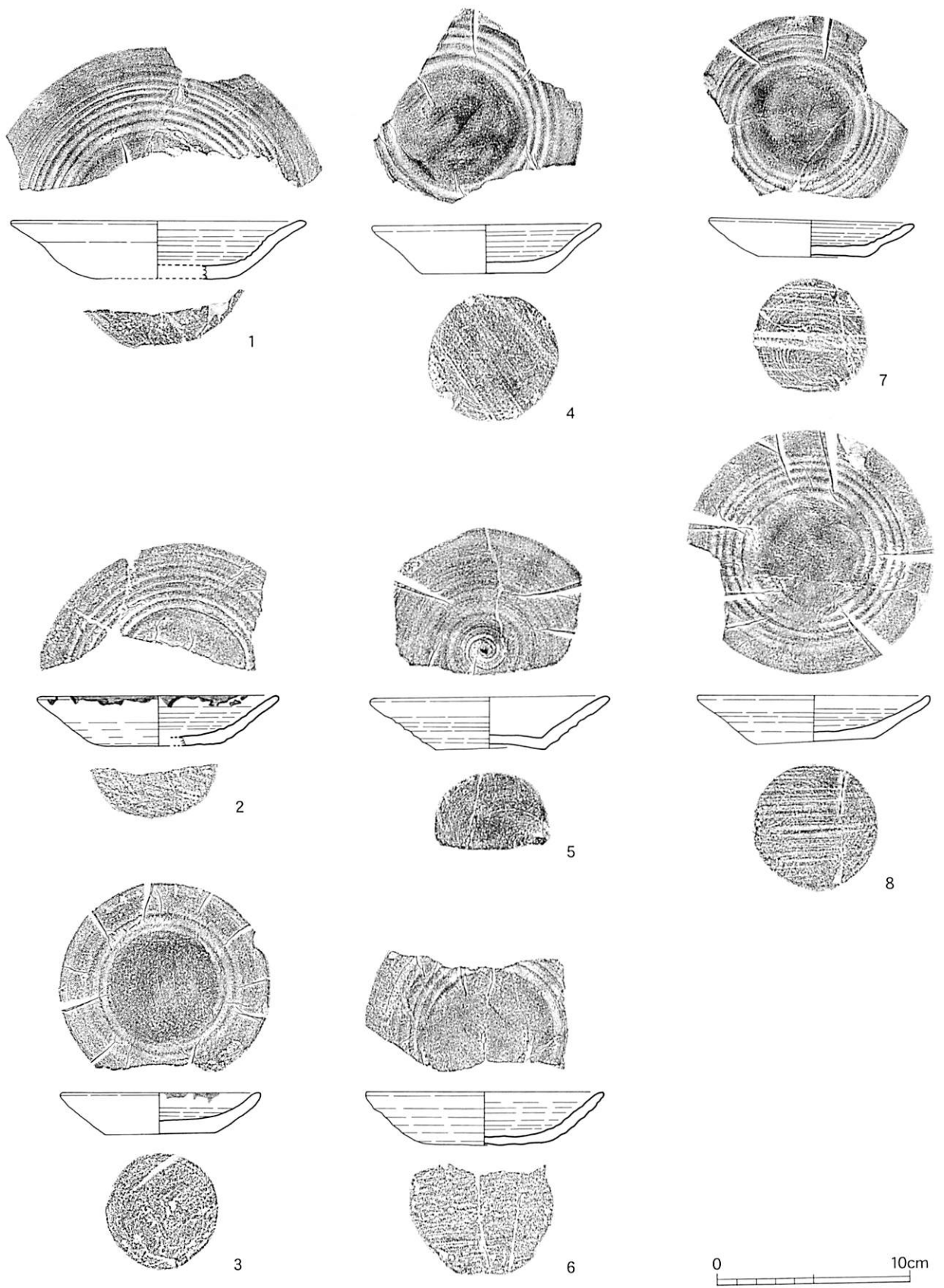
第49図（1～25） 2は表面に金箔が付着した鍔等の紐用品である。8は6層出土の煙管。



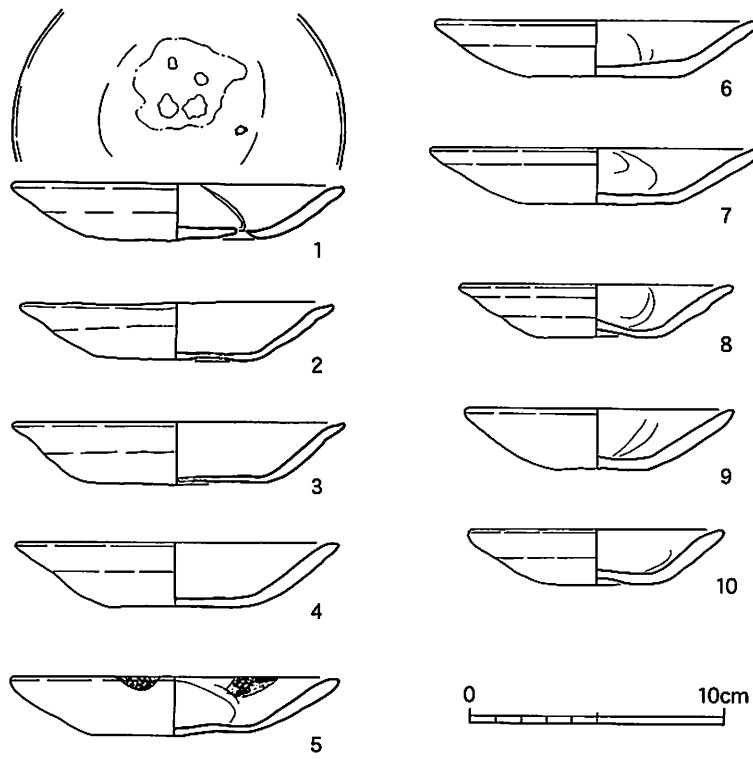
第50図 包含層出土遺物実測図

第50図（1～19） 黒色土層出土。1は京都系土師器2期の皿。2は在地系土師器皿。3は瓦質土器の甕。口縁部に列点紋があるもので、大友府内町で通有のものである。

第51図（1～25） 黒色土直下の褐色土層から出土した。すべて内面にロクロ目を残す在地系土師器皿である。2・4・6～8は外底面に板状圧痕が付く。2と3は口縁部上端には煤が付着し灯明皿として使われている。

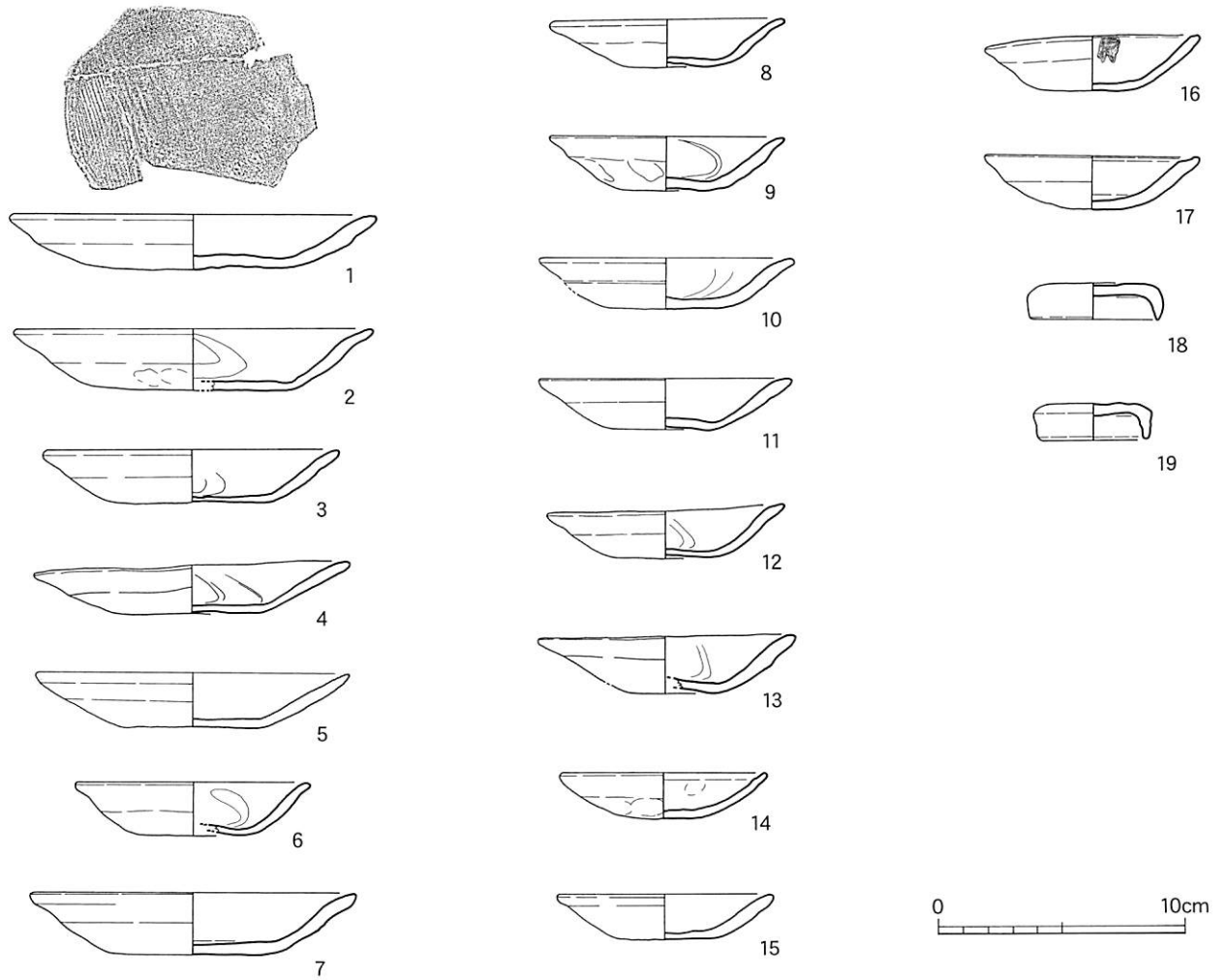


第51图 包含層出土遺物実測図



第52図 包含層出土遺物実測図

第52図（1～10） 黒色土直下の褐色土層から出土した。すべて1期の京都系土師器皿である。1は完形品で焼成後の穿孔が5個あり、中央部の4個は外側から、単独の1個は内側から突いている。2と5の口縁部上端には煤が付着し灯明皿として使われている。



第53図 包含層出土遺物実測図

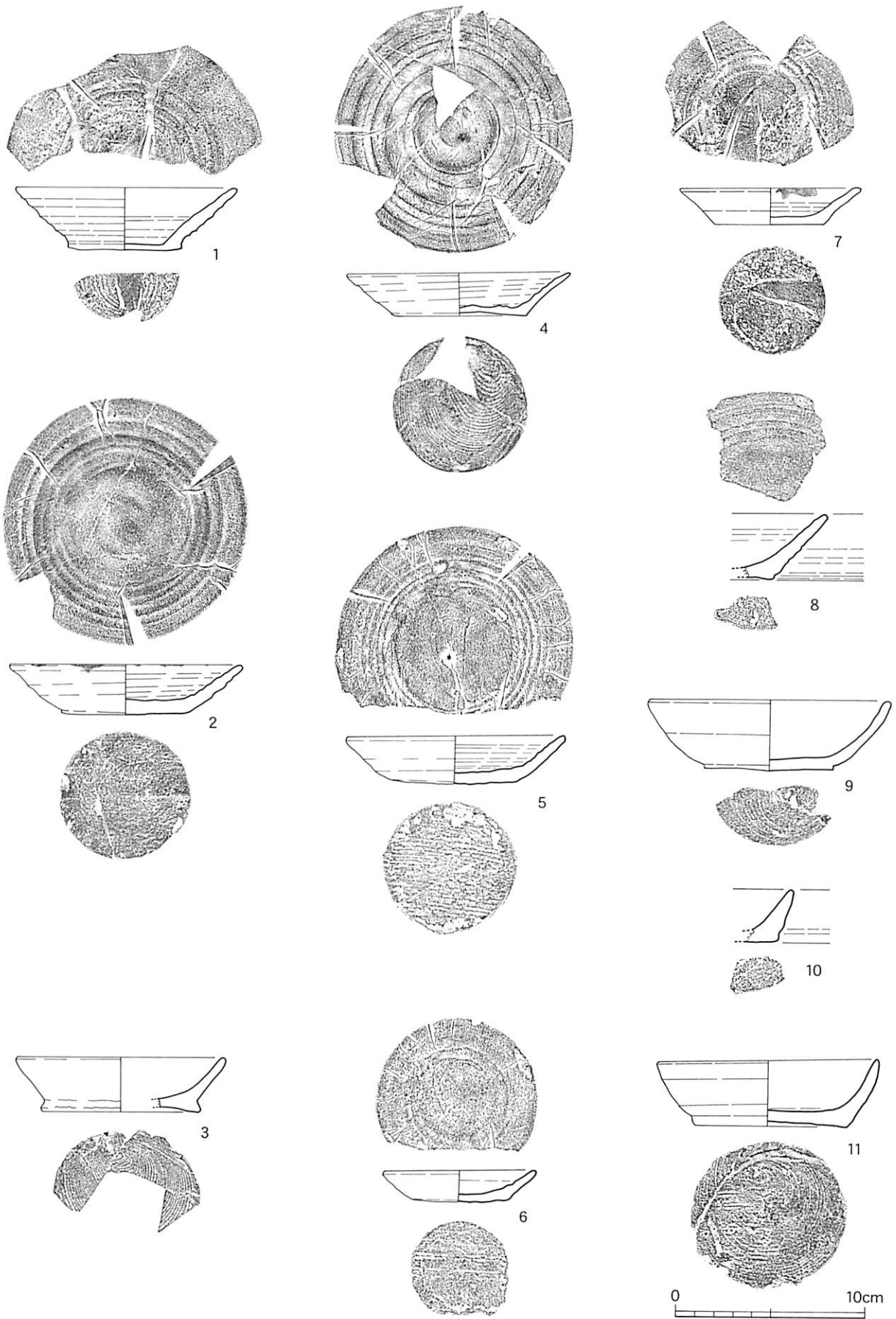
第53図（1～8） 第53図～第57図の遺物は、第51・52図の遺物が出土した褐色土層直下の黒褐色土層から出土した。第53図はすべて京都系土師器で、18・19が通称焼塩蓋である他、残りは皿・小皿である。16は口縁部上端には煤が付着し灯明皿として使われている。

第54図（1～4） 黒褐色土層出土。すべて在在系土師器である。2・5・6・11には外底面に板状圧痕が付く。3・9・10・11には内面に段状のロクロ目が見られない。9と11は14世紀初頭から前葉のもの。7は口縁部上端には煤が付着し灯明皿として使われている。

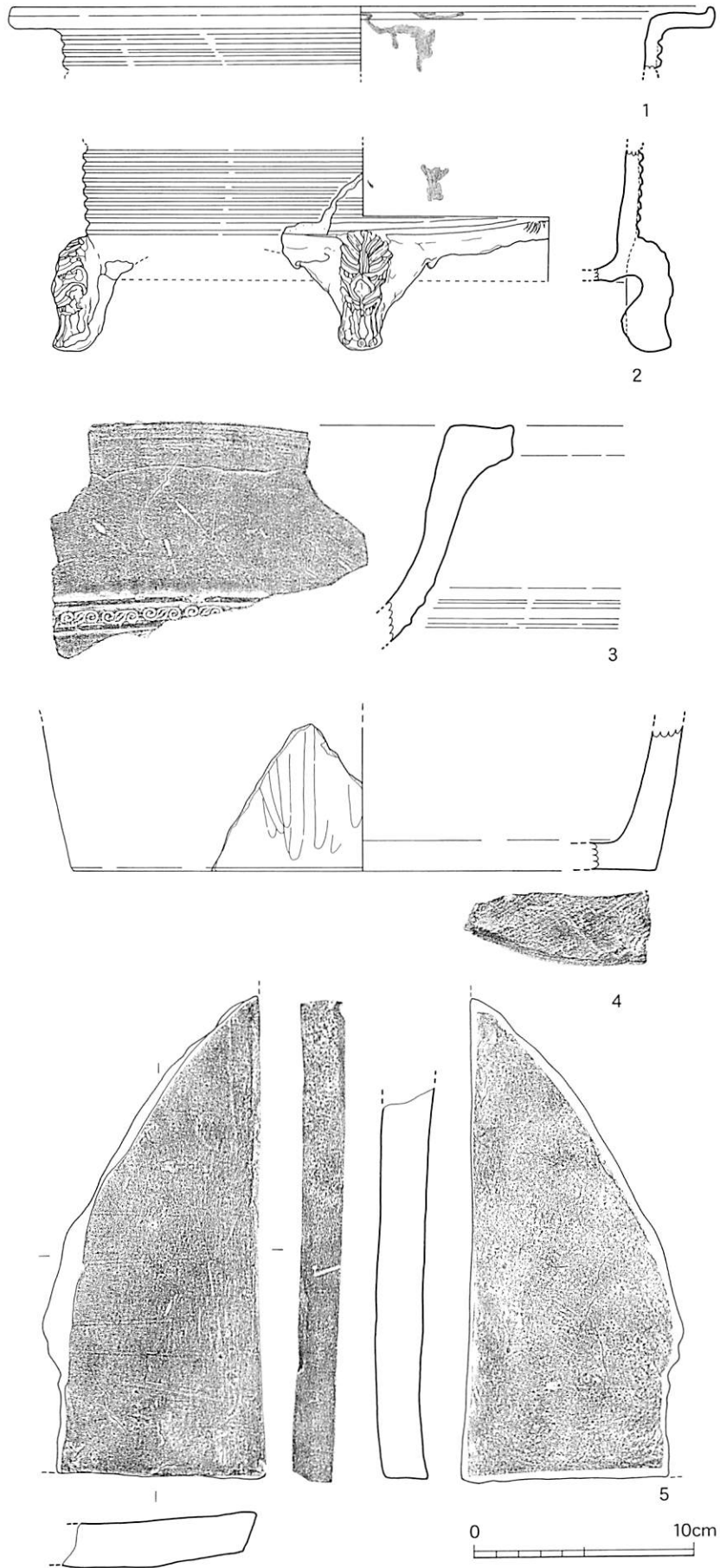
第55図（1～5） 黒褐色土層出土。1は平行条線のめぐる瓦質火鉢。2は1と同一個体と思われる器体下半部で、外面に条線をめぐらし、脚部に型押しによる龍頭紋をもつ。3は在在系火鉢で双頭炭手流雲紋の中央に分割線をもつもの。4は瓦質火鉢。5は平瓦。

第56図（1～3） 黒褐色土層出土。すべて平瓦。

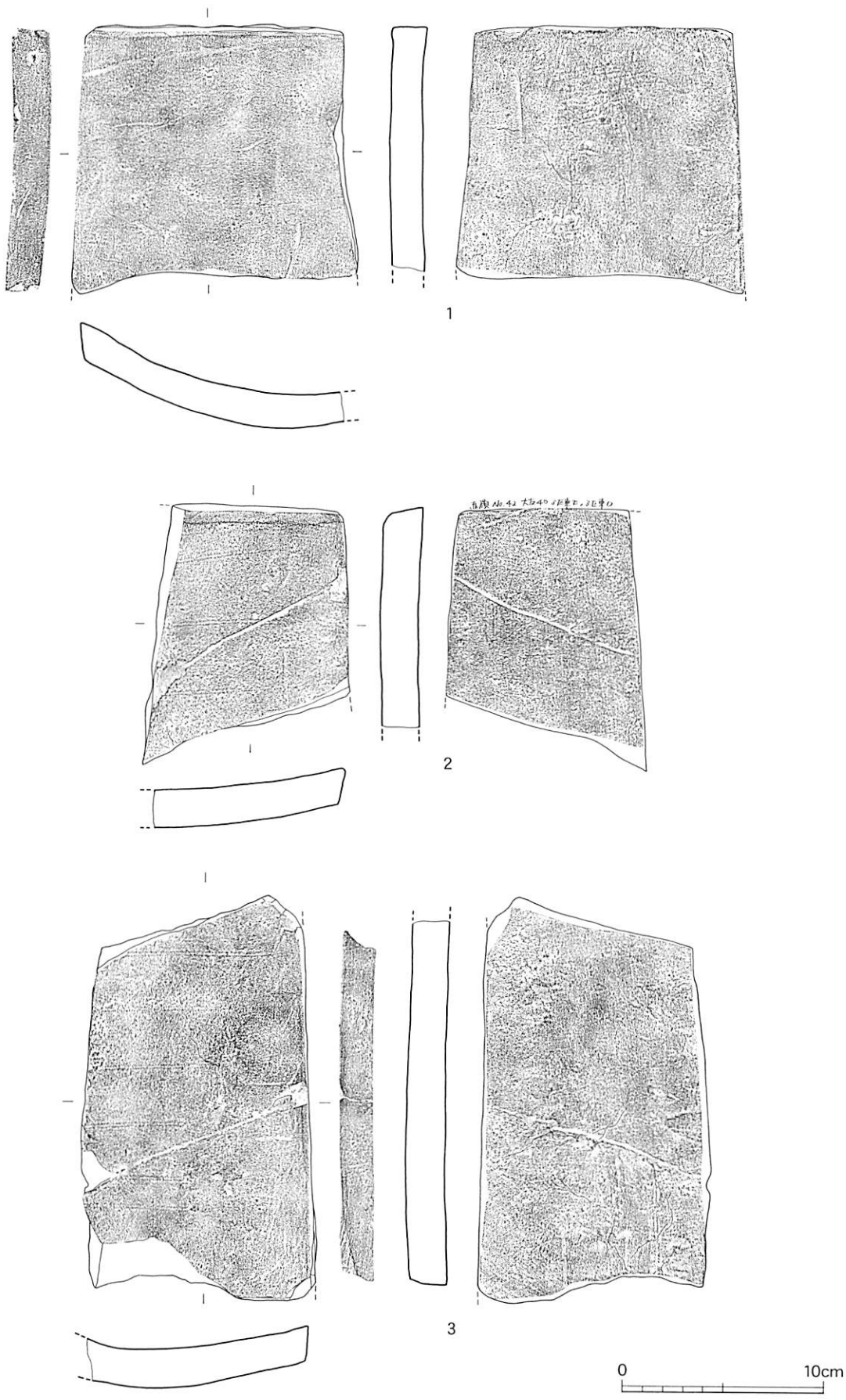




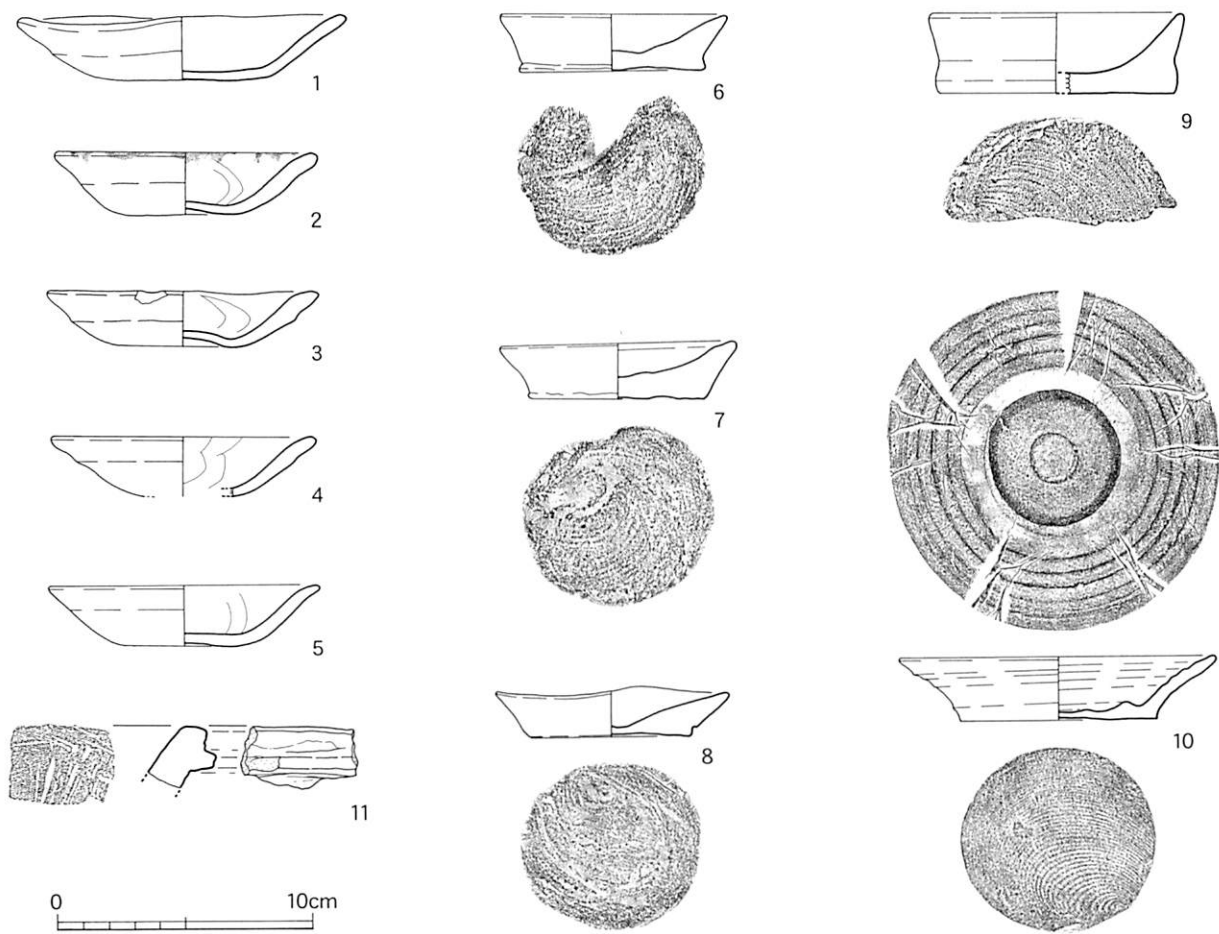
第54图 包含層出土遺物実測図



第55图 包含層出土遺物実測図

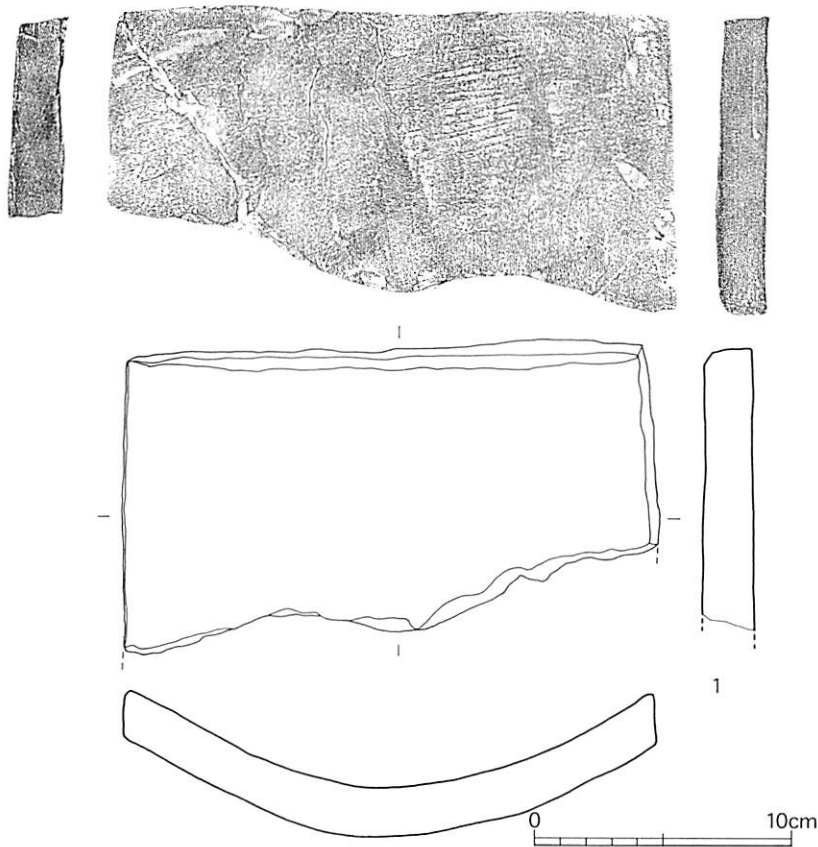


第56図 包含層出土遺物実測図



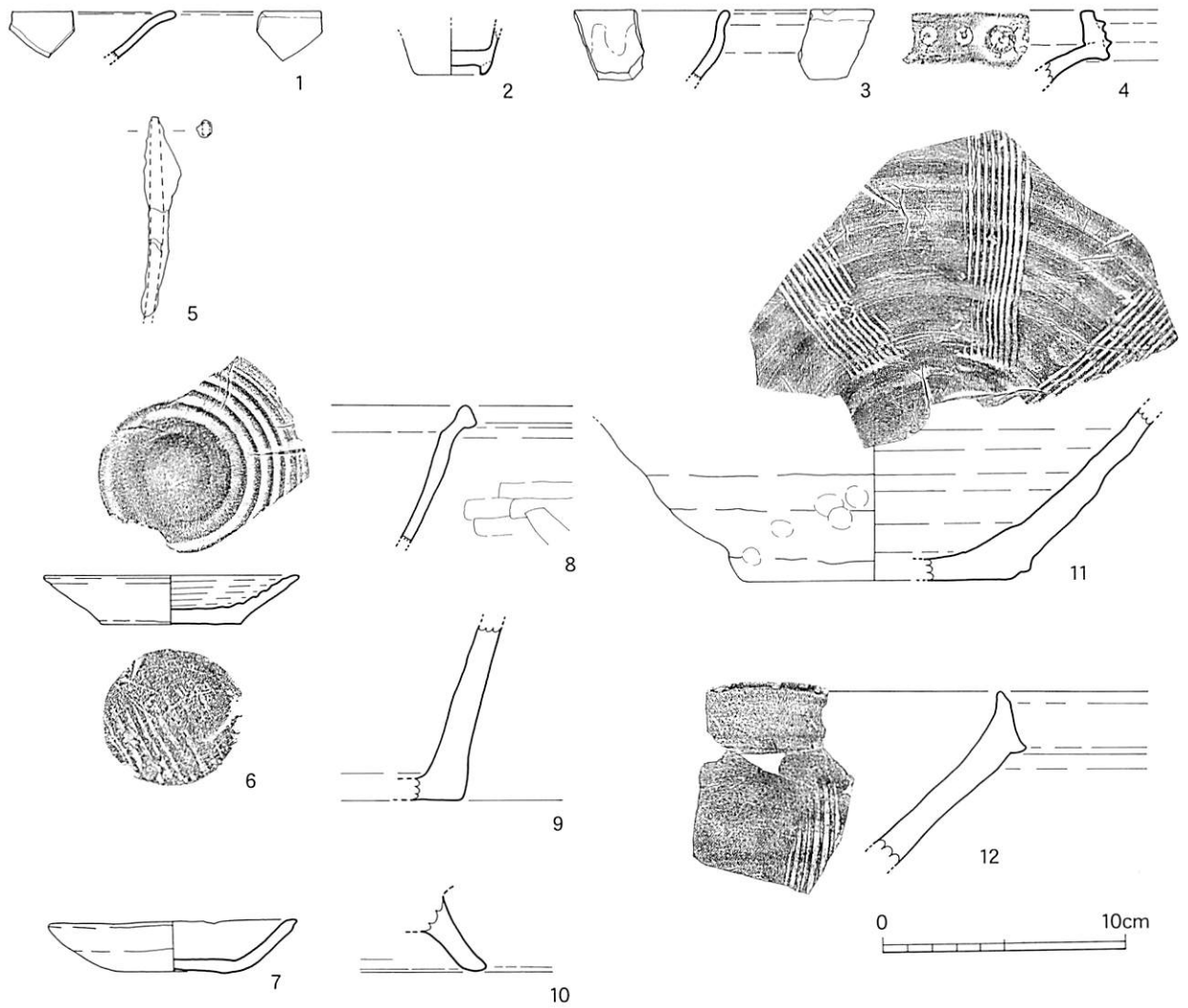
第57図 包含層出土遺物実測図

第57図（1～9） 黒褐色土層出土。1～4は1期の京都系土師器皿。5～8は見込み部分を除いて断面が三角形となる共通点をもつ。在地系土師器にほとんど類例（大友府内町跡5次調査区15世紀代のASK003で1点）がなく、他地域からの搬入品の可能性もある。9は滑石製石鍋。



第58図 包含層出土遺物実測図

- 第58図(1) 黒褐色土層の下層で、地山直上から出土した。1は平瓦。
- 地山直上 第59図(1~11) 1~5は焼土分布部分(SK12)から出土した。6~11は攪乱部分出土。6は在地系土師器皿。外底面に板状圧痕が付く。7は京都系土師器。8は土師質鍋。9は瓦質火鉢。10は備前焼播鉢。11は近世陶器播鉢。
- 第60図(1~19) 黒褐色土層の下層で、地山直上から出土した。1~13・15~18は京都系土師器1期。1・2・5・6の見込み部には刷毛目が残る。11には焼成前の穿孔が3個ある。14が在地系土師器。15には焼成後の穿孔がある。
- 二回目 第61図(1~25) 1・2区で遺構検出した二回目の面で出土した遺物である。複数層が斜面に堆積していた3区との対応関係は把握できなかった。1~9は京都系土師器皿。1は見込みに刷毛目が残る。5・9は口縁部上端には煤が付着し灯明皿として使われている。10は在地系土師器皿。11は瓦質火鉢の脚。12は瀬戸美濃製陶器鉢。13は弥生土器。14は平瓦。15は鉄鏝。
- 近世以降 第62図(1~20) 近世以降の層から出土した遺物である。5層が鉄道敷き以前の水田床土である。1~3は4層、4~8は5層、9~18は6層、19・20は7層から出土した。1は土師質鍋。2は白磁で、見込みに目跡がひとつある。3は肥前系の陶胎染付け碗で、17世紀前葉。4は瓦質播鉢。5は近世1b期の備前焼播鉢。6は備前焼壺。7は古代の須恵器高台付き碗。8は白磁皿。9は近世初頭唐津焼の碗。10は瓦質火鉢。11は青花皿。12は備前焼水屋甕。13は備前焼壺。14は須恵器甕。15は土師質の高坏脚部。16は備前焼壺。17は備前焼甕。18は中国華南製白磁皿。19は中国製青磁碗底部。20は備前焼壺。21は中国製青磁皿で明緑灰色。

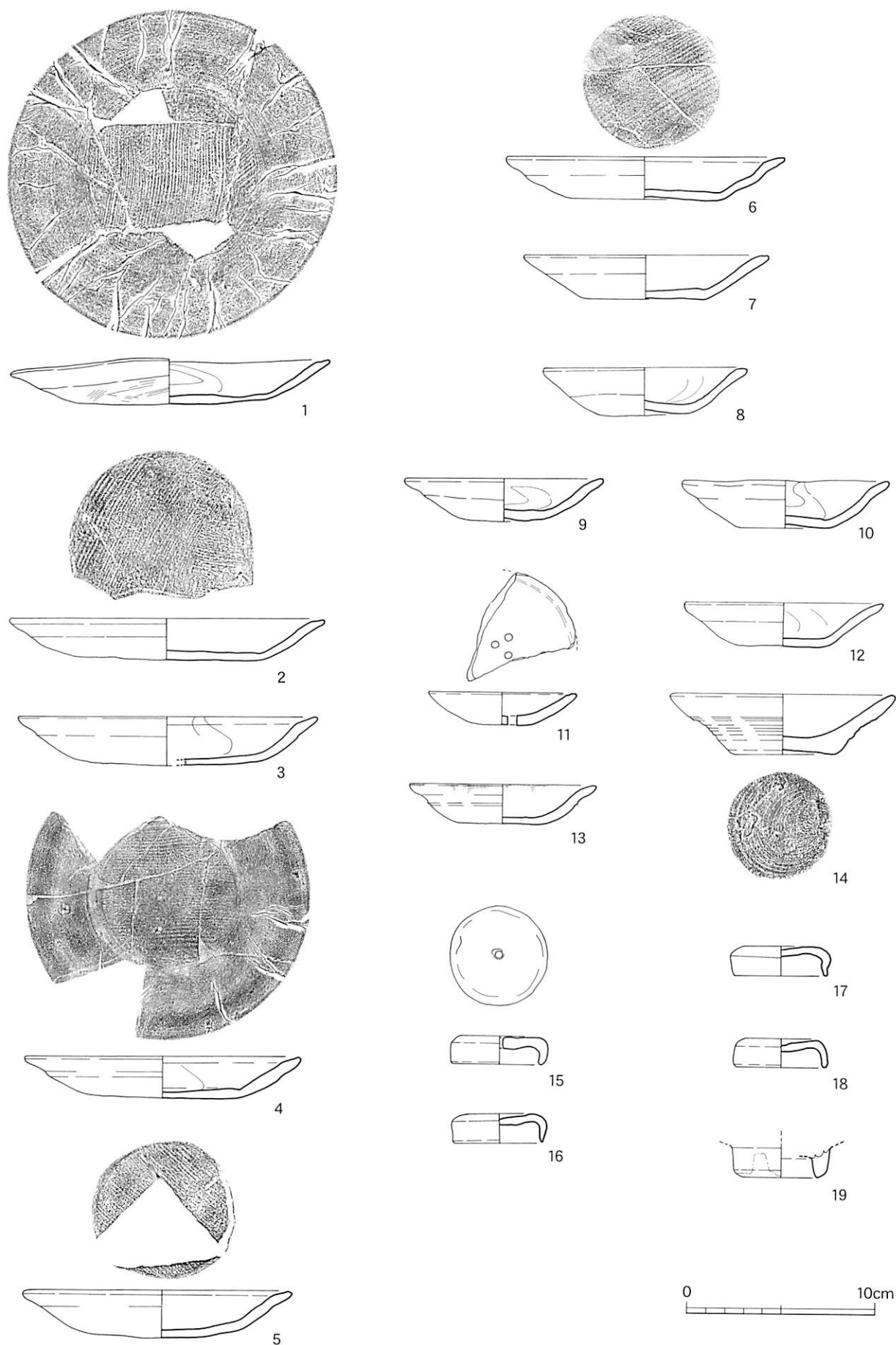


第59図 包含層出土遺物実測図

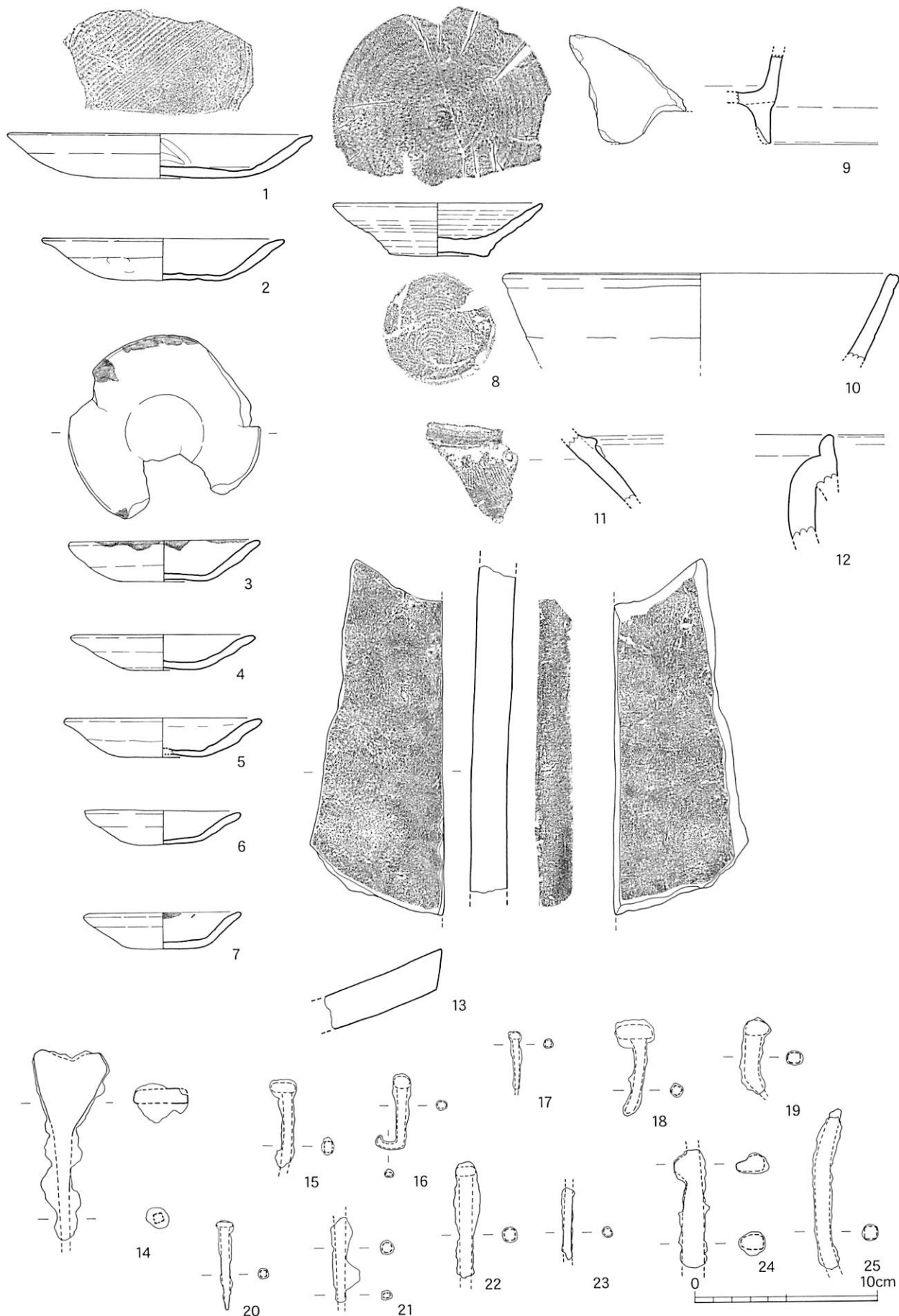
第63図（1～8） 銅製の錢貨である。1・2は銘文不明。3は北宋の元宝通宝、4は北宋の熙寧通宝、5は煙管の頭を潰し通貨として通用した雁首錢。6・7は唐の開元通宝。

第64図（1～5） 1～4は第6図の層序図中の16層から抜き取った1期の京都系土師器皿である。この16層はSK33として扱ったところであり、同一時期に廃棄された遺物である。

カラー写真図版の遺物（巻末1～51） 遺構外で出土した陶磁器類を説明する。1・2は表面採集。3・4は攪乱出土。5は2層。16世紀の中国龍泉窯青磁碗C3類。6～10は4層出土。11～21は5層出土。22～34は6層出土。

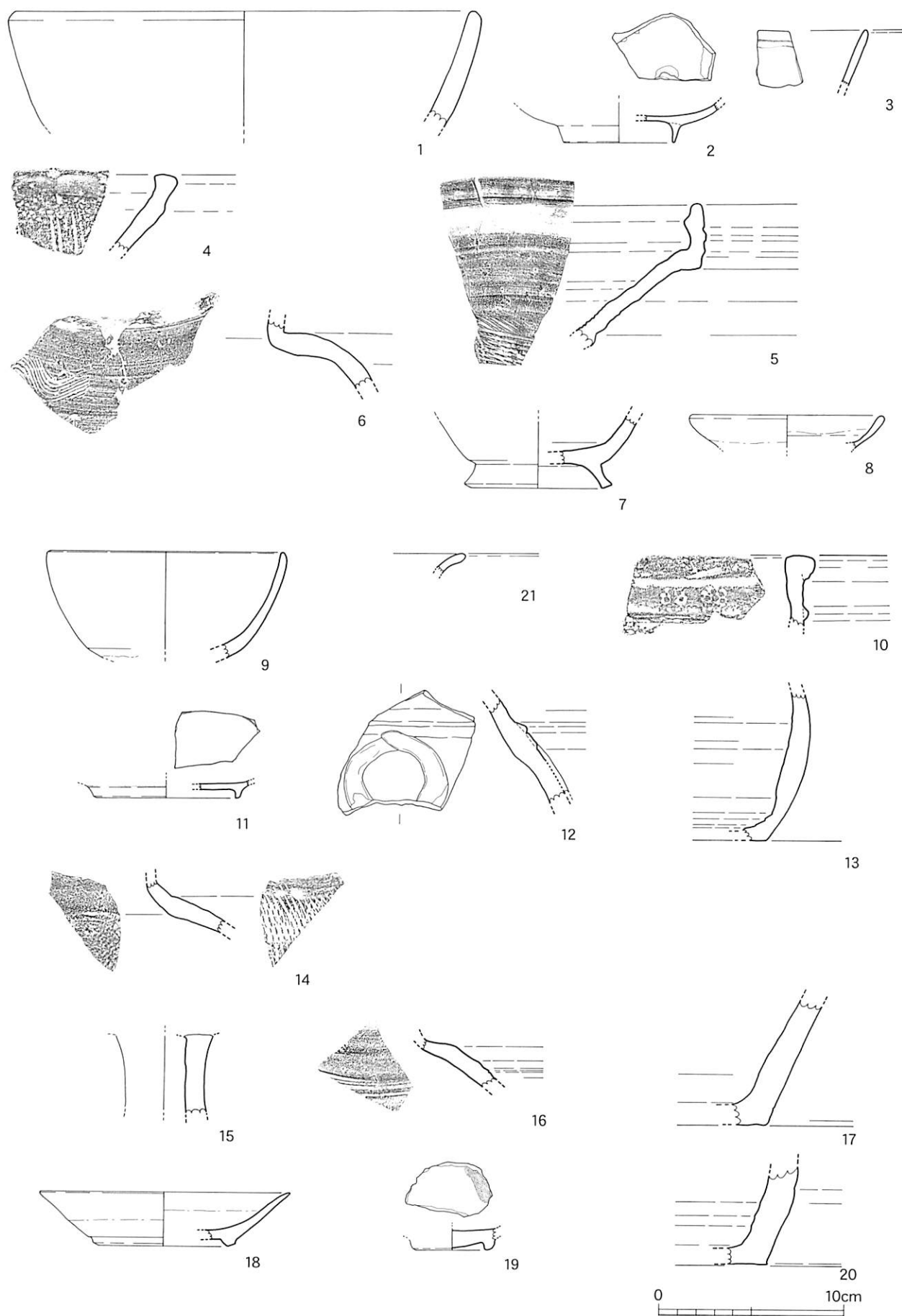


第60图 包含層出土遺物実測図

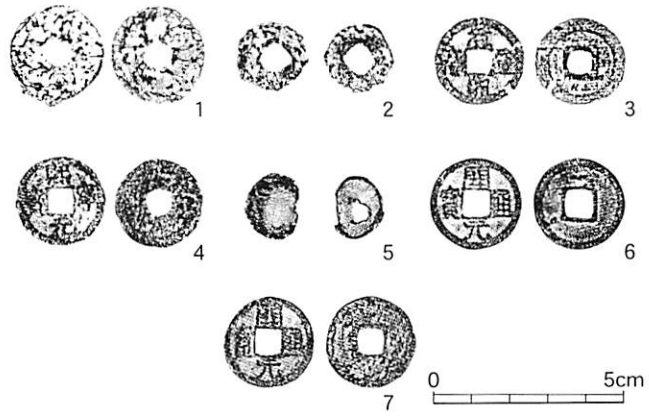


第61图 包含層出土遺物実測図

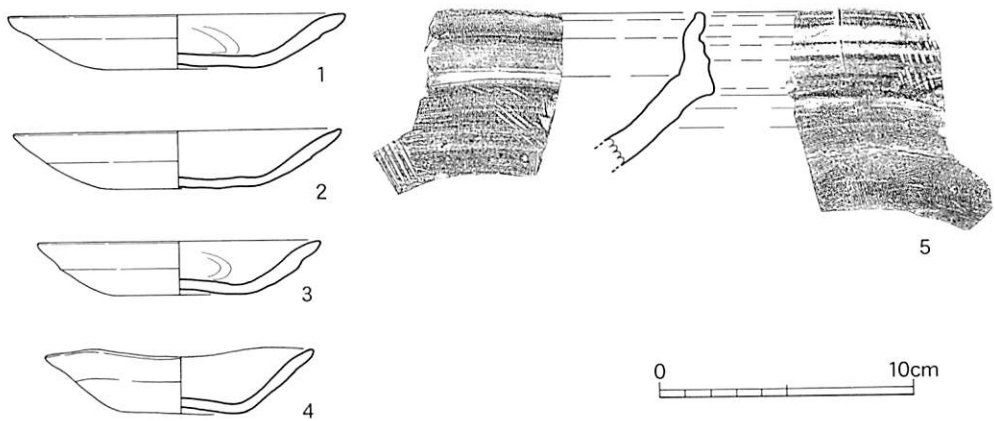




第62図 包含層出土遺物実測図



第63図 包含層出土遺物実測図



第64図 土層図中の遺物実測図

# 遺物觀察表

府内町跡40次調査遺物観察表

挿図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	
			口径	底径	器高			
第9図1	陶器	型押皿	中国華南	—	—	—	SD1	
第9図2	陶器	鉢	備前	—	—	—	SD1	ヘラ記号
第12図1	京都系土師器	皿	在地	8.7	—	2.9	SK5	褐色・茶色土粒中量・二箇所煤
第12図2	青磁	碗	中国	—	—	—	SK5	薄緑
第12図3	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	—	SK5	淡灰白色
第12図4	鉄製品	釘	在地	—	—	—	SK5	
第12図5	京都系土師器	皿	在地	9.2	—	2.3	SK6	褐色・外面煤付着
第12図6	京都系土師器	鉢	在地	—	—	—	SK6	
第12図7	陶器	甕	備前	—	—	—	SK6	傾き不明
第12図8	瓦	平瓦	在地	—	—	—	SK7	凸面ヘラ切り
第12図9	鉄製品	釘	在地	50.8 g	57.0 g	—	SK7	
第12図10	政和通宝	坏	在地	—	—	—	SK6	北宋1111年
第15図1	陶器	擂鉢	備前	26.3	—	—	SK12	最大口径31.8cm
第15図2	陶器	擂鉢	備前	—	17.6	—	SK12	交叉すり目
第15図3	陶器	天目碗	瀬戸美濃	—	—	—	SK12	
第15図4	陶器	舟徳利	朝鮮	—	—	—	SK12	暗赤褐色
第15図5	陶器	瓶	備前	—	—	—	SK12	暗赤褐色
第15図6	鉄製品	刃物	在地	13.4	0.6	72.7	SK12	数値は長さ・厚さ・重さの順
第15図7	鉄製品	釘	在地	5.8	1.0	18.5 g	SK12	数値は長さ・厚さ・重さの順
第15図9	陶器	擂鉢	在地	—	—	—	SK4	交叉すり目
第15図8	鉄製品	釘	在地	—	—	—	SK4	
第15図10	土	壁土	在地	13.5	5.3	8.4	SK4	
第17図1	京都系土師器	坏	在地	14.4	—	2.5	SD19	灰白色
第17図2	京都系土師器	坏	在地	13.2	—	2.1	SD19	浅黄褐色
第17図3	京都系土師器	坏	在地	10.9	—	2.5	SD19	灰白色
第17図4	京都系土師器	坏	在地	8.8	—	2.1	SD19	浅黄褐色
第17図5	染付け	壺	肥前	—	—	—	SD19	1630年~50年
第17図6	青花	基筒底皿	中国漳州窯	—	—	—	SD19	
第17図7	ガラス		不明	—	—	—	SK23	幅2.3cm。緑色
第19図1	陶器	擂鉢	備前	—	—	—	SX26	
第19図2	陶器	甕	備前	—	—	—	SX26	ヘラ記号
第19図3	陶器	擂鉢	備前	—	—	—	SX26	交叉すり目
第19図4	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	—	SX26	橙褐色
第19図5	石製品	石臼	在地	—	26	9	SX26	下臼。凝灰岩
第19図6	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	—	SX26	橙色
第19図7	瓦	平瓦	在地	—	—	—	SX26	
第19図8	瓦	平瓦	在地	—	—	—	SX26	
第21図1	京都系土師器	碗	在地	—	—	—	SK24	
第21図2	陶器	皿	瀬戸美濃	—	—	—	SK24	両面に砂目積み痕
第21図3	白磁	碗	朝鮮	—	—	—	SK24	両面に砂目積み痕
第21図4	青花	碗	中国龍泉窯	—	—	—	SK24	
第21図5	瓦質土器	鉢	在地	—	—	—	SK24	灰黒色
第21図6	瓦質土器	碗	在地	—	—	—	SK24	淡黄灰色
第21図7	瓦質土器	碗	在地	—	18.3	—	SK24	明橙褐色
第21図8	瓦質土器	鍋	在地	—	—	—	SK24	暗褐色
第21図9	陶器	擂鉢	備前	—	—	—	SK19+SK24+東6層	交叉すり目
第21図10	鉄製品		在地	14.6	0.5	26.8 g	SK24	数値は長さ・厚さ・重さの順
第21図11	鉄製品	釘	在地	4.2	0.6	3.4 g	SK24	数値は長さ・厚さ・重さの順
第21図12	陶器	三彩	中国華南	—	—	—	SK24	
第23図1	白磁	皿	中国	11.6	—	—	SK31	
第23図2	陶器	擂鉢	備前	—	—	—	SK31	北壁No.21と接合
第23図3	陶器	水入	備前	11.8	—	—	SK31	
第23図4	白磁	碗	ベトナム	—	6.4	—	SK31	外底面露胎。見込み目跡
第23図5	青花	碗	中国景德鎮窯	—	—	—	SK31	
第23図6	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	SK31	暗褐色
第23図7	瓦質土器	角火鉢	在地	—	—	—	SK31	灰黄褐色
第23図8	瓦質土器	火鉢	在地	—	38	—	SK31	暗灰色
第23図9	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	2.2	SK31	淡黄色
第23図10	在地系土師器	皿	在地	8.6	5.5	1.8	SK31	橙色
第23図11	鉄製品	釘	在地	3.4	0.9	7.7 g	SK31	数値は上1点の長さ・厚さ・重さの順
第23図12	鉄製品	釘	在地	5	0.75	5.1 g	SK31	数値は長さ・厚さ・重さの順
第26図1	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	1.7	SK8	金色雲母微量
第26図2	京都系土師器	皿	在地	12.1	—	2.5	SK8	褐色・茶色土粒少量
第26図3	京都系土師器	皿	在地	10.9	—	2.1	SK8	褐色
第26図4	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	2.2	SK8	褐色・見込み環状窪み巡る
第26図5	瓦質土器	角火鉢	在地	—	—	—	SK8	
第26図6	瓦質土器	火鉢	在地	35.6	—	—	SK8	S48と接合。暗灰色
第26図7	鉄製品	釘	在地	3.3	17.8	10.3	SK8	数値は3個の
第26図8	鉄製品	釘	在地	8.1	1.0	23.7 g	SK8	数値は長さ・厚さ・重さの順
第26図9	鉄製品	釘	在地	6.6	1.5	21.2 g	SK8	数値は長さ・厚さ・重さの順
第26図10	鉄製品	釘	在地	3.9	0.7	4.5 g	SK8	数値は長さ・厚さ・重さの順
第27図1	青花	碗	中国景德鎮窯	—	—	—	SK11	
第27図2	京都系土師器	皿	在地	15.0	—	2.1	SK11	淡黄色
第27図3	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.2	SK11	にぶい黄褐色
第27図4	京都系土師器	皿	在地	11.1	—	2.5	SK11	淡黄色

府内町跡40次調査遺物観察表

挿図No.	器 種		生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備 考
				口径	底径	器高		
第27図5	瓦質土器	皿	在地				SK11	
第27図6	鉄製品	釘	在地	3.2	0.7	4.1 g	SK11	数値は長さ・厚さ・重さの順
第30図1	京都系土師器	皿	在地	16.2		2.5	SK25	浅黄橙色
第30図2	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.3	SK25	浅黄橙色
第30図3	京都系土師器	皿	在地	10.9		2.2	SK25	淡黄色
第30図4	京都系土師器	皿	在地	10.2		2.4	SK25	にぶい黄橙色
第30図5	鉄製品	釘	在地	6.2	0.5	5.1 g	SK25	
第30図6	瓦質土器	鉢	在地	24.6			SK25	淡灰色
第32図1	京都系土師器	皿	在地	12.0		2.6	SK29	褐色
第32図2	青花	碗	中国漳州窯				SK29	
第32図3	青磁		中国				SK29	
第32図4	鉄製品	釘	在地	3.3	0.7	5.9 g	SK29	数値は長さ・厚さ・重さの順
第32図5	鉄製品	釘	在地	3.7	0.9	6.6 g	SK29	数値は長さ・厚さ・重さの順
第32図6	京都系土師器	皿	在地	12.9		2.5	SK34	橙褐色・茶色土粒中量
第32図7	在地系土師器	皿	在地	10.4	9	3	SK34	橙色・茶色土粒微量
第35図1	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.35	SK33	淡黄色
第35図2	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.15	SK33	淡黄色
第35図3	京都系土師器	皿	在地	13.2		2.5	SK33	橙褐色
第35図4	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.3	SK33	淡黄色
第35図5	在地系土師器	皿	在地	12	6.6	2.5	SK33	灰黄褐色
第35図6	須恵器	碗	国内		11.2		SK33	
第37図1	瓦質土器	火鉢	在地				SK42西	雷紋
第37図2	在地系土師器	皿	在地	12.4	6.1	2.55	SK42	赤褐色
第37図3	在地系土師器	皿	在地	11.8	6	2.3	SK42	赤褐色
第37図4	京都系土師器	皿	在地	10		2.4	SK42	橙褐色 No.1
第37図5	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.4	SK42	褐色 No.2
第37図6	京都系土師器	皿	在地	10.2		2.2	SK42	橙褐色 No.3
第37図7	京都系土師器	皿	在地	16.5		2.3	SK42	黄灰色
第37図8	京都系土師器	皿	在地	15.8		2.7	SK42	淡黄褐色
第37図9	京都系土師器	皿	在地	13.6		2.3	SK42	淡黄色
第37図10	京都系土師器	皿	在地	13.1		2.5	SK42	淡黄色
第37図11	京都系土師器	皿	在地	12.6		2.2	SK42	淡黄色
第37図12	京都系土師器	皿	在地	12.5		2.0	SK42	淡黄色
第37図13	京都系土師器	皿	在地	12.6		2.4	SK42	
第37図14	京都系土師器	皿	在地	10.5		2.2	SK42	淡黄色
第37図15	京都系土師器	皿	在地	110.4		2.2	SK42	淡黄赤色
第37図16	京都系土師器	皿	在地	10.3		2.1	SK42	上部広範囲に煤付着
第37図17	京都系土師器	皿	在地	10.7		2.3	SK42	上部全周に煤付着
第37図18	陶器	甕	備前				SK42西	淡灰色
第39図1	京都系土師器	皿	在地	19.1		2.7	SK44	暗灰褐色。板状圧痕
第39図2	京都系土師器	皿	在地	12.5		2.5	SK44	淡褐色
第39図3	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.1	SK44	淡橙灰色
第39図4	在地系土師器	皿	在地	10.0	4.7	2.0	SK44	全周に煤付着
第39図5	京都系土師器	皿	在地	10.1		2.3	SK47	淡橙灰色
第39図6	在地系土師器	皿	在地	12.8	5.3	2.9	SK47	明橙色
第40図1	京都系土師器	皿	在地	14.3	2.6		SK50	
第41図1	瓦質土器	鍋	在地				SK48	灰色・内面刷毛目
第41図2	鉄製品	釘	国内				SK48	
第41図3	鉄製品	釘	国内				SK48	
第42図1	不明銭	銭	中国	2.4	3.0 g		SK48	
第44図1	京都系土師器	皿	在地	12.9		2.2	SK46	淡橙灰色
第46図1	京都系土師器	皿	在地	12.9		2.7	1区1	平面図中にある遺物
第46図2	京都系土師器	皿	在地	12.7		2.3	1区3	平面図中にある遺物
第46図3	京都系土師器	皿	在地	10.2		2.1+	1区4	平面図中にある遺物
第46図4	京都系土師器	皿	在地				2区7	平面図中にある遺物
第46図5	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.3	2区8	平面図中にある遺物
第46図6	京都系土師器	皿	在地	12.5		2.5	2区11	平面図中にある遺物
第46図7	京都系土師器	皿	在地	12.9		2.2	2区13	平面図中にある遺物
第46図8	京都系土師器	皿	在地	8.0		2.4	2区14	平面図中にある遺物
第46図9	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.2	2区15	平面図中にある遺物
第46図10	京都系土師器	皿	在地	12.7		2.3	2区16	平面図中にある遺物
第46図11	在地系土師器	皿	在地	11.6	5.5	2.4	2区18	明橙色
第46図12	京都系土師器	皿	在地	12.3		2.2	2区24	淡橙灰色
第46図13	京都系土師器	皿	在地	13.2		2.1	2区25	淡橙白色
第46図14	京都系土師器	皿	在地	10.9		2.4	2区29	平面図中にある遺物
第46図15	京都系土師器	皿	在地	10.8		1.8	2区30	平面図中にある遺物
第46図16	京都系土師器	皿	在地	10.7		2.1	2区31	平面図中にある遺物
第46図17	京都系土師器	皿	在地	10.5		1.9	2区32-1	平面図中にある遺物
第46図18	京都系土師器	皿	在地	13.0		2.0	2区32-2	平面図中にある遺物
第46図19	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.2	2区32-3	平面図中にある遺物
第46図20	京都系土師器	皿	在地	13.0		2.2	2区33	平面図中にある遺物
第46図21	京都系土師器	皿	在地	10.5		2.0	2区34	平面図中にある遺物
第46図22	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.2	2区35	平面図中にある遺物
第46図23	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.1	2区36	平面図中にある遺物
第46図24	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.2	2区37	平面図中にある遺物

府内町跡40次調査遺物観察表

挿図No.	器種	生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備考	
			口径	底径	器高			
第46図25	京都系土師器	皿	在地	10.7		2.1	2区39	平面図中にある遺物
第46図26	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.2	2区40	平面図中にある遺物
第46図27	京都系土師器	皿	在地	13.5		2.1	2区41	平面図中にある遺物
第46図28	京都系土師器	皿	在地	10.7		2.2	2区42	平面図中にある遺物
第46図29	京都系土師器	皿	在地	8.7		2.1	2区45	暗褐色
第46図30	京都系土師器	皿	在地	13.2		2.0	2区46	平面図中にある遺物
第46図31	京都系土師器	皿	在地	12.9		2.3	2区48	平面図中にある遺物
第46図32	京都系土師器	皿	在地	12.7		2.4	2区49	褐色
第46図33	京都系土師器	皿	在地	10.5		2.1	2区51	褐色・二箇所煤付着
第46図34	京都系土師器	皿	在地	7.8		2.1	2区53	褐色・二箇所煤付着
第46図35	京都系土師器	皿	在地				3区3	橙褐色
第46図36	京都系土師器	耳皿	在地	6.1		2.0	1区6	平面図中にある遺物
第47図1	褐釉陶器	四耳壺	中国南部				2区5	包含層出土
第47図2	瓦質土器	甕	在地					灰色
第47図3	陶器	播鉢	備前				2区19	赤色
第47図4	陶器	播鉢	備前				3区4	交叉すり目
第47図5	瓦質土器	鉢	国内	34.6			3区5	淡茶褐色。外面煤付着
第47図6	瓦質土器	火鉢	在地	34.0	30.0	10.8	2区21	暗灰色
第47図7	土師質土器	風炉	国内				2区63	黒色・横へう磨き
第47図8	瓦	丸瓦	在地				2区26	外面縄目・内面布目
第47図9	瓦	平瓦	在地				1区7	
第47図10	ガラス		不明			1.5g	3区1	溶融している
第48図1	瓦	平瓦	在地				2区25	
第48図2	石製品	羽口	国内					凝灰岩。溶融金属付着
第48図3	鉄製品	毛抜き	国内	7.9	0.9	14.8g		数値は長さ・幅・重さの順
第48図4	鉄製品	釘	国内	5.7	0.6	10.6g	2区61	数値は長さ・厚さ・重さの順
第48図5	鉄製品	把手	国内	12.0	0.7	18.7g	2区63	数値は長さ・厚さ・重さの順
第48図6	青花	皿	中国漳州窯		5.1		2区9	蛇の目釉割き・重ね焼き
第48図7								
第48図8	青花	皿	中国景德鎮		6.8		2区1	
第49図1	鉄製品	釘	在地	8.1	0.95	23.7g	SK8	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図2	銅製品	こはぜ	国内	2.4	0.5	1.8g	5層	表面に金付着
第49図3	銅製品	不明	国内			2.0g	5層	
第49図4	鉄製品	不明	国内	8.9	0.9	23.2g	1・2区二面	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図5	鉄製品	釘	国内	4.9	1.0	6.8g	1・2区二面	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図6	鉄製品	釘	国内	6.4	0.9	13.6g	1・2区二面	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図7	鉄製品	釘	国内	5.0	0.6	3.8g	1・2区二面	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図8	鉄製品	煙管	国内	3.2	0.9	1.4g	東部6層	数値は長さ・幅・重さの順
第49図9	鉄製品	釘	国内	4.1	0.6	3.2g	1・2区二面	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図10	鉄製品	釘	国内	3.1	0.6	1.7g	1・2区二面	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図11	鉄製品	釘	国内	3.3	0.5	2.1g	東部7層	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図12	鉄製品	釘	国内	6.3	1.0	15.3g	東部7層	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図13	鉄製品	釘	国内	5.6	0.8	9.6g	中央黒上層	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図14	鉄製品	釘	国内	2.4	0.8	3.9g	中央黒上層	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図15	鉄製品	釘	国内	6.1	0.7	11g	中央黒上層	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図16	鉄製品	不明	国内	6.8	1.1	32g	中央黒上層	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図17	鉄製品	小柄	国内	4.1	0.6	8.0g	中央黒上層	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図18	鉄製品	小柄	国内	11.8	0.8	32g	2区黒色土	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図19	鉄製品	釘	国内	3.0	0.6	2.3g	3区黒色土下位	数値は長さ・厚・重
第49図20	鉄製品	不明	国内	12.3	0.5	16.8g	2KD	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図21	鉄製品	不明	国内	4.0	0.6	10g	2区D	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図22	鉄製品	釘	国内	1.9	5.5	1.0g	3区東D	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図23	鉄製品	釘	国内	4.8	0.8	4.0g	3区東D	数値は長さ・厚さ・重さの順
第49図24	鉄製品		国内					
第49図25	鉄製品	刀子	国内	9.1	0.3	10.1g	3区西黒色土下の黒褐色土	
第50図1	京都系土師器	皿	在地	10.8		2.7	2区A	灰白色。黒色土下の黒褐色土
第50図2	在地系土師器	皿	在地	14.7	7.1	3.6	2区A	橙色
第50図3	瓦質土器	甕	国内				2区A	灰色
第50図4	白磁	碗	中国龍泉窯	16.4			3区A	
第51図1	在地系土師器	皿	在地	15.3	6.6	3.1	3区黒色土下位	淡黄褐色。板圧痕
第51図2	在地系土師器	皿	在地	12.4	6.7	2.1	3区黒色土下位	煤付着。淡黄褐色。板圧痕
第51図3	在地系土師器	皿	在地	10.3	5.9	2.1	3区黒色土下位	煤付着。橙色。板圧痕
第51図4	在地系土師器	皿	在地	12.7		2.5	3区黒色土下位	橙色。板圧痕
第51図5	在地系土師器	皿	在地	12.6	5.8	2.6	3区黒色土下位	にぶい橙色
第51図6	在地系土師器	皿	在地	12.4	7	2.7	黒色土下位	赤褐色。板圧痕
第51図7	在地系土師器	皿	在地	10.7	5.7	1.9	黒色土下位	にぶい橙色。板圧痕
第51図8	在地系土師器	皿	在地	12.1	6.3	2.4	板圧痕。橙色。3区黒色土下位	
第52図1	京都系土師器	皿	在地	13.0		2.4	3区黒色土下位	淡黄色。焼成後穿孔5
第52図2	京都系土師器	皿	在地	12.5		2.2	3区黒色土下位	淡黄色。煤付着
第52図3	京都系土師器	皿	在地					
第52図4	京都系土師器	皿	在地					
第52図5	京都系土師器	皿	在地	12.9		2.3	3区黒色土下位	煤付着。灰白色
第52図6	京都系土師器	皿	在地	12.7		2.1	3区黒色土下位	灰白色
第52図7	京都系土師器	皿	在地	13.0		2.2	3区黒色土下位	灰白色
第52図8	京都系土師器	皿	在地	10.7		2.0	3区黒色土下位	灰白色

府内町跡40次調査遺物観察表

挿図No.	器 種		生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備 考
				口径	底径	器高		
第52図9	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.3	3区黒色土下位。浅黄橙色	
第52図10	京都系土師器	皿	在地	10.1		2.1	3区黒色土下位。浅黄橙色	
第53図1	京都系土師器	皿	在地	14.8		2.2	1・2区二面 淡黄灰色。見込みに刷毛状調整D	
第53図2	京都系土師器	皿	在地	14.5		2.5	12区二面 淡黄灰色。黒色土下の黒褐色土	
第53図3	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.3	3区東 黒色土下の黒褐色土	
第53図4	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.0	2区 黒色土下の黒褐色土	
第53図5	京都系土師器	皿	在地	12.6		2.2	2区東 灰白色。黒色土下の黒褐色土	
第53図6	京都系土師器	皿	在地	10.2		2.3	3区東 淡黄色。黒色土下の黒褐色土	
第53図7	京都系土師器	皿	在地	13.2		2.5	2区 黒色土下の黒褐色土。淡橙白色	
第53図8	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.1	3区 淡黄色。黒色土下の黒褐色土	
第53図9	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.4	3区東部 淡黄赤色。黒色土下の黒褐色土	
第53図10	京都系土師器	皿	在地	10.2		2.0	2区 黒色土下の黒褐色土	
第53図11	京都系土師器	皿	在地	10.3		2.1	2区 黄灰色。黒色土下の黒褐色土	
第53図12	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.4	3区東部 淡黄色。黒色土下の黒褐色土	
第53図13	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.4	2区 黒色土下の黒褐色土。淡橙白色淡黄灰色	
第53図14	京都系土師器	皿	在地	9.1		2.0	3区東部 黄橙色。黒色土下の黒褐色土	
第53図15	京都系土師器	皿	在地				4区 黒色土下の黒褐色土	
第53図16	京都系土師器	皿	在地	8.7		2.3	1・2区二面 淡黄色。煤一箇所付着D	
第53図17	京都系土師器	皿	在地	8.7		2.2	2区 淡黄灰色。黒色土下の黒褐色土	
第53図18	京都系土師器	焼塩壺蓋	在地				2区東部 黒色土下の黒褐色土	
第53図19	京都系土師器	焼塩壺蓋	在地	4.6	4.0	1.6	3区東部 淡黄色。黒色土下の黒褐色土	
第54図1	在地系土師器	皿	在地	11.8	3.3	6.0	2区。黒色土下の黒褐色土。にぶい橙色   黒色土下の黒褐色土	
第54図2	在地系土師器	皿	在地	12.4	2.7	6.9	4区 黒色土下の黒褐色土・片側に煤	
第54図3	在地系土師器	皿	在地	11.2	8.3	2.9	4区 黒色土下の黒褐色土	
第54図4	在地系土師器	皿	在地	11.9	2.3	7.15	4区 黒褐色土	
第54図5	在地系土師器	皿	在地	11.7	2.55	6.8	3区 黒色土下の黒褐色土。板圧痕	
第54図6	在地系土師器	皿	在地	8.2	1.7	5.1	3区東 黒色土下の黒褐色土D。板圧痕	
第54図7	在地系土師器	皿	在地	14.7	7.1	3.6	2区A 橙色	
第54図8	在地系土師器	皿	在地				3区 赤褐色。黒色土下の黒褐色土	
第54図9	在地系土師器	皿	在地	12.9	3.7	6.8	2区 黒色土下の黒褐色土	
第54図10	在地系土師器	皿	在地				3区 暗赤褐色。黒色土下の黒褐色土	
第54図11	在地系土師器	皿	在地	32.0			2区 黒色土下の黒褐色土	
第55図1	瓦質土器	火鉢	在地	32.0			2区 黒色土下の黒褐色土	
第55図2	瓦質土器	火鉢	在地		15.2		3区西D 暗灰色	
第55図3	瓦質土器	火鉢	在地				2区 黒色。黒色土下の黒褐色土D	
第55図4	瓦質土器	火鉢	在地		26.3		4区 黒色土下の黒褐色土	
第55図5	瓦	平瓦	在地				3区東部 黒色土下の黒褐色土	
第56図1	瓦	平瓦	在地				3区	
第56図2	瓦	平瓦	在地				3区東DE 東E+D	
第56図3	瓦	平瓦	在地				3区東部 黒色土下の黒褐色土	
第57図1	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.6	3区 浅黄橙色・黒褐色土層	
第57図2	京都系土師器	皿	在地	10.3		2.5	3区東部 浅黄橙色・黒褐色土層・煤付着	
第57図3	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.2	3区東部 浅黄橙色・黒褐色土層	
第57図4	京都系土師器	皿	在地	10.4			4区東部 浅黄色・黒褐色土層	
第57図5	京都系土師器	皿	在地	9.0	2.2	7.3		
第57図6	京都系土師器	皿	在地	9.4	2.2	6.8	黒褐色土	
第57図7	在地系土師器	皿	在地	9.0	7.3	2.2	4区 にぶい橙色・黒褐色土層	
第57図8	在地系土師器	皿	在地	9.4	7.5	2.2	4区 にぶい橙色・黒褐色土層	
第57図9	在地系土師器	皿	在地	9.4	7.2	2.3	4区 にぶい橙色・黒褐色土層	
第57図10	在地系土師器	皿	在地	10.0	9.2	3.2	3区東部 橙色・黒褐色土層	
第57図11	在地系土師器	皿	在地	11.9	7.2	2.3	4区 にぶい橙色・黒褐色土層	
第57図12	石製品	鍋	長崎				4区E 40. 2g	
第58図1	瓦	平瓦	在地				3区東部 東F	
第59図1	白磁	碗					SK12	
第59図2	白磁	小坏	中国			20.5	SK12	
第59図3	陶器	天目碗	瀬戸美濃				SK12	
第59図4	弥生土器	壺	在地				SK12 淡茶褐色	
第59図5	鉄製品	釘	在地				SK12	
第59図6	在地系土師器	皿	在地	10.5	5.8	2.0	攪乱1 にぶい黄橙色	
第59図7	京都系土師器	皿	在地	10.2		2.1	南側攪乱層 にぶい黄橙色	
第59図8	瓦質土器	鍋	在地				南側攪乱層 灰黄褐色	
第59図9	瓦質土器	甕	在地				攪乱 にぶい黄橙色	
第59図10	陶器	播鉢	備前				南側攪乱層	
第59図11	陶器	肥前	備前				南側攪乱層	
第59図12	陶器	播鉢	備前				2区中央F	
第60図1	京都系土師器	皿	在地	17.0		2.6	2区中央F 淡黄色。見込み部刷毛状なで	
第60図2	京都系土師器	皿	在地	16.8		2.2	2区中央F 灰白色。見込み部刷毛状なで	
第60図3	京都系土師器	皿	在地	16.0		2.6	3区東F にぶい橙～褐灰色	
第60図4	京都系土師器	皿	在地	14.7		2.2	2区中央F 見込み部刷毛状なで・にぶい黄橙色	
第60図5	京都系土師器	皿	在地	14.9		2.6	2区中央F 灰白色。見込み部刷毛状なで	
第60図6	京都系土師器	皿	在地	14.8		2.3	2区中央F 見込み部刷毛状なで。灰白色	
第60図7	京都系土師器	皿	在地	8.5		1.9	1区西二面 灰白色	
第60図8	京都系土師器	皿	在地	10.8		2.6	2区中央F 灰白色	
第60図9	京都系土師器	皿	在地	10.7		2.2	2区中央F 淡黄色	
第60図10	京都系土師器	皿	在地	11.0		2.5	2区中央F 暗灰黄色	

府内町跡40次調査遺物観察表

挿図No.	器 種		生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備 考
				口径	底径	器高		
第60図11	京都系土師器	皿	在地	8.0		1.8	2区中央F	焼成前穿孔3あり・淡黄色
第60図12	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.3	2区中央F	灰白色
第60図13	京都系土師器	皿	在地	10.0		2.1	2区中央F	煤・にぶい黄橙色
第60図14	京都系土師器	皿	在地	12.0	5.6	3.2	3区東F	橙色
第60図15	京都系土師器	焼塩壺蓋	在地	5.0		1.5		焼成後穿孔1あり
第60図16	京都系土師器	焼塩壺蓋	在地	5.2	1.6		2区中央F	淡黄褐色
第60図17	京都系土師器	焼塩壺蓋	在地	5.3		1.6	1・2区西F	淡黄色
第60図18	京都系土師器	焼塩壺蓋	在地	5.0		1.5	1・2区西F	淡黄色
第60図19	青磁	碗	中国龍泉窯				3区地山直上	
第61図1	京都系土師器	皿	在地	16.6		2.4	1・2区二面	見込み刷毛状なで。淡黄色
第61図2	京都系土師器	皿	在地					
第61図3	京都系土師器	皿	在地					
第61図4	京都系土師器	皿	在地					
第61図5	京都系土師器	皿	在地	10.4		2・2	1区二面4.3m	淡黄色。煤付着
第61図6	京都系土師器	皿	在地	10.0		1.95	1・2区二面	淡黄色
第61図7	京都系土師器	皿	在地	10.9		2.1	1区二面	淡黄色
第61図8	在地系土師器	皿	在地	11.6	5.6	2.9	1・2区二面	茶褐色
第61図9	瓦質土器	火鉢	在地				1区二回目地山4.3m	
第61図10	陶器	鉢	瀬戸美濃	21.6			1・2区二面	
第61図11	弥生土器	壺	在地				1・2区二面	茶褐色
第61図12	陶器	甗	常滑				2区二面	
第61図13	瓦	平瓦	在地				1区二回目地山	
第61図14	鉄製品	鉢	国内	10.3		64.7g	1区二回目地山4.3m	
第61図15	鉄製品	釘	国内	4.9	1.0	6.8g	1・2区二面	
第61図16	鉄製品	釘	国内	4.1	0.6	3.2g	1・2区二面	
第61図17	鉄製品	釘	国内	3.1	0.6	1.7g	1・2区二面	
第61図18	鉄製品	釘	国内	5.2	0.6	10.4g	1・2区二面	
第61図19	鉄製品	釘	国内	4.2	0.8	7.3g	1・2区二面	
第61図20	鉄製品	釘	国内	5.0	0.6	3.8g	1・2区二面	
第61図21	鉄製品	釘?	国内	4.6	0.5	7.0g	1区二面	
第61図22	鉄製品	釘	国内	6.1	0.9	13.6g	1・2区二面	
第61図23	鉄製品	釘	国内	4.0	0.6	2.1g	1区二面	
第61図24	鉄製品	釘	国内	6.5	1.1	17.4g	1区二回目地山4.3m	
第61図25	鉄製品	不明	国内	8.9	0.9	23.2g	1区二回目地山4.3m	
第62図1	土師質土器	鍋	国内	25.8			4層	にぶい橙色
第62図2	白磁	皿	中国		5.9		4層	
第62図3	陶胎染付	碗	国内				4層	
第62図4	瓦質土器	掃鉢	国内				西5層	淡灰白色
第62図5	陶器	掃鉢	備前				西5層	交叉すり目
第62図6	陶器	壺	備前					中央5層+東5層
第62図7	須恵器	高台付碗	国内		8.2		東5層	
第62図8	白磁	皿	中国	10.5			西5層	
第62図9	陶器	碗	唐津	12.9			東6層	外面下部2mm無釉
第62図10	瓦質土器	火鉢	国内				東6層	淡茶褐色。梅花紋
第62図11	青花	皿	中国景德鎮窯				東6層	
第62図12	陶器	壺	備前				中央6層	
第62図13	陶器	壺	備前				中央6層	明赤褐色
第62図14	須恵器	甗	国内				中央6層	外面叩き・内面同心円紋
第62図15	土師質土器	高杯	国内				東6層	橙色
第62図16	陶器	壺	備前				東6層	
第62図17	陶器	壺	備前				西6層	淡灰色
第62図18	白磁	皿	中国南部	13.6	6.8	3.0	西6層	口縁上部内外釉
第62図19	青磁	碗	中国		4.0			4層60+東7層
第62図20	陶器	甗	備前				東7層	灰褐色
第62図21	青磁	皿	中国				中央6層	明緑灰色
第63図1	不明			2.4	2.1g		2区-44	
第63図2	不明			1.8	1.1g		2区黒色土	
第63図3	元豊通宝	1078	北宋	2.4	1.8g		2区-12	
第63図4	き寧元豊	1068	北宋	2.4	2.8g		2区褐色土層	
第63図5	雁首銭	近世	国内	1.8	1.1g		4層	
第63図6	開元通宝	621	唐	2.4	1.9g		4層	
第63図7	開元通宝	621	唐	2.4	2.0g		SK7	
第63図9	不明銭			2.3	1.4g		SK48	
第64図1	京都系土師器	皿	在地	13.2		2.1	北壁16	淡灰色
第64図2	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.4	北壁16	淡橙白色
第64図3	京都系土師器	皿	在地	11.1		2.1	北壁16	淡橙白色
第64図4	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.6	北壁16	淡灰褐色
第64図5	陶器	掃鉢	備前				北壁No.2	交叉すり目。外面にもすり目
卷末カラー1	青花	碗	中国景德鎮窯				表面採集	
卷末カラー2	白磁	碗	中国				表面採集	
卷末カラー3	陶器	皿	内野山窯					1600~1650年代
卷末カラー4	青花	碗	中国潭洲窯				攪乱	
卷末カラー5	青花	碗	中国潭洲窯				2層	
卷末カラー6	染付け	碗	肥前				4層	
卷末カラー7	青花	碗蓋	肥前				4層	



挿図No.	器 種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備 考
				口径	底径	器高		
卷末カラー8	青花	碗	中国景德镇窯				4層	
卷末カラー9	青花	皿	中国景德镇窯				4層	
卷末カラー10	青磁	碗	中国龍泉窯				4層	
卷末カラー11	青花	碗	中国景德镇窯				5層	
卷末カラー12	青花	皿	中国景德镇窯				5層	
卷末カラー13	青花	皿	中国景德镇窯				5層	
卷末カラー14	青花	碗	中国景德镇窯				5層	
卷末カラー15	青花	碗	中国景德镇窯				5層	
卷末カラー16	青花	碗	中国景德镇窯				5層	
卷末カラー17	青花	碗	中国漳州窯				5層	
卷末カラー18	青花	碗	中国景德镇窯				5層	
卷末カラー19	青花	基筭底皿	中国漳州窯				5層	
卷末カラー20	褐釉陶器	壺	中国				5層	21と同一個体
卷末カラー21	褐釉陶器	壺	中国				5層	
卷末カラー22	青花	碗	中国景德镇窯				6層	
卷末カラー23	青花	皿	中国漳州窯				6層	波縁
卷末カラー24	青花	碗	中国景德镇窯				6層	
卷末カラー25	青花	碗	中国漳州窯				6層	
卷末カラー26	青花	碗	中国漳州窯				5層	
卷末カラー27	青花	碗	中国漳州窯				6層	
卷末カラー28	青花	碗	中国漳州窯				6層	
卷末カラー29	青磁	碗	中国龍泉窯				6層	
卷末カラー30	青花	碗	中国景德镇窯				6層	
卷末カラー31	青花	碗	中国景德镇窯				6層	
卷末カラー32	青花	碗	中国景德镇窯				6層	
卷末カラー33	青花	碗	中国景德镇窯				6層	
卷末カラー34	陶器	壺	中国漳州窯				6層	
卷末カラー35	青花	碗	中国景德镇窯				第二検出面	
卷末カラー36	陶器	型押皿	中国華南				3区包含層	
卷末カラー37	青花	皿	中国景德镇窯				3区包含層	
卷末カラー38	青磁	皿	中国龍泉窯				3区包含層	
卷末カラー39	青花	皿	中国漳州窯				2区包含層	
卷末カラー40	青花	皿	中国漳州窯				4層	
卷末カラー41	青花	碗	中国漳州窯				西中央焼土	
卷末カラー42	青花	碗	中国漳州窯				黒色土上位	
卷末カラー43	青磁	碗	中国龍泉窯				黒色土上位	
卷末カラー44	青花	皿	中国漳州窯				黒色土上位	
卷末カラー45	五彩	碗	中国景德镇窯				黒色土上位	
卷末カラー46	青花	皿	中国景德镇窯				黒色土上位	
卷末カラー47	青花	壺	中国景德镇窯				黒色土直下	
卷末カラー48	青花	動物	中国景德镇窯				黒褐色土	
卷末カラー49	青磁	碗	中国景德镇窯				黒褐色土	
卷末カラー50	青花	皿	中国景德镇窯				1・2区地山	
卷末カラー51	陶器	舟德利	朝鮮				1・2区地山	

## 第3章 まとめ

特徴

中世大友府内町跡第40次調査区の特徴は、土師器皿の出土量が他の器種に比べて多いことである。地形は東側に向かう斜面となっており、そこに廃棄を繰り返し行った状況であった。「大分市史」提示の「戦国時代の府内復元想定図」では、大友氏館跡の東側を通る第2南北街路の東側にあたる。国道10号拡幅工事に伴う本調査区北側の府内町第9次調査区と南側の第13次調査区は「御内町」に比定されており、両者に挟まれた本調査区も「御内町」に該当すると思われる。

調査の結果、検出した遺構は14世紀代の大型土坑が一基あった他はすべて16世紀前葉以降に始まる遺構であり、遺物も例外的破片以外は同様であった。小範囲の調査であったが、大友城下町の時間的展開について重要な資料になると考える。以下では、遺構の変遷について数段階に分けて述べる。

### 1. 斜面の埋没について

14世紀

14世紀前葉の遺構は中世の地山で検出したSK48である。内部からは礫が少量と瓦質土器片1点が出土しただけで、ゴミ穴とも考えられない。1点だけ出土した瓦質土器は山本分類の鍋B1類(山本哲也2007)にあたり、14世紀中頃とみられるが、遺構の時期を示すとは断言できない。標高約4mの地山はこの場所から東は斜面に移行(標高3m弱)するので、平坦面の末端を利用したものとみられる。西部が平坦面で東部が一段低いという状況は、第40次調査区の北側調査区である第12次・18次・28次調査区でも確認され、形成原因について16世紀第3四半期の人為的な掘削と考えられている。埋め土の最下層から京都系土師器2期の遺物や漳州窯製品が出土すること、16世紀第3四半期に建設されたと想定される街路を避けて分布すること等の理由である(坂本嘉弘2006)。

本調査区の低地部は、16世紀前葉～中葉に比定される(京都系土師器1期に在地系の内面にロクロ目を残す土師器が共存する)段階から16世紀末葉までの長期にわたり、遺物やゴミの廃棄等によって次第に標高を高めている。前記の諸調査区のように人為的に一気に整地した状況は認められない。本調査区に近い北側の第9次調査区(「豊後府内4」2006)でも東半分には標高4mから3m弱まで下がる斜面が認められるので、自然地形の連続が第40次調査区から続いていたようである。

### 2. 町割りにについて

御内町

調査区が狭小で、遺構の配列方向は明らかに出来なかった。線路の北側では府内町跡第9次調査I・II区において、府内古図にある館の東側を東西に走る「御所小路」に比定される中世の道路跡等が検出され、第9次調査区的位置は「御内町」に想定されている。また、南側では第13次調査が行われ、字図の境界と一致する南北方向の溝を確認した。検出した町屋の方向性から西側を南北に走る第2南北街路を意識した構成と捉え、南側の「堀之口町」ではなく、ここも「御内町」に想定している。第40次調査区では近世のSD1や、この東部で重複し幅の狭いSD19を検出した。SD19は出土した肥前系磁器から17世紀中頃と推定した。南側の第13次調査区では南北方向の溝SD097・SD098があり、SD097は古くとも16世紀後葉～末葉以降に掘られたと考えられている。位置・方向・年代等からこれらは同一の溝状遺構とみられ、第13次調査の報告書によれば、明治20年前後に作成された字図の区画に一致する。南北両側の調査区が御内町と想定されること、南側調査区と一体の溝状遺構が存在すること等から、第40次調査区の場合も中世の「御内町」に該当するようである。斜面に土師器類の多量廃棄が行われたのは、大友氏館周辺で宴会・儀式等を行ったことを反映するとみられる。



# 遺構一覽表

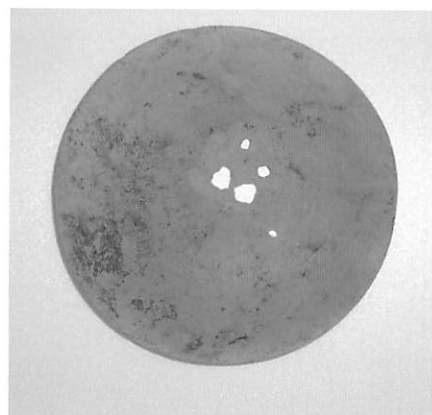
第1表 40次調査区遺構一覧表

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	検出標高	遺構の時期	出土遺物
SD1	S001	溝	4.66m	近世以降	備前焼
SD2	S002	溝	4.55m	近世以降	
SP3	S003	土坑	4.64m		なし
SK4	S004	土坑	4.48m	16世紀後葉～末葉	備前焼挿鉢
SK5	S005	土坑	4.50m	16世紀末葉～17世紀中頃	京都系土師器3期
SK6	S006	土坑	4.50m	16世紀後葉～末葉	備前焼大甕・政和通宝
SK7	S007	土坑	4.50m	16世紀後葉～末葉	
SK8	S008	土坑	4.50m	16世紀中葉～後葉	京都系土師器1期
	S009	柱穴	4.50m		
	S010	柱穴	4.47m		
SK11	S011	土坑	4.36m	16世紀前葉～中葉	京都系土師器1期
SK12	S012	土坑	4.50m	16世紀後葉～末葉	備前焼挿鉢
	S013	柱穴	4.47m		
	S014		4.172m		
	S015		4.960m		
	S016		4.951m		
	S017		4.957m		
	S018	溝	4.959m	17世紀中葉以降	
SD19	S019	溝	3.82m	17世紀中葉前後	京都系土師器3期
	S020				
	S021		4.270m		
	S022	柱穴	4.280m		
SK23	S023	土坑	4.39m	16世紀後葉	ガラス
SK24	S024	土坑	4.315m	16世紀末葉	京都系土師器2期
SK50	S24の下	土坑	3.680m	16世紀前葉～中葉	図中に京都系土師器1点
SK25	S025	土坑	4.38m	16世紀中葉～後葉	京都系土師器2期
SX26	S026	集石	3.62m～3.9m	16世紀後葉～末葉	
	S027	欠番			
	S028	欠番			
SK29	S029	土坑	3.69m	17世紀中葉前後	京都系土師器1期
	S030	土坑			
SK31	S031	土坑	3.93m	16世紀末葉	京都系土師器3期
	S032	欠番			
SK33	S033	土坑		16世紀前葉～中葉	京都系土師器1期
SK34	S034	土坑		16世紀中葉～後葉	京都系土師器2期
	S035				
SE36	S036	井戸		16世紀中葉～後葉	
	S037	柱穴	4.272m		
	S038	柱穴	4.684m		
	S039		3.235m		
	S040	柱穴	4.644m		
	S041	柱穴	3.3m		
	S042	遺物廃棄	3.23m以下	16世紀前葉～中葉	京都系土師器1期
	S043		3.09m以下		
SD44	S044	溝	3.38m		
SK45	S045	土坑	3.13m	16世紀前葉～中葉	
SK46	S046		3.4m以下	16世紀前葉～中葉	京都系土師器1期
SK47	S047	土坑	3.2m	16世紀前葉～中葉	京都系土師器1期
SK48	S048	土坑	4.94m	14世紀	
SK49	S049	土坑	4.94m	14世紀	

# 写真図版



1区・2区発掘状況



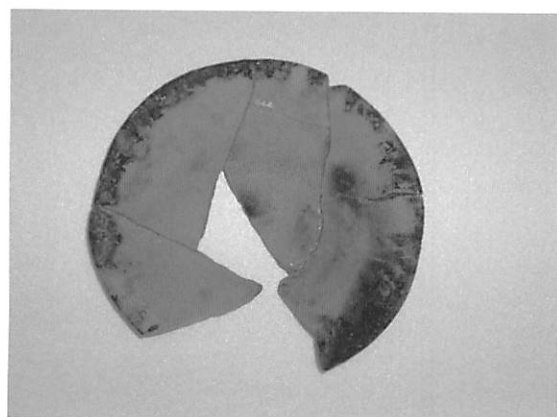
穿孔のある京都系土師器



穿孔のある蓋



常滑焼



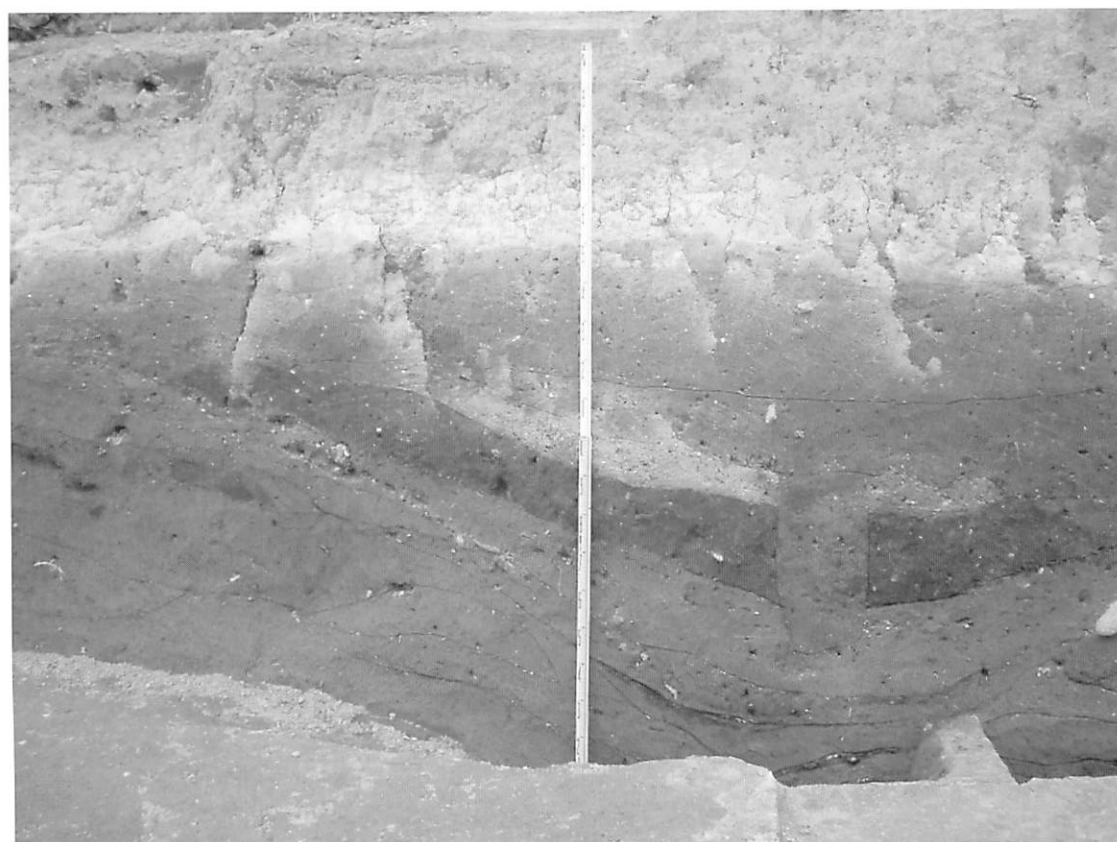
煤の付着した燈明皿



燈明皿



上部遺構検出状況



北壁断面 (SP30周辺)





SK11



SK24



SX26



備前焼播鉢出土状況状態



2区16世紀前葉京都系土師器



最上層の攪乱遺構



SK 8



最下層



攪乱溝

SD 1 (右)



1区・2区上層遺物出土



SD44・SK47



1区・2区西部の16世紀



SD44



SK31

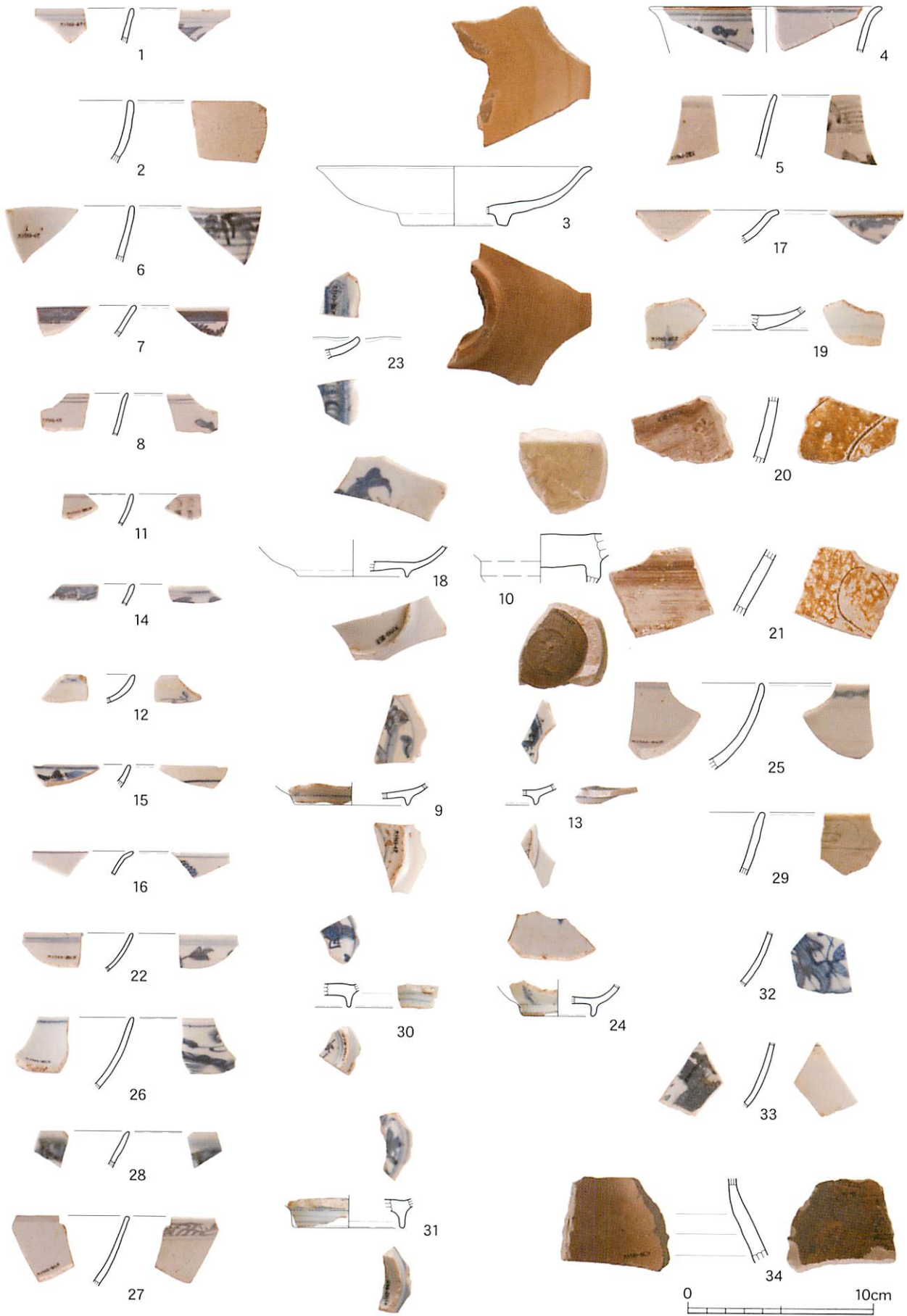


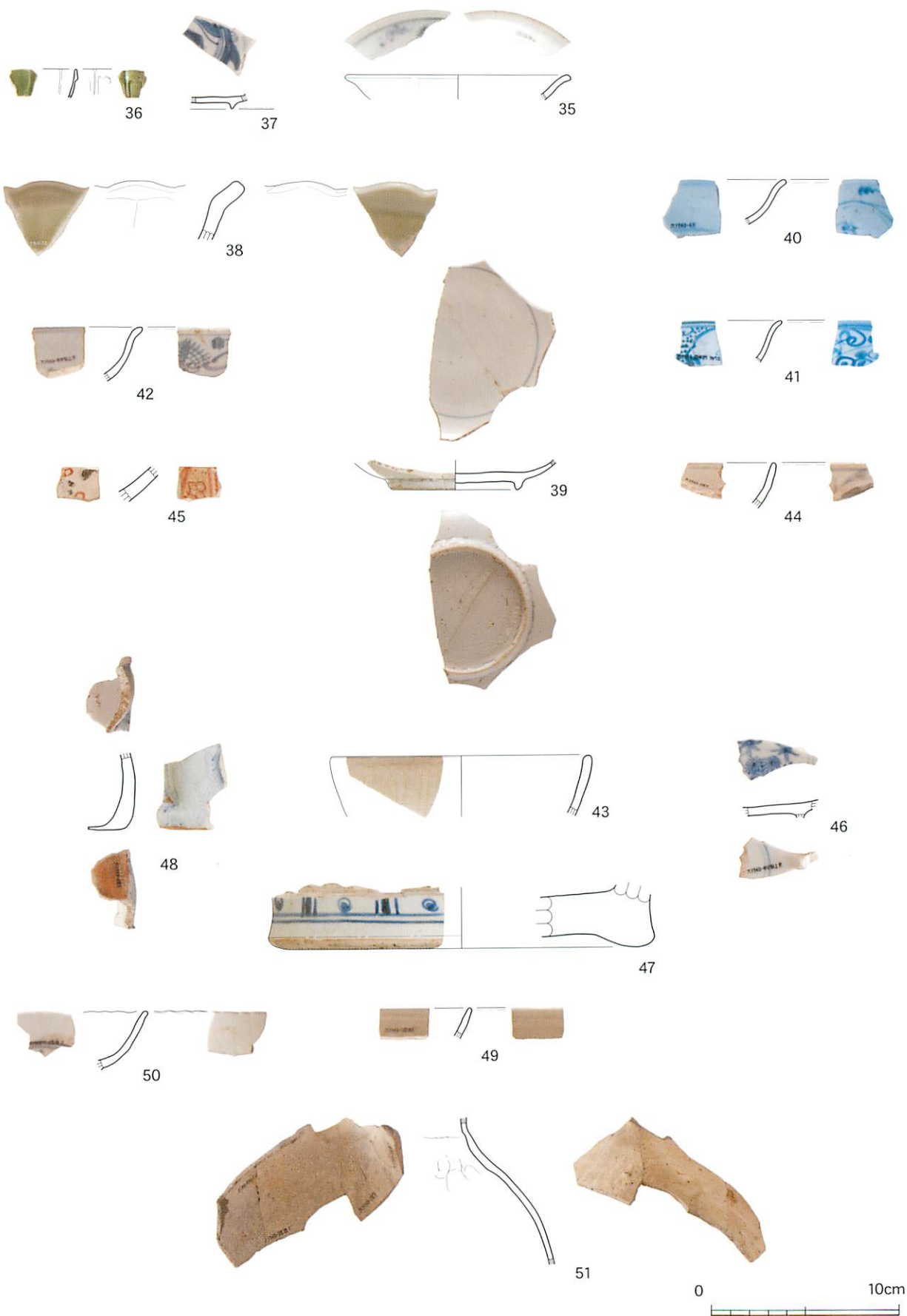
SK45





真上からの空撮写真





## 報 告 書 名 抄 録

ふりがな	ぶんごふない10ちゅうせいおおともじょうかまちあとだい40じちょうさ
書 名	豊後府内10 中世大友城下町跡第40次調査
副 書 名	大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（6）
巻 次	(10)
シ リ ーズ 名	大分県教育庁埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シ リ ーズ 番 号	第26集
編 著 者 名	高橋信武
編 集 機 関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所 在 地	〒870-1113 大分市中判田1977
発 行 年 月 日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
大友 府内町跡 第40次 調査区	大分市元町	322	051	33° 13' 45.03"	131° 37' 09.12"	20040420 ～ 20040525	大分駅周辺 高架化事業

---

---

## 豊後府内10

中世大友府内町跡第40次調査区

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（6）

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第26集

平成20(2008)年3月25日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター  
〒870-1113  
大分市字中判田字ピアノ門1977番地  
TEL (097) 597-5675

印刷 株式会社プリメディア  
〒874-0923  
別府市新港町1-13  
TEL (0977) 23-3288

---

---